

遊戯王ARC—V—奇術師と呼ばれたデュエリストのセカンドライフ—

えんとつそうじ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

——これはかつて『奇術師』と恐れられたデュエリストの第二の人生の物語。

※1これは前作である「遊戯王ARC-V」転生の奇術師」のりメイク版です。暇つぶしにでもお読みください。

## 目次

プロローグ	奇術師の転生	1	
LDS襲来編			
第一話	奇術師の現状	9	
第二話	奇術師の帰国。	24	
第三話	奇術師の決闘VS異次元の王①伝説の魔導師	34	
第四話	奇術師の決闘VS異次元の王②“奇術師”クオン・遊灯	45	
第五話	奇術師の決闘VS異次元の王③“天才”赤馬零児	56	
第六話	奇術師の決闘VS異次元の王④天才の本気	68	
第七話	奇術師の決闘VS異次元の王⑤悪魔のペンデュラム	84	
謎の襲撃者編			
奇術師の設定紹介※ネタバレあり			109
第八話	兄弟対決!?! VS 遊矢①ペンデュラム召喚	112	
第九話	兄弟対決!?! VS 遊矢②奇術師と道化の激突	125	
第十話	兄弟対決!?! VS 遊矢③榊遊勝	133	
お気に入り300人突破記念嘘CM「ストラクチャーデッキクオ			
ン編			147
遊戯王ARC-Vifく怒りに目覚めた希望く			151

## プロローグ 奇術師の転生

——かつて、フランスで名声を欲しい俤にした一人の奇術師がいた。

その奇術師はその際立った容姿と卓越した技により、最愛の恋人でもあるアシスタントと共に瞬く間に一般大衆を魅了し、世界で最も華麗な奇術師として一躍スターダムに押し上がる。

美しき恋人と共に公私ともに充実し、幸せの絶頂にいた奇術師であつたが、そんなある日何時ものようにステージで自慢の奇術を披露していたのだが、その中でも特に大掛かりなものの一つである脱出マジックに失敗し顔中に大怪我を負ってしまい、男はあつという間に奇術師としての全ての名声を失ってしまった。

自慢の容姿と、今まで順調に積み上げてきた名声を失つたことで失意のどん底にいた奇術師。

アシスタントである恋人は必死で奇術師を慰め、なんとか立ち直らせようとしたが、もはや人生に絶望し、未来に希望を見出せないでいた奇術師は自暴自棄になつてしまい、彼女を冷たく突き放し、そのためその恋人も奇術師に愛想が尽きたのか、それとももう奇術師の姿を見ていられなかつたのか、恋人もいつの間にか奇術師の元から去つていく。

最愛の恋人おも失つてしまった奇術師は、彼女と離別してしまった悔恨の念も相まって自暴自棄になつてしまい、墮落した日々を送っていたのだが、そんな彼の前にある日一人の男が現れる。

その男の名はマリク・イシュタール。

世界的なデュエルファイア「グルーズ」の首領である彼は、この時自らの駒となりうる有能な人材を求めており、ある日、過去にデュエルモンスターズのフランス大会での優勝経験を持つこの奇術師の話聞き、彼を自らの組織に取り込むためにこうして彼の前に姿を現し

たのだ。

本来の奇術師の人格ならば、悪名高いグルズのボスからの勧誘など一個だにしなかつたろうが、この時は最愛の恋人と離別してしまつたことへの悔恨により精神が極度に不安定だつたということ、そしてマリクがそんな彼の状態につけこむようにして、自らの所持する千年アイテム千年杖せんねんロッドの力を使用したために、奇術師はマリクの誘いに乗り、マリクの目的である、名もなき王フアラオの魂を持つデュエリストの抹殺を果たした暁には、マリクの千年ロッドの力で恋人の愛を取り戻し、その恋人と故郷フランスで一からやり直させることを条件に、グルズの尖兵。レアハンターの一人として、マリクへと忠誠を誓うのだった。

そしてレアハンターの一員となつた奇術師は、その卓越したデュエルタクティクスとマジシャンならではの心理戦の強さにより、瞬く間に数多くのデュエリスト相手に勝利をおさめ、あつという間にレアハンターNo.2の地位にまで上り詰める。

これは、マリクの腹心であるリシドに次ぐ立ち位置であり、組織全体から見たら上から3番目の地位にあたることから、この奇術師のデュエリストとしての腕前がどれほど凄まじいものであつたかということが窺い知ることができらるだろう。

そして、後に伝説として語られることになる、3枚の神のカードをめぐる戦場「戦場都市バトルシティ」。奇術師はマリクの命令により、名もなきフアラオの魂を持つとされるデュエリスト、後に決闘王デュエルキングと称された少年と戦い……そして敗れた。

奇術師は自らのエースモンスターの力を最大限に生かすために、グルズの技術によってコピーされたレアカードなども用いて、自身のできるかぎりの最高のデッキを作り、心理的に勝負を優位に進めるために、デュエル場に特別な仕掛けを施して、デュエリストとしての腕にマジシャンとしての技術。まさしく自分の全てを持って奇術師は少年との勝負に挑み、その甲斐あつて奇術師は少年を敗北ぎりぎりまで追い詰めることに成功したのだが、しかし恋人の愛を取り戻すためとはいえ、手段を選ばなすぎた奇術師は、カードとの絆の強さ

の差で少年に逆転され、そして敗北してしまうこととなる。

そして奇術師は少年とのデュエルに敗北した罰として、マリクの千年ロッドの力により奇術師はその心を壊しかけてしまう。

しかし奇術師を破った少年が、そのままバトルシテイの決勝戦でマリクを打ち破ったことにより、千年ロッドの力が消えたために、奇術師はなんとか心を持ちなおすことができた。しかしそれは奇術師にとって新たな絶望のはじまりだった。

それはなぜか？千年ロッドの力によるマリクからの洗脳が解けると同時に、奇術師はとある真実を思い出してしまったからだ。……最愛の恋人が死んでしまっていたという真実を。

★ ★

前述したように、奇術師がグルーズの一員になっていた理由は、マリクの千年ロッドの力により恋人の愛を取り戻し、以前の生活を取り戻すためだったのだが、実はその問題の恋人は既に死亡していたのだ。

死んだ理由は事故死。実は奇術師が脱出マジックの失敗により顔中に火傷を負ってしまったあの事件。本当は被害者は奇術師だけではなく、奇術師を助けようとして炎の中に飛び込んでしまい、その時に崩れ落ちる機材に巻きこまれて恋人が死んでしまったのだ。

奇術師が精神的に憔悴していたのも、自暴自棄になっていたから、自身の名声を失っただけではなく、最愛の恋人を自分のミスのせいで永遠に失ってしまった悔恨の念からだった。

超常のアイテムである千年ロッドの力を持ってしまっても死者を蘇らすことはできない。だが奇術師の力量を惜しいと考えたマリクが、千年ロッドの力で奇術師の記憶を改竄し、恋人は死んだのではなく自らに愛想を尽かして去っただけと錯覚させたのだ。

全てを思い出して、深い後悔の念と無力感。そして絶望に苛まれた奇術師は、皮肉にもしばらくの間はマリクに改竄された昔の記憶のと

おり、自暴自棄な生活を送ることとなってしまふ。

もう、彼女がいないこの世界など生きていても仕方ない。いつそ死んでしまおうかと、自殺まで考えるまでに追い詰められていたのだが、そんなある日。とあることがきっかけで、奇術師は再び表舞台にその姿を現すこととなる。

それは奇術師がなんとなしに久方ぶりに外に出かけた時、その途中で公園のベンチで奇術師がボーっとしていると、どこからともかく子供の泣き声が聞こえてきた。

その声を聞きつけた奇術師がのろのろと顔をそちらに向けると、そこにはおそらく転んだのであろう、膝を押さえながら大声で泣き喚く小さな男の子と、そんな彼の様子にどうすればいいかわからず、その周りでおろおろしているその男の子の姉らしき女の子の姿があった。女の子は困惑しながらも必死で男の子を泣き止ませようとするが、それでも男の子は泣き止まず、終いには女の子まで一緒に泣き出してしまった。

奇術師はそんな彼らの様子に、初めは放っておこうとしたが、彼らの姿に昔の自分と恋人の姿を重ねてしまい、どうにもそのままにしておくことができず、ベンチから立ち上がると、その男の子たちの目前にまで歩み寄る。

子供たちは、突如自分たちの前に現れた大人を、しゃくり上げながらも不思議そうな眼で見上げるが、奇術師はそんな子供たちにかまわず、にっこりと笑うと、子供たちの涙を止めるため、彼らの目の前で簡単なマジックを披露しはじめる。

いくら自堕落な生活を送っていたとはいえ、彼もかつては超一流といわれたマジシャン。長年の習慣からマジックの種は体中に仕込んでおり、そのおかげで、広場では彼の手による簡単なマジックショーが披露されることとなった。

そして全てのマジックを披露し終えた奇術師は、いつの間にか泣き止んで、キラキラとした瞳でこちらを見上げてくる子供たちや、いつの間にか彼の周りに集まっていた通行人の人々が自分に向かって笑顔で万雷の拍手を送っているのを見て、ふと思いつく。

そういえば、自分が奇術師としての道を歩むことになったのは、世界中の人々のこんな笑顔が見たかったからだということに。そして、そんな自分の夢をアシスタントとして応援してくれたのが、恋人であった彼女だということも。

それを思い出した奇術師は思わずといった感じで口元に笑みを浮かべる。自分はこんなことも忘れていたのかを。

そんな彼が浮かべる笑みは、ここ最近彼が常に浮かべていた暗くどこか諦めたような笑みではなく、どこか憑き物が落ちたような穏やかな笑みだった。

そして、この出来事がきっかけで彼は再びマジシャンとしての道を歩むことを決意する。

最愛の恋人が応援してくれていた自身の夢。命がけで自分を助けてくれようとした彼女のためにも、その夢を叶えるために。



復帰を決意した奇術師は、現役時代に交流を持った友人知人。そして元スポンサーの何人かに自らの夢の話をし賛同を得て援助を得ると、自分の思想に賛同してくれた同土何人かと世界中を飛び回り様々な場所でマジックショーを披露するようになる。

それこそ、ハリウッドのスタジアムのような大規模な場所はもちろん、デパートの屋上や貧しい者たちが住むスラム。はたまた銃弾行きかう戦場など、恋人が応援してくれたかつての夢を叶えるために自分の身の危険を顧みず、世界中を練り歩き、自慢のマジックを披露し続けた。

様々な批判や罵倒を受けながらも、それでも彼らはめげずに人々の笑顔を見続けるために活動し続けた結果、彼らの行為が世界平和に貢献していると評価され、そのリーダーである奇術師はその功績と世界最高峰の技術が評価され、奇術師はその団体を代表して、マジシャンとして世界で初めて世界ノーベル平和賞。そしてマジシャンとして

の最高の榮譽である『マジック・オブ・ザ・イヤー』を受賞する。

奇術師はその授賞式で会場の人々の喝采を受けながら、幸福の感情を感じていた。

これで自分の夢を少しでも叶えることができた。これで天国にいる彼女に顔向けできると。

そして奇術師は、今回の受賞を糧にこれからも夢のために邁進しようとして心で誓ったのだが、しかし奇術師のその誓いは果たされることはなかった。

授賞式で奇術師が殺されてしまったからだ。

★ ★

その悲劇が起きたのは、彼が受賞の盾とトロフィーを手に壇上から降りようとした、その時だった。

ステージの脇から1人の男が大型のナイフを脇に構えながら、奇声を上げて奇術師に向かって突進し、そのままそのナイフを奇術師に向かって突き刺したのだ。

実はその男、かつては名の知れたデュエリストだったが、奇術師にグルズ時代に標的にされてしまったせいで、自慢のレアカードをデッキごと奪われてしまい、そのせいで彼のデュエリスト生命はそこで終わってしまったのだ。

人生を奇術師の手により狂わされたその男は、デュエリストの道を諦め、アルバイトをしながらその日暮らしをしていたのだが、ある日とあることがきっかけで奇術師がマジシャンとして一世を風靡していることを知り、自分の人生を台無しにした奇術師が喝采を浴びているのを見て殺意が沸き、奇術師がとある会場で賞を受賞することを知った男は復讐のためにその会場に忍び込み、そして今回の凶行に及んだのだ。

奇術師は、会場の警備員たちに抑えつけられながらも喚き散らされるその男の言葉に、痛みに意識を薄れさせながらも、思わず自嘲の笑

みを浮かべる。ああ、これが天罰というものなのかと。

確かに自分が犯罪を起こした大きな理由は、マリクが千年ロッドの力により自身を洗脳したからだ。

しかし、被害者にとつてはそんなこと関係ないし、なにより最初恋人の愛を取り戻したいがために彼の手をとつたのは奇術師本人なのだ。

だからこそ、いつかこんなことが起こるのではと考えていた奇術師は、まだ死にたくはなかったと思いつつも、どこか、まあ仕方ないかと自身の死を受け入れ始める。

しかし、奇術師にはある心残りがあった。

その心残りというのは、自身のパフォーマンスでもっとたくさんの人々を笑顔にしたかったということ。

そう、最初は彼女の後押ししてくれたことだったためということもあり、奇術師は再び表舞台に立ち世界中でマジックショーを披露していたが、しかし時が経つうちに、彼女の意思だからというわけではなく、人々の笑顔を見るのが、彼女の愛を取り戻すというかつての目的に代わって、いつの間にか彼の生きがいになっていったのだ。

彼は最後に思う。どうして自分はあの日、マジックを失敗してしまったのかと。あのマジックを失敗さえしなければ恋人は死なず、恋人と二人幸せに暮らし、仲良く夢を追うことができたというのに。だからこそ、奇術師は最後に思わずぼつりと呟く。

——ああ、できればまた人生をやり直したいですねえ。

その言葉を最後に、奇術師はその息を引き取り、この世を去ることとなる。

しかし、この時の彼はまだ知らなかった。

『……は……』

まさか、なんとなしに呟いた最後の願いが、本当に叶ってしまうことになるとは。

——これは、元グールズのレアハンターNo. 2『奇術師パンドラ』と  
恐れられた男のやり直しの物語である。

## LDS襲来編

### 第一話 奇術師の現状

——質量を持った立体映像ソリッド・ビジョンの実現により生まれた「アクションデュエル」。

フィールド、モンスター、そして決闘者デュエリストが一体となったこの決闘デュエルは人々を熱狂の渦に巻き込んだ。

(アニメ「遊戯王ARC-V」第一話オープニングから抜粋)

★ ★

アメリカ・ラスベガス。

デュエルモンスターの生みの親である男の出身地であり、現在では社会を構成する重要な要素の一つとなっているデュエルモンスターズの始まりの地であるだけあり、アクションデュエルの発祥の地として有名な舞網市まいあみと並びデュエリストの聖地とされている。

夜も光が絶えず、多くの人間の熱気と欲望が行きかうそんな煌びやかな街の中央部に、その建造物はあった。

その名は『ペガサスドーム』。

デュエル史に残る最も偉大な人物の1人である男の死を悼いとして建てられたこのスタジアムでは、本日、とある大会の決勝戦が行われていた。

「——でダイレクトアタック!!」

「ぐああああああッ!?!」

デュエリストA

LP:1200↓0

真紅を基調とした燕尾服のような舞台服を身に纏った少年のモンスターの一撃が、彼と相対していたデュエリストのライフポイントを0にすると、会場は少しの間時が止まったように静かになったが、その数秒後、驚くほどの歓声に包まれる。

『決まったああああーアメリカチャンピオンシップ優勝は、クオン・遊灯。日本からやってきた奇術師<sup>トリックスター</sup>。クオン選手の優勝だあああああ！！』

MCの熱の入った実況に、会場のボルテージがさらに上がる。

クオンと呼ばれた紅の衣に身を包んだその少年は、そんな観客たちの歓声に答えるために、観客席に手を振りながら会場を後にする。

彼の名は“クオン・遊灯”。

ここ最近、アメリカ各地でさまざまな大会を総なめにしてアメリカデュエル界でも注目されている若干16歳ほどの少年だ。

決して強力なパワーを持っているとはいえないが、多彩な効果を持つ魔法使い族を中心に華麗に使いこなし、魔法や罠とのコンボを重視したそのトリッキーな戦術から『奇術師<sup>トリックスター</sup>』の異名を持つ、この年齢では考えられないほどの実力者だ。

その見ている者を楽しませるといいうデュエルスタイルから、既にここアメリカで多くのファンを得始めている新進気鋭のデュエリスト。しかしそんな彼にはある秘密があった。

それは彼に『前世の記憶』というものがあるということ。

彼がいまだ少年の身でありながら、多くの人間に認められるほどの実力者である理由の大部分が、前世で彼がああ決闘王とも戦ったことがある、超一流のデュエリストであったからだ。

彼がはその経験を生かして現世でこうして活躍しているというわけだ。……最も前世の彼は、こうして日向で活動できる存在ではなかったのだが。

前世のデュエリストとしての彼を知るものは、彼のことをこう呼び、嫌悪し、憎み、そして恐れた。

グールズのレアハンターNo.2

“<sup>パンドラ</sup>災厄”と。



私の名前はクオン・遊灯。

日本人とフランス人とのハーフで、現在はデュエル留学のため、ここアメリカで本場のデュエルを学びながらも、賞金付きの大会を回りながら賞金稼ぎの真似ごとをして生活している。ちなみに今年で16歳になった。

そんな少し普通とは違う私ではあるが、実は人にはいえないある秘密があったりする。

その秘密とは、所謂「前世の記憶」というものがあったりするといふもの。

前世の私は「パンドラ」というコードネームで、グルーズというデュエルファイアに所属しており、その尖兵であるレアハンターの一人として、多くのデュエリストのレアカードやデッキを刈り取ってきた。なぜそんなことをしてきたのかというと、それはいいわけになつてしまいかもしれないが、このグルーズの所持している超常の道具である千年アイテムの一つである「千年ロッド」の力によって洗脳されていたためだ。

私は元々アシスタントとして私を支えていてくれた恋人のカトリヌとともに、フランスを拠点としてマジシャンとして活動しており、自分でいうのもなんだが、世間ではそれなりに名が知れていたと思う。

だが、ある大掛かりな脱出マジックに失敗してしまい、その事故のせいで顔に大火傷を負ってしまった私は今まで積み上げてきた名声。そして私を助けようと炎の中へと飛び込んだ最愛の恋人を失ってしまう。

この世で最も大切なものを失ってしまった私は、人生のどん底に突

き落とされ、自暴自棄な生活を送っていたのだが、そんな私の前に現れたのが当時グルズを結成したばかりのグルズの首領、マリク・イシュタールだったのだ。

後に知ったのだが、自身の目的を達成させるために有能な駒を捜していたマリクは、フランスの全国大会で優勝したこともある私を手下にするために、千年ロッドの力を使いカトリーヌが死んでしまったのではなく私を見放して離れていったと誤認させ、そのカトリーヌの愛を千年ロッドの力で再び取り戻させるという理由で私を洗脳し、私自身の組織に入るように誘導したのだ。

そして私はそんな彼の企みにまんまと乗ってしまい、グルズのレアハンターの一人として活動を続け、やがてレアハンターの中でもNo.2の位置に来るまで戦い続けたのだが、しかし、3枚の神のカードの行方を巡る大会であるバトルシティ。そこで後の決闘王《デュエルキング》となる武藤遊戯と戦った私は、しかし敗北。私はその罰として、マリクの千年ロッドの力により心を壊させかけられたが、後のデュエルシティ決勝で私に勝った遊戯がマリクを倒したことにより千年ロッドの力が消えたためになんとか精神崩壊は免れた。

しかし、洗脳が解けてしまったことにより再び絶望のふちに立たされてしまった私は、また昔のような生活を送ることとなる。恋人が死んでしまったことに気づいただけではなく、自分の意思だけではないとはいえ、最愛の恋人を理由にして、悪の限りをつくしてきたことを知ってしまったのだから。

自殺を考えながらも、しかし踏ん切りがつかないためにだらだらと毎日を生き延びている、そんな毎日を送っていたある日のことだった。私に転機が訪れたのは。

その日私は、特に理由もなくなんとなくしに外に出てとある公園に出かけてみたのだが、そこで一組の姉弟に出会ったのだ。

その姉弟はなにが嬉しいのか、公園を勢いよく走り回っていたのだが、その姉弟のうちの弟のほうがなにかに躓いて転んでしまい、そのまま盛大に泣き出してしまった。

そして姉の方ははじめは弟をなんとか泣き止ませようと、その弟の

周りをおろおろしながらも必死で弟に話しかけていたのだが、結局その姉はもらい泣きしてしまい、そのまま一緒に泣き出してしまった。

周りのことなんてまるで目に入らないかのように大声で泣き叫ぶ姉弟。本来ならそんな姿など放っておいてもよかったのだが、なぜかその姿が若いころの私とカトリーヌの姿にダブって見えてしまい、そのためか姉弟を慰めるために、職業柄かあらかじめ用意したマジックの種を使い、その子供たちの目の前でマジックショーを披露することに。

そして手持ちの種を全て使い果たし、マジックショーを終了すると、いつの間にか集まっていた通行人の人々が、子供たちといっしょに盛大な拍手を私に送ってくれたのを見て、私は思い出した。自分がマジシャンになることを志したきっかけを。

それは私が幼いころ。恋人であり幼馴染であるカトリーヌの誕生日パーティの時に披露した拙いマジックで彼女が凄く喜んでくれたのがきっかけで、もっと自分のマジックで多くの人たちを笑顔にしたいと考え、やがてマジックにさらにのめり込んでいくと、それが世界中の人々を笑顔にしたいという考えに変わっていった。そんな私の夢を応援してくれ、そして支えてくれていたのがカトリーヌだったのだ。

それを思い出した私は思わず涙する。ああ、私はそんなことも忘れていたのかと。

それからの私は一念発起、かつての夢を叶えるために行動を開始した。

はじめはなかなか理解してもらえず苦労はしたが、やがて私の夢に賛同してくれる方々が増え、スポンサーが何人かつき、活動を共にしてくれる同志が何人も活動してくれることとなり、私の夢は少しずつ、しかし着実に実現へと近づいていったのだ。

そしていく年かの歳月が過ぎ、その間活動を続けていった結果、その活動が認められたのか、私たちの団体はノーベル平和賞を受賞、そして私個人はなんと、マジシャンの最高の栄誉でもある『マジック・オブ・ザ・イヤー』を受賞することが決まり、私はこの時あまりの歓

喜に思わず涙を浮かべたのを覚えている。

ああ、これで今までの苦労が報われたと。これで天国にいる彼女に顔向けができるのだと。……しかしそんな気持ちも長く続くことはありませんでした。

授賞式の日、私が突如現れた暴漢にナイフで滅多刺しにされてしまったからだ。

ずたずたにされて朦朧とした意識の中その男が喚き散らしていた言葉でわかったのだが、その男はどうやら私がグールズ時代にデッキごとレアカードを奪い取ったデュエリストであり、私と戦うまではそれなりに猛者として名の知れたデュエリストだったのだが、その男曰く私が奪い取ったカードたちは、その男が今までの人生を賭けて作り上げたデッキであり、そのデッキを奪い取られてしまったために、彼のデュエリスト生命は終わってしまったのだという。

そして、それからの男はアルバイトでその日暮らしをしていたらしいのだが、そんなある日私が今回の賞を受賞することを知り、自分の人生を滅茶苦茶にした私がこのような榮譽を受けるのが我慢できず、このような凶行に及んでしまったのだという。

それを聞いた私の感想はただ一つ。「ああ、とうとうこの時が来たのか」。ただそれだけだった。

私もわかつてはいたのだ。確かに、私がグールズでレアハンターをしていたのはマリクに洗脳されていたからというのが理由としては多い。

しかし、例え洗脳下にいたとしても、それが誘導されていたとしても私が進んで悪事を行っていたというの事実。いずれ自分の罪を裁こうとするものがくるだろうと、天罰がくだるだろうと、私はなんとなしに予測していたのだ。

そんなことを考えながら、私は自嘲の笑みを浮かべながら自らの死を受け入れようとしていたのだが、そんな私には一つの心残りがあった。

それは、私のパフォーマンスでもっとたくさんの人々を笑顔にしたかった。ただそれだけの思いだった。

やっと幼いころの夢が、彼女が支えてくれていた私の想いが形になってきたというのに……………。

そんな思いからだろうか、気づけば私はなんとなしにこう呟いていた。

『ああ、できればまた人生をやり直したいですnee…………』

それができれば、恋人も失わず、このような最後を迎えずに済んだのにと。

そして私はそのまま人生を終えた——はずだった。

『……は……………？』

——まさか本当にその願いが叶うとは思わずに。



暴漢に襲われて死んだはずの私が再び意識を取り戻した私は、自分がどこか清潔な印象を受ける白い部屋で横たわっていることに気づく。

知らない天井に戸惑う私は、なんとなく部屋を見渡し、そこがおそらく病院の一室だとあたりをつける。

ひよつとして自分はある状態から助かったのだろうか、首を傾げながらもとりあえず枕元にあったナースコールを押して誰かを呼んで状況を確認しようとしたところで、そこで初めて自分の現在の状況に気づいた。……………なぜか自分の体が子供の頃の状態に戻ってしまっているということに。

『なんじゃこりゃあああああああああああ!?!』

さすがにこれには驚いた。たぶん人生で一番動揺したかもしれない。思わず叫び声を上げてしまったほどだ。

その後、その叫び声を聞いてやってきた看護師や医者から話を聞いた結果、どうやら私の名前、というよりこの体の持ち主である子供の

名前が遊灯久遠ということ。未だ小学生にもならない年齢だったいうこと。そして両親と車に乗って出かけている最中に事故に遭ってしまい、自分を残し両親は二人とも死んでしまったということまで教えられた。(もつとも事が事なので両親のことを教えるときはかなりいづらそうにしていたから)

その話を聞いて行くうちに、私は全く知らない人物の記憶が自分の頭の中にどんどん流れ込んでくるのを感じ、やがて気づいた。それが遊灯久遠という少年の記憶だということに。

そして私は理解したのだ。私は輪廻転生というものを、記憶を持つて果たしたということ。

輪廻転生。昔気紛れに読んだとあるオカルト本に乗っていた言葉で、元々は仏教の言葉で、簡単にいうと人は死んでも生まれ変わり別の存在へとなって再び現世に舞い戻ることができるというもの。そのオカルト本によれば、中には転生した人間の中には前世の記憶を持っている者もいるらしいことも書かれていた。

その本を読んだ時には、ただの与太話だと思つて鼻で笑つたものだが、今の自分の現状。そして流れ込んできた遊灯久遠という少年の記憶、そして両親の死を聞いて自然と胸が締め付けられ、頬から涙が流れてくることから、私は自分がこの記憶を持った転生を果たしたことを確信したのだ。(意識が戻った時に既にある程度成長していたのは、おそらく交通事故の衝撃が原因で前世の記憶が戻つたのだろう) 前世の記憶を思い出した影響か、割と早く両親の死から立ち直り、現状を理解すると、とりあえずこれからどうするか考えた。

医者の話では、両親はそれなりの遺産を残してくれており、生活にはしばらく困らないようであったが、それでも当時の私は小学生にすらなっていないほど幼かった。一人で生活するなど無理であろうし、まず周りがさせてくれないだろう。……まあその心配は全くの無駄だったわけであったのだが。

★ ★

明日の生活を心配ながら、リハビリに励んでいた私の前にその男性が現れたのは、私が意識を取り戻して1週間ほどが経った頃だった。

『——君が久遠君だね』

そういつて現れたその男性の名前は“さかきゆうしやう榊遊勝”。

前世の私が来ていたような燕尾服のような衣装を身に纏い、シルクハットを被った特徴的な服装で現れた彼は、同行してきた看護師や医者の話では、この世界のデュエルチャンピオンであるらしい。

久遠の記憶を探ってわかったことなのだが、どうやらこの世界は私の生きていた世界から100年ほど経った未来の世界だったらしく、私がかつて戦ったデュエルキング、武藤遊戯は史上最強のデュエリストとして歴史上の偉人の一人としての扱いを受けており、科学技術も著しく発展し、今ではなんと質量を持ったソリッド・ヴィジョンも開発されて、そのソリッド・ヴィジョンを使用したアクションデュエルというものが現在の流行りとなっているらしい。

そして、前世ではできたばかりのプロリーグも、この世界では既にできてから100年以上が経っているために制度も発展、確立しており、そのためか前世の頃より多くのプロデュエリストがこの世界にはいるのだが、その頂点にいるのがこの榊遊勝という人物だということだ。

そんな人物がなぜ私の前に現れたのかというと、なんでもこの世界の私の両親とは親戚関係だったらしく、仲もよかったということ、私の身元を引き取りに来たのだという。

これには驚いた。元々、誰か親戚かなにかが引き取ってくれないかなど淡い期待を抱いていたが、まさか当代のデュエルチャンピオンが自分の身元引き受け人になってくれるとは、夢にも思っていなかったからだ。

だからこそ、突然現れた彼の言葉に戸惑ったが、しかし中身はともかく外見が子供の私には他に頼れる人がいるわけでもなく、ありがたく彼の申し出を受けることにした。



そうして榊一家の一員となった私。奥さんとお子さんもいらつしやると聞いていたので少し心配ではあったが、彼らは快く私のことを受け入れてくれた。

どうやら遊勝さんはあらかじめ私を引き取ることを家族に相談してから決めていたらしく、彼らの元々の人柄の良さもあって、私が彼らの家族に馴染むのはそう時間がかからなかった。

少しミーハーなのが玉に瑕だが、明るく料理上手な遊勝さんの奥さんの榊洋子ようこさん。二人の息子で、泣き虫だが思いやりのある子である、弟分となる榊遊矢ゆうや。二人とも両親を失った私のことをよく気遣ってくれて、このような温かい空間はカトリヌと一緒に暮らしていた時以来だった私は、いつの間にか、すっかり彼らのことを本当の家族同然と思うようになっていった。

そして、そんな一家の大黒柱である遊勝さんの仕事。つまりデュエルの試合を見に行った私はそこで衝撃を受ける。

【エンタメデュエル】

遊勝さんがその信念としている、相手や観客、見ている人全てを笑顔にしようというデュエルスタイル。

純粋なデュエルの強さもさることながら、質量を持つソリッド・ヴィジョンが開発されたことにより産まれたアクションデュエルならではの、体を張った華麗なパフォーマンス。遊勝さんがデュエルチャンピオンであり、最も人気のあるプロデュエリストとして、その手のランキングで長年トップにいる理由がこれにあった。

そして初めて彼のこのデュエルを見た私は、自分に電流が走るのを感じた。遊勝さんのデュエルを見て得た感覚。そして彼のデュエルを見て歓声を上げる観客たちの姿を見て、それが前世、私が追い求めていた理想の光景だということに気づいたからだ。

『……………これだ！私が求めていたのはこれだったんだ!!』

これなら前世のマジシャンとしてのパフォーマンスやデュエリス

トとしての経験を生かすことができるだろうし、マジシャンとしての舞台ではないが、デュエルモンスターズが前世とは比べ物にならないほど日常と密接に関わっているこの現代。これなら世界中の人々を笑顔にするという自分の夢を果たせるかもしれない。

そう考えた私は遊勝さんに頭を下げ、彼が自身のエンタメデュエルを他に伝えるために創設したデュエル塾『遊勝塾』に入塾し、そして遊勝さんにエンタメデュエルについて教えを受けることに。

そして私は、遊矢や遊矢の友人である柊柚子ひいらぎゆずや権現坂道場の跡取り息子である権現坂昇ごんげんさかのぼるたちの面倒を見ながら、遊勝さんや彼の後輩である遊勝塾の塾長、柊修三ひいらぎしゅうぞうさんたちにエンタメデュエルについてのなんたるかを教わる日々を送ることとなる。

忙しく、とても騒がしい日々であったが、カトリーヌと過ごしてきた日々とはまた違った、暖かい毎日。……しかし、神様はよほど私のことが嫌いなようで、そんな幸福な日々もある日唐突に終わることとなる。

——神遊勝の『失踪』という出来事によって。

★ ★

それはちやうど幾度目かのタイトルマッチ防衛線。

堅実で、それでいて豪快な戦術を得意とすることで有名なストロング石島を挑戦者として迎えたその一戦。しかしチャンピオンである遊勝さんはその戦いの場には現れず、そのまま行方を晦ましてしまったのだ。

ここ一番の試合を前に、家族にすらなにもいわずどこかに消えてしまった遊勝さんのことを、「勝負から逃げた卑怯者」「臆病者のチャンピオン」として、世間は今までの評価から一転。彼のことを罵り、そ

して蔑んだ。

そんな世間の悪意は遊勝さんに親しかった人物にまで及び、そのせいか遊勝塾の生徒たちは次々と辞めていき、そして、さらにそれは、当然私たち家族にまで襲い掛かった。

罵り蔑みの視線は当然のこと、酷いときは石を投げつけられるときもあった。

遊勝さんがプロとして有名になる前までいくどかの嫌がらせを受けたことがあり、なにげに要領がいい洋子さんや、前世で一度名声を失い裏世界に生きてきたために、その手の嫌がらせに対してある程度対処法を心得ていた私にはそれほど被害が来ることはなかったが、しかし正真正銘、まだ幼かった遊矢にはそんな悪意に対しての対抗手段があるわけがなく、さらに大人であるならばある程度は自重するものであるが、純粹であるがゆえに残酷な子供たちの嫌がらせを直接受けていた遊矢は、私が出会ったころのような明るさがどんどん陰りを見せ日に日に暗く落ち込んでいった。

幸い、遊矢の親友である権現坂君のおかげで酷いイジメを受けることはなかったが、そのせいで遊矢は以前とは違って、むりやりひょうきんな。それでいて常にどこか陰のある表情を見せるようになる。

遊勝さんの名声は地に落ち、遊勝塾には殆ど人が寄り付かなくなっていた。

私は再び遊勝塾に活気を取り戻させるために、多くの大会に出場して注目を集めようとしたり、ピラを配ったり、インターネットなどで宣伝したりしたのだが、未だ遊勝さんの失踪の件が尾を引いているのかあまり効果は出ず、苦悩の日々を送っていた。

そんなある日のことだった。その話を私が聞いたのは。

それは舞網市を拠点として活動しているとある企業が開いた大会。その大会の優勝者は、その会社の援助を受けてデュエルモンスターズの本場であるアメリカヘデュエル留学することができる権利を得ることができるというのだ。

私はこれを見て閃いた。今の状況の舞網市では、例え私がプロになつたとしても受け入れられるのは難しい。少なくとももつと時間

をおかなければ無理かもしれない。

そう考えた私は、ならばいつそのこと舞網市と並ぶデュエルの聖地であるアメリカ。そこで私が活躍できればエンタメデュエルをもつと広めることができるし、遊勝さんの、そして遊勝塾の名誉回復の一助になることができるかもしれない。

そして私は中学1年生の時その大会に優勝し、それから3年間。私はこうして様々な大会に出場し、エンタメデュエリストとしての腕を磨いているというわけである。

ちなみに学校には殆ど行っていない。流石に前世と合わせて中身が中年を既に超えている身としては今さらジュニア・ハイスクールに通うつというのも気がひけたので、通信教育で既に中学卒業の資格はもう既にとっているからだ。(まあ、この国にいる名目が一応「留学」なので籍だけはその会社が指定した学校にしているが)

そして今回の大会を見てくれればわかると思うが、この3年でどうやら私の努力もなんとか実を結んだようで、今では私はここアメリカでは、結構名が知られるようになった。それと同時に、今ではエンタメデュエルを志すデュエリストたちも少なからず出てきているので、私の努力も無駄ではなかったと胸をはってもいいと思う。

「ふう。なんとかここまで来ることができました」

今の住居としている、ラスベガスにあるとあるアパートの一室に帰ってきた私は、ソファに深く身を沈めながら、ここまで来るまでの苦労を思い返し、深く溜息を吐いた。

我ながら、まるで人生に疲れた中年サラリーマンのような姿だと思わないでもないが、できれば許してほしい。ここまで来るのに本当に苦労したのだから。

何が苦労したかといわれれば、特に、エンタメデュエルがどういうものかを理解してもらおうのに苦労した。「皆を笑顔にする」というエンタメデュエルの信念が、真剣勝負を愚弄しているだとか、舐めプ乙(笑)だとかいわれてしまうことがあったのだ。

それは違う、誤解だと理解してもらおうために、何回もその相手にデュエルで勝利し、根気よく説明して理解してもらったのは今ではい



【榊遊勝の息子、榊遊矢君。因縁の相手ストロング石島を撃破!!】

## 第二話 奇術師の帰国。

【舞綱市】

デュエルの技術だけが突出して進歩しており、アクションデュエルの基幹となる質量を持つ立体映像ソリッド・ビジョンの開発も、この街に本拠を構える「レオ・コーポレーション」が成功させ、普及させた、いわばアクションデュエル発祥の地ともいえる。

そんな街を、口元に僅かな笑みを浮かべながら機嫌よさそうに歩く一人の少年がいた

黒のタンクトップに紅色のジャケット。サングラスをかけ赤いハットをかぶったその少年は、大きなスーツケースを引きずりながらも、その細長い瞳を僅かに見開きながらも街の様子を観察していた。

「——いや、変わりませんねここらへんは」

彼の名はクオン・遊灯。伝説のデュエリストである榊遊勝の養子にして、転生者。そしてこの物語の主人公である。

なぜ、アメリカにいるはずの彼がこんなところにいるのかというと、先日自身が所属しているデュエル塾である遊勝塾の塾長。柊修三から送られてきたメールの内容がきっかけだった。

そのメールの内容とは、彼の義父である榊遊勝に代わり現在デュエルチャンピオンの座に就いていたプロデュエリスト・ストロング石島。遊勝塾にとってある意味因縁の相手である彼を、彼の義弟である遊矢が倒したということが記されていたのだ。

インターネットで、それが間違いのない情報だと確信した彼は、初めは素直に喜んだ。

それもそうだろう。遊勝塾との因縁はともかく、相手は仮にも日本プロリーグの頂点であるデュエルチャンピオン。身内がそんな相手に勝利をおさめることができたというのだから。

だが、ある程度時間が経ち冷静になると、彼はこの勝利によってある問題が浮上したことに気づく。

それは遊矢がストロング石島に勝利するために使用した戦術。彼が生み出したとされる新しい召喚方法にあった。

その名も【ペンデュラム召喚】。

詳しいことは実際に見なければわからないが、ペンデュラムモンスターという特殊なモンスターを使用し、一度に大量のモンスターを召喚するというものらしい。

この世界には、クオンの前世に存在したアドバンス（生贄）召喚、融合召喚、儀式召喚の他に、シンクロS 召喚にエクシーズX 召喚という前世にはなかった召喚方法で召喚するモンスターが存在しており、この5つの召喚方法の内、シンクロ、エクシーズの2つの召喚方法が発見されたのは最近であり、これらを使うのは所謂エリートと呼ばれるような限られたデュエリストだけだったりするのだが、このペンデュラム召喚はそれらの召喚方法とは全く違う召喚方法であり、過去に使用された記録も一切存在しないらしい。

そして、彼が久方ぶりに日本へと帰ってきたのは、実はそのペンデュラム召喚にあったのだ。

いつも愛用しているデュエル関連の情報サイトで先ほどのことを知った彼は、前世で裏世界を渡り歩いてきた経験から、もしこのペンデュラム召喚を解析し、他のデュエリストでも習得できるようにすることができるようになれば、そこに計り知れない利益が生まれること、そしてその利益を得るために組織ぐるみで遊勝塾が狙われる可能性があることを推察したのだ。

だからこそ、彼は心配し過ぎかもしれないと思いつつも、もしそのようなとてつもない厄介事が降りかかってきたときのために、家族、そして仲間の助けになろうとこうして帰国の途についていたというわけだ。

「（最も私の思い過ぎしというのが一番いいんですかねえ……。まあ仮に私の心配が杞憂だったとしても、久しぶりに皆の顔を見たいし、新しく入った塾生の子つていうのもどういう子か知りたかったから、私はそれでもかまわないんですが）」

そんなことを思いながら、クオンは無事に遊勝塾に三年ぶりに帰って来た。

——帰って来たわけなのだが。

「……………どうやら少し遅かったようですね」

目の前にある遊勝塾という看板が掲げられた独創的な建物。その前に止まっているこの辺りではほとんど見ない高級車の姿に、クオンはすでに自分の家族がただならぬ事態に陥っていることを知るのであった。

そんな光景にクオンはため息を一つつくと中に入る。せめて大変なことになる前になんとかしなければと。

★ ★

遊勝塾。

それはかつてのデュエルチャンピオンである榊遊勝が、自身の後輩である柊修三の協力のもと設立したデュエル塾のことで、その規模は弱小といえるほど小さいながらも、榊遊勝が提唱した明るく楽しいデュエル「エンタメデュエル」を実践するために、毎日ドタバタしながらも、さわがしくそれでいて楽しい日々を送っている。

しかしそんな遊勝塾をある日とんでもない事件が襲う。——業界最大手『LDS』の襲来である。

LDS。レオ・デュエル・ハイスクールとは、質量を持つ立体映像を開発し、アクションデュエルを生み出したともいえる大企業『レオ・コーポレーション』が経営する、世界でも最大規模の勢力を誇るデュエル塾のことなのだが、そのLDSの理事長であり、レオ・コーポレーション社長の赤馬あかば零児れいじの母でもある赤馬日美香あかばひみかが、遊勝塾を乗っ取るために自身の手駒であるLDSのエクシースコース、融合コース、そしてシンクロコースのそれぞれのコースのトップエリートである生徒たちを引き連れて乗り込んできたのだ。

なぜ彼らがそのような行動に走ったのか。そのきっかけは同じく

LDSの生徒である沢渡シンゴさわたりシンゴが何者かに闇討ちされたことから始まる。

実はこの沢渡シンゴという男、以前赤馬零児の部下である中島から遊勝塾の生徒にして現在確認されている唯一のペンデュラム召喚の使い手である榊遊矢からペンデュラムカードを奪うように指示を受け、その際に遊矢とデュエルをして敗北してしまったのだが、それを逆恨みして遊矢への報復を企んでいたところを、しかし突如現れた謎の黒マスクの男に襲撃されやられてしまったのだ。

遊矢に敗北してしまった理由を自身のカードのせいだと考えたのか、デツキの主力を元々使用していた「ダーツ」カードから、フィールドに出したら魔法カード扱いとなるペンデュラムカードへの対策のためなのか、所謂「帝シリーズ」と呼ばれるレアカード群の一つ。フィールド上の魔法・罫を破壊する効果を持つ「氷帝」を主軸とした戦術へと変えてデツキを強化していた沢渡であったが、そんな彼のデツキをもつてしても黒マスクの男の戦術を破ることはできず、男のエースカードである「ダーク・リベリオン・エクシーズ・ドラゴン」により止めを刺されてしまった。

そこまでなら、単にLDSの生徒が謎のデュエリストに襲われたというただの通り魔事件として終わるはずだったが、そこでなぜか黒マスクの男のマスクが外れてしまい、その男の容姿が明らかになったことにより話がややこしくなってしまった。———なんと黒マスクの中から出てきた男の顔は、遊矢の顔と瓜二つだったのだ。

その正体はもちろん全くの別人なのだが、襲撃された本人である沢渡にはそんなことわかるわけがなく、また沢渡が遊矢個人に恨みがあったためもあってか犯人は遊矢だと証言し、そのためか闇討ちの犯人は榊遊矢だと断定され話が進みそうになったのだが、そこでまったをかけたのがLDS理事長、赤馬日美香だった。

赤馬理事長はこれを好機とみて、非公式であろうとLDSの生徒である沢渡を弱小である遊勝塾の生徒が破ったという事実を有耶無耶にし、LDSでも学ぶことができない最新の召喚方法であるペンデュラム召喚の使い手である榊遊矢を手に入れるために遊勝塾の乗っ取

りを考えたのだ。

しかし遊勝塾の面々としてはそんなものは寝耳に水であるし、なにより話の中心人物である遊矢本人としても見に覚えがない。

そしてLDSと遊勝塾の間で、沢渡シンゴへの襲撃についてやったやってないとの水掛け論が続いた結果、遊勝塾の経営権を賭けてLDSの精鋭たちとのデュエル三本勝負を行うこととなったのだ。

★ ★

LDSとのデュエル三本勝負。第一戦目はLDSジュニアユースエクシードコース所属、志島北斗V S遊勝塾所所属、榊遊矢。

遊勝塾からはまずは確実に一勝をもぎとろうと遊勝塾のエースデュエリストである遊矢が出場したのだが、相手は業界最大手のLDSの精鋭。しかも公式戦勝率9割以上という同年代においてトップクラスの実力を誇る相手。当然苦戦を強いられた。

星の騎士たち「セイクリッド」を操る北斗は1ターン目から自身のエースカードの一つである、「セイクリッド・プレアデス」をエクシード召喚しペースを掴み遊矢を圧倒。二枚目の「セイクリッド・プレアデス」を召喚。そしてオーバーレイ・ユニットを使い果たし効果が発動できなくなったプレアデスを使い、二枚目のエースカードである「セイクリッド・トレミスM7」の召喚に成功する。

絶体絶命の危機に陥る遊矢。しかし遊矢が崩れゆくフィールドの中で、一枚のアクションカードを捨て身で手に入れたことがきっかけで、一気に形成が逆転。

新たなE Mモンスターである「EMトランポリンクス」の効果によりペンデュラムスケールの星詠みの魔術師とEMヒックリカエルを入れ替え、再びオッドアイズと星詠みの魔術師をペンデュラム召喚する。

当然北斗はそれを妨害しようとプレアデスの効果によりオッドアイズが遊矢の手札に戻るが、星詠みの魔術師の効果によりオッドアイ

ズを再度フィールド上に特殊召喚。そしてヒックリカエルの効果により星詠みの魔術師の攻撃力と守備力を入れ替えた後、逆転の魔法カード「マジカルスターイリユージョン」を発動したのだ。

このマジカルスターイリユージョンは自分フィールド上のモンスターの数<sup>1</sup>が相手フィールド上のモンスターの数以下の場合に発動でき、その効果はこのターンの終わりまで、お互いのフィールド上にいるモンスターは、お互いのプレイヤーのコントロールするモンスターのレベルの合計×100ポイント分アップするというもの。

この魔法カードにより遊矢は自軍のモンスターの攻撃力を1400ポイントアップさせることに成功し、そのモンスターたちの総攻撃により一気に北斗のライフを0にして大逆転を成し遂げたのだった。

そして次の第二戦目はLDSジュニアユース融合コース所属の光津真澄VS遊勝塾所属<sup>ひしぎゆず</sup>終柚子。紅一点同士の対決。

宝石商の娘である真澄は、その血筋に相応しく宝石を模した戦士たちである「ジェムナイト」の使い手で、1ターン目から手札のジェムナイト・ルマリんとジェムナイト・エメラルを融合し、ジェムナイト・パズを融合召喚するという技を見せるが、柚子も負けじと自身のエースモンスターである幻奏の音姫プロデューサー・モーツアルトをアドバンス召喚し、その効果により幻奏の音女カノン<sup>げんそうのおとめ</sup>を特殊召喚。ジェムナイト・パズを破壊し、大きいダメージを与えた。

しかしそんな柚子の行動も真澄にとっては計算のうち。彼女は次の自分のターンに新しく召喚したジェムナイト・アレキサンドの効果によりジェムナイト・クリスタをデッキから特殊召喚。

そしてクリスタにより幻奏の音女カノンを破壊した後、伏せていた罠カードである<sup>タフレット・フュージョン</sup>融合により墓地のジェムナイト・アレキサンド、ジェムナイト・ルマリ、ジェムナイト・エメラルを除外し、最強のジェムナイトであるジェムナイトマスター・ダイヤを融合召喚したのだ。

そしてその効果により墓地のジェムナイト・パズの効果のコピーしたマスター・ダイヤで真澄はプロデューサー・モーツアルトを戦闘破壊し、バーンダメージを与え、さらに追加攻撃により柚子のライフを

0にし、勝負を決めた。

こうして第二戦目はLDSに軍配が上がったのだった。

そして第三戦目。両軍一勝一敗により迎えた最後の試合。

相対するのはLDSジュニアユースシンクロコース所属刀堂刃V  
S権現坂道場所属権現坂昇ごんげんざかのぼる。

本来なら遊勝塾側は遊勝塾所属である少年紫雲院素良しゅうんいんそらが出るはずだったが、彼の気がどうしても乗らないということまで彼が変わりにこの勝負の場に出ることになった。

序盤権現坂は得意の不動のデュエルにて自らの守りを固め、万全の体勢を築き上げたかのように見えたが、藤堂刃は大量召喚を得意とするXセイバーというモンスター群による即効のシンクロ召喚により攻め立てる。

しかし権現坂はその攻めを耐え、自身のエースカードである超重武者ビッグベン<sup>ちやうじゆうむしや</sup>ーKケーにより手痛い反撃を食らわせた。

だが、敵もさるもの。罨カードメテオレインにより自身のモンスターたちに貫通効果を加え、さらにフィールド内を駆け巡り次々とアクションカードを入手し、自軍を強化しつつ順調にダメージを与えていった。

そしてとうとう権現坂の拠り所であるビックベン<sup>ちやうじゆうむしや</sup>ーKの守備力を0にした刃はそのままビックベン<sup>ちやうじゆうむしや</sup>ーKを破壊しようとしたのだが、それこそが権現坂の狙い。権現坂は墓地にあるモンスターカード、超重武者装留ブレイク・アーマーの効果を発動したのだ。

刃のシンクロモンスターであるガトムズのハンデス効果により墓地に送られていたこの超重武者装留ブレイク<sup>ちやうじゆうむしや</sup>・アーマーは「自分の墓地に魔法・罨カードが存在せず、元々の守備力よりも守備力が低い自分フィールドのモンスターが攻撃対象に選択された時、自分の墓地からこのカードを除外し、そのモンスターの守備力と、その元々の守備力の差分のダメージを相手に与える」という効果を持つ。

つまり権現坂はこの効果により一撃必殺のダメージを相手に与えるためにわざとビックベン<sup>ちやうじゆうむしや</sup>ーKの守備力を0にしたのだ。

しかし刃も曲がりなりにもLDSのトップエリート。

速攻魔法セイバーリフレクトの効果によりそのダメージを反射させあわや敗北となりかけたが、権現坂は最後の力を振り絞り墓地に眠るさらなるモンスターカード超重武者装留ビツグバンの効果を発動。フィールド上の全てのモンスターを破壊し、自分と相手にその破壊したモンスターのレベルの数×100。つまり3300のダメージを与え相打ちに持ち込んだ。

こうして最後の第三戦目。勝負は引き分けとなったのだった。

★ ★

さて、不慮の事態により生じた遊勝塾の経営権を賭けた三番勝負は一勝一敗一分け。イーブンに終わったことにより、「勝ったほうが経営権を得る」という条件だった以上、本来ならこれで遊勝塾の危機は免れたということになるはずだったのだが、これに異議を申し立てたのがLDSの赤馬理事長だった。

赤馬理事長はいう。ここまでできたらどちらかが真の勝者が決着をつけなければ収まりがつかないと。

遊勝塾塾長である柘修三はこの赤馬理事長の言葉に渋るが、しかし遊勝塾側の唯一の勝者である遊矢がこれを受けたためにお互い一勝した同士で最後の決着をつけることになったのだが、そこで一人の男が現れ、LDS側の勝者である光津真澄の代わりにその男が変わりに戦うこととなった。

『——その決着、私がつけよう』

この男の名は赤馬零児。そう、レオ・コーポレーションの社長にして若干16歳にしてプロ資格を持つ天才デュエリストだ。

遊勝塾を手に入れるために、そして自分たちの敵を燻りだすために今回の策略を仕掛けたLDSだったが、その保険として彼もこの場に来ていたのだ。

弱小デュエル塾の生徒とプロ資格を持つ天才といわれたデュエリスト。本来ならば絶対に成立するはずがない不公平感すら感じるこ

のマッチメイクだったが、遊矢はためらいなくその勝負を受けた。

遊矢は怒っていた。相手に本当はなにがあつたのか知らないが、彼にとつては今回のことは言いがかりに等しい。その言いがかりにより自分が尊敬する父が残した遊勝塾を奪おうという彼らが、遊矢としてはどうしても許せなかつたのだ。

「(これが本当の決勝戦。これに勝つて塾を……父さんデュエルを守るんだ!!)」

そして気合を入れた遊矢は赤馬社長とのデュエルに向かおうとした……その時だつた。

「——その勝負。少し待つてもらつてもよろしいですかね？」

「……え？」

その声を聞いた遊矢は思わず呆けた声を漏らす。

それはその声が知らない声だつたからではない。その声が幼いころから自分が知っている人物の声で、それでいて今はこの場にいるはずのない人物の声と同じだつたからだ。

そして遊矢が感じたその感覚は、この中で最も昔からこの遊勝塾に出入りしていた柚子に権現坂も同様に感じていたようで、その二人と共に彼ら三人は、とつさに声が聞こえてきた場所。彼らがいた観覧席の入り口に視線を向け、それに釣られてか他の面々も三人が見ていた場所へと意識を向ける。

そこにはいつの間にか一人の男が立っていた。

「やれやれ。何か起こる前になんとかしようと思つたのですが、もうこのような事態になつていたとは思いませんでしたねえ」

紅色のジャケットに赤いハットを被つたその男は、かけていたサングラスを外しながらもふかぶかため息をつく。

そんな彼の姿を見て、柚子と権現坂は信じられないようなものを見たかのように、驚きに目を瞠つた。

「なッ!?あの人は」

「嘘…いつ帰ってきたの?」

だがその声はどこか喜んでいようにも感じる。

それもそうだ。この状況において彼の存在は彼らの希望になり得るからだ。

しかし、彼のことを知らない者たちは彼が誰なのか首を傾げる。LDSの面々においては勝負に水をさされたように感じ不快に思っている者もいるようだ。

LDS理事長である赤馬日美香もその一人だった。

「どなたか知らないけれどいきなりなんなのかしらあなた。せめて名前の一つでも名乗るのが筋なのではないの?」

そんな彼女の言葉にその男は一瞬目を瞠った後、額に手を当ててなにやらしまったという仕草を見せる。

「おっと、これは私としたことが。それではせっかくなので名乗らせていただきますしょう」

そういうと男は被っていたハットを片手でとり胸の辺りに当てると、腰を曲げまるで舞台俳優のような大仰な礼をして口を開く。

「——私の名前は“クオン・遊灯”。この遊勝塾の塾生の一人であり、そのこの榊遊矢の義兄になります」

——それは三年前、デュエル留学のために家を飛び出した彼ら遊勝塾の長兄の名前だった。

### 第三話 奇術師の決闘VS異次元の王①伝説の魔導師

遊勝塾専用実技用決闘場<sup>デュエルフィールド</sup>。普段は生徒たちが試行錯誤して作り上げた自らのデッキを試す場所として使われているこの場所では、現在二人の男が対峙していた。

「いやあ、すみませんね無理いっちゃって」

「いや、かまわないよ」

一人は紅色をジャケットを羽織り、赤いハットを被った男。

名はクオン・遊灯。三年前に、エンタメデュエルをアメリカでも広めてくるなんて飛ぶ出した、遊勝塾の長兄的存在だ。

そしてもう一人の赤いマフラーをした男の名は赤馬零児。

アクションデュエルにおいて重要な役目を持つ質量を持った立体映像を開発したことで知られる大企業レオ・コーポレーションの社長にして、若干16歳にしてプロ資格を持つ天才デュエリスト。

なぜこの二人がこうして向かい合っているのか。それは遊勝塾の経営権を賭けたお互いの生徒たちを戦わせ、結局一勝一敗一分けで終わってしまったデュエル三本勝負。その決着をつけるために彼らはこうしてこの場にいるというわけだ。

本来ならば遊勝塾からは唯一勝利を勝ち取った榊遊矢が出るはずだったが、突如現れたこの男、クオンが彼の代役として出ることになったのだ。

相対する二人のデュエリストの姿を観覧席から眺めながら、本来赤馬の代わりにこのデュエルに出るはずだったLDSの生徒、光津真澄が口を開く。

「よろしかったんですか、理事長。彼の出場を認めて」

「かまわないわ。それなら零児さんの出場自体取りやめにしなきゃならないだろうし、なによりどこの馬の骨ともわからない相手に零児さんが負けるわけありませんからね」

自信満々で真澄の言葉にそう答える赤馬理事長。そこには自身の

息子への深い信頼の念があったのだが、実は彼女には一っだけ懸念があった。

「(そう、零児さんがこの馬の骨ともしれない相手に負けるわけがない。……でも、あの少年。どこかで見たことがある気が)」

そしてところかわって、遊緋久遠の味方である遊勝塾サイドだが、その中で先ほどの刃と同じくクオンの出場に異論を唱えている者が一人いた。遊勝塾の新人である少年、紫雲院素良だ。

「いいの、遊矢あの人に任せちゃって。知り合いみたいだけど相手の人強そうだよ？遊矢がやったほうがよかつたんじゃない？」

この素良の一見失礼とも思える疑問。

だがこれは当然のことだ。この試合は遊勝塾の存亡を賭けた大事な試合。彼のことを知らない素良にとっては、赤馬理事長ではないがどこの馬の骨ともわからない人物に勝敗を任せるのを不安に思っただのだ。

遊勝塾の生徒たちである三人の子供たち。タツヤ、フトシ、アユの三人も素良の言葉に同感なのか、遊矢のことを不安そうに見つめながらも何度も頷いた。

だが聞かれた当の本人である遊矢は、そんな彼らの質問に自信満々で答えた。

「大丈夫だ。義兄さんは強いからな」

「うむ。あの人なら間違いない。必ずや我らに勝利をもたらしてくれるだろう」

遊矢のその言葉に、部外者ではあるが幼いころより遊勝塾に入入っていたために彼と面識があった権現坂も頷く。

そんな彼らの様子に素良は首を傾げる。彼らの自身の根源がわからなかったからだ。

なので素良は彼らの他に唯一彼と面識がありそうな柚子に話を聞くことにした。

「あの人ってそんなに強いのか？海外に行っていたとは聞いてたけど」

素良にそう聞かれた柚子は、顎に指を当てながらしばしなにやら考える仕草を見せていたが、なにやら思いついたような表情を浮かべる

と、片目を閉じながらどこか悪戯めいた微笑を浮かべる。

「うーん、ここでいってもいいんだけど実際に見た方が早いと思うわ。——ほら、そろそろ始まるし」

そういつて柚子が指し示した先には準備が終わったのかデツキをセットしたデュエルデスクを携えた二人の姿があった。

「それではデュエルフィールドはどうします?」

「自由だ……」

クオンのその言葉に、零児が言葉少なげにそう答える。

これは自身がプロ資格を持ったための自負からなる余裕の言葉。相手を舐めているといつてもいい言動だったが、クオンは特に気にしたようすもなくしばしなにやら考え込んでいたが、やがて何か結論を出したのかコントロール室にいた柊修三に向かって呼びかける。

「というわけで塾長。デュエルフィールドは適当に選んどいてくださいーい!」

「いや、適当にしてお前」

柊塾長はそんな彼の言葉に何やら呆れたような表情を浮かべるが、やがて気を取り直すとデュエルフィールドを選択するコントロールパネルへと意識を戻す。

「クオンはああいったが、相手は天才と謳われた赤馬零児。下手なフィールドを選んで彼を有利にするわけにはいかない。——例え卑怯といわれようと、ここはクオンのため、そして遊勝塾のため、久遠が最も得意とするフィールドで……」

とそこで彼の視線が一つのフィールドパネルへと止まった。

それは三年前、未だ遊勝塾で遊矢たちと共にエンタメデュエルを学んでいた頃、彼が最も得意としていたフィールドだった。

「!?これならば……!!」

そして柊塾長は高らかに宣言しながらも、迷わずそのアクションフィールドを選択した。

「頼んだぞ、クオン。お前の成長を俺たちに見せてくれ!——アクションフィールド」イリユージョン・サーカス」発動!!」

その言葉と共にクオンと零児が相対していたデュエル場にフィー

ルド魔法が展開されると、観客席から驚きの声上がる。

「これはイリリュージョン・サーカス!? 義兄さんの得意なフィールドだ！」

そう、空中のあちらこちらに光の玉に包まれた様々な奇術道具やら舞台道具などが浮いているどこか幻想的な雰囲気を持つこの舞台は、未だ彼が遊勝塾で他の塾生たちと学んでいた頃、彼が最も得意としていたフィールドだった。

自身の得意なフィールドを塾長が敢えて選択したということに気づいた久遠は、困ったような笑みを浮かべてコントロール室の窓ガラスに視線を向ける。そこには久遠にサムズアップする柊塾長の姿があった。

「やれやれ。全く心配性ですなぁ塾長も。……最もその心配も当然かもしれませんが（ぼそ）」

そう誰ともなしに呟くと彼は目の前にいる今回の彼の相手となる人物、赤馬零児へと視線を向ける。実は彼のことはクオンもその噂を耳にしていたのだ。

「(大企業の社長でありながら、プロ資格を持つ天才デユエリスト。まるで物語の主人公のような人物ですねえ)」

少なくとも、前世で伝説のレアカードブルーアイスホワイトドラゴンの白龍の所持者として知られていた海馬瀬戸意外、彼はそのような人物がいたという記憶がない。

そのことから、今日の前にいる人物が、どれほど尋常ではない男だということが理解できるだろう。

彼が今は社長業に専念しているためにプロ資格をとってからは公式戦には出ていないが、それまで全勝無敗を誇った人物であることを知っていたクオン。

だからこそ彼はこの勝負に名乗りをあげた。  
遊矢の実力を疑うわけではないが、さすがに今回ばかりは部が悪い。

ならば少なくとも形だけでも同じ土俵にいる自分がこの勝負に乗るべきだと、彼は考えたのだ。

「それじゃあ、場も整ったことですしそろそろ始めましょうか」  
「いいだろう」

クオンの言葉に零児は一つ頷いて答えると、デュエルディスクを構えると、お互いに勢いよく叫び出す。

「戦いの殿堂に集いしデュエリストたちが！」

「モンスターと共に、地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ！これぞデュエルの最強進化系！」

「アクシヨォ——ン……」

「——デュエル!!」

そして遊勝塾の今後を賭けた最後のデュエルが始まった。

★ ★

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

赤馬零児（以下零児）

LP：4000

手札5枚

クオン・遊灯（以下クオン）

LP：4000

手札5枚

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「フィールドの選択権は譲っていただきましたからね。お礼代わりに先行はそちらに譲りましょう」

クオンは公平性を保つために、零児にそう申し出るが、しかし零児はその言葉を聞いて、眉を潜めながら若干不快そうな声をあげる。

「お礼？譲る？……なるほど、君はそういう思考をするのか」

「ふむ？」

「まあ、いい。ありがたくその申し出は受け取っておこう。では、私のターン」

☆☆☆☆

零児

LP：4000

手札5枚

☆☆☆☆

先行は零児。ルールにより先行はドロウができないために、ドロウフェイズは行わず、そのままスタンバイフェイズ、そしてメインフェイズに移行する。

「…………ふむ、まずは小手調べといこうか」

手札を確認し少し考える仕草を見せていた零児は、やがてある程度の戦術が決まったのか、1枚の魔法カードを発動させる。

「私は手札から魔法カード「古のルール」を発動」

☆☆☆☆

いにしえ  
古のルール

通常魔法

手札からレベル5以上の通常モンスター1体を特殊召喚する。

☆☆☆☆

「このカードは手札からレベル5以上の通常モンスターを特殊召喚できる魔法カード。私はこのカードの効果により手札からこのカードを特殊召喚する。現れる、魔界にその名を轟かす剣豪魔人。レベル6「タルワール・デーモン」!!」

その零児の叫びと共に、零児のフィールド上に名前タルワールの通り曲刀を両手に携えた悪魔が降臨する。

☆☆☆☆☆☆

タルワール・デーモン

通常モンスター

星6／闇属性／悪魔族／攻2400／守2150

そのタルワールは、悪魔族でも剣術の達人しか持つ事を許されていない。

☆☆☆☆☆☆

自分のモンスターが無事召喚されたことを確認した零児は、さらにデュエルディスクに新しくカードをセットした。

「さらに私はカードを2枚伏せてターンを終了する」

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：4000

手札1枚

場：タルワールデーモン（攻2400守2150）

伏せ：2枚

☆☆☆☆☆☆

零児がターンを終了したことにより、次はクオンのターン。

「それでは私のターン。ドロー!!」

☆☆☆☆☆☆

クオン

LP：4000

手札6枚

☆☆☆☆☆☆

勢いよくカードをドローしたクオンは、そのカードを一瞥して確認すると、唇を僅かに釣り上げる。

「それでは私はまずはこのカードを召喚しましょう。大アルカナの一つ「Temperance<sup>制</sup>」を司る魔術師。「魔導召喚師テンペル!!」するとフィールドに煙と共に、茶色のローブで顔を隠し、二つの杯を掲げる魔導師の姿が現れる。

☆☆☆☆☆☆

魔導召喚士テンペル

効果モンスター

星3 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻1000 / 守1000

自分が「魔導書」と名のついた魔法カードを発動した

自分のターンのメインフェイズ時、

このカードをリリースして発動できる。

デッキから光属性または闇属性の

魔法使い族・レベル5以上のモンスター1体を特殊召喚する。

この効果を発動するターン、

自分は他のレベル5以上のモンスターを特殊召喚できない。

☆☆☆☆☆☆

攻撃力2400のタルワール・デーモンを前に、攻撃力が1000ほどしかないモンスターを攻撃表示で出すという久遠のその一見愚行とでもいえる行動に零児は眉を潜め眼光を鋭くするが、それは弱小といってもいいモンスターが獲物として現れたことによる慢心でも、舐められているという不快感からくる怒りでもなく、それは未知の行動をしてくる敵に対しての「王者」ゆえの警戒からの行動だった。そんな彼の様子を見て、クオンは満足げな笑みを浮かべる。

「ふむ。なるほど、通常モンスターとはいえ1ターン目で上級モンスターを召喚するとは。さすがは天才と呼ばれたデュエリストですね。これは私も出し惜しみせずに最初から見せるしかなさそうです。――

私のエースモンスターを」

「……なにっ？」

零児はそんな彼の言葉に訝しげな表情を見せるが、クオンはそんな

彼に一つ笑みを見せると、両手を天高く掲げる。

それは見せ場が訪れると、彼の義弟である遊矢。そして彼の義父である遊勝がよくやるお決まりともいえる行動だった。

「レディース&ジェントルメーン!!今回は我がマジックショーにご来場いただきありがとうございます」

遊矢がペンデュラム召喚を行う際に必ずといっていいほど喋る、決め台詞と同じ、しかし彼よりよほど堂に入った言葉でそういうと、クオンは手札から一枚の魔法カードを引き抜いた。

「これより皆様に今回のマジックショーの役を紹介しましょう。私は魔法カード、グリモの魔導書を発動!」

☆☆☆☆☆☆

グリモの魔導書

通常魔法

デッキから「グリモの魔導書」以外の

「魔導書」と名のついたカード1枚を手札に加える。

「グリモの魔導書」は1ターンに1枚しか発動できない。

☆☆☆☆☆☆

「私はこの効果により、デッキから「ヒュグロの魔導書」を手札に加える」

☆☆☆☆☆☆

ヒュグロの魔導書

通常魔法

自分フィールド上の魔法使い族モンスター1体を選択して発動できる。

このターンのエンドフェイズ時まで、

選択したモンスターの攻撃力は1000ポイントアップし、

戦闘によって相手モンスターを破壊した場合、

デッキから「魔導書」と名のついた魔法カード1枚を手札に加える

事ができる。

「ヒュグロの魔導書」は1ターンに1枚しか発動できない。

☆☆☆☆☆☆

ヒュグロの魔導書。

魔法使い族の攻撃力をエンドフェイズまで1000ポイントアップさせ、戦闘により相手モンスターを破壊した場合、デッキから魔導書カードを一枚手札に加えることができる。つまり実質手札を減らさずに攻撃力を上げることができる強力な魔法カードだ。

しかし彼の本当の狙いは、その魔法カードを手札に加えることなく、「魔導書」と名のついたカードを発動させることにあった。

「そしてこの瞬間、魔導召喚士テンペルの効果を発動！」

その言葉と共にクオンが指を一つ鳴らすと、テンペルの体が眩く光り輝く。

「な、なんだあれは!？」

その光景に、LDSの生徒の一人である志島北斗が驚きの声を上げる。見れば他のLDSの生徒たちも、その表情を驚愕の感情で染めていた。

——そしてクオンは、告げる。自らの半身たるその魔術師の名を。

「出でよ、我が矛にして我が盾にして我が半身。この者こそがデュエルモンスターズ創世記より存在する魔術師たちの頂点。」

——来い、「ブラック・マジシャン!!」

その久遠の言葉と共に、光が晴れるとその中から1人の魔法使いが現れた。

☆☆☆☆☆☆

ブラック・マジシャン

通常モンスター

星7／闇属性／魔法使い族／攻2500／守2100

魔法使いとしては、攻撃力・守備力ともに最高クラス。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

赤紫のローブに身を纏い、褐色の肌をしたその魔導師の登場に、零児はその時初めてその表情を大きく崩した。

「……ッ!?ばかな、ブラック・マジシャン。——伝説の黒魔導師のモンスターだと!!」

そんな零児の様子を見て、クオンはその口元を不敵に歪める。

「——さあ、ショータイムの始まりです」

## 第四話 奇術師の決闘VS異次元の王②“奇術師” クオン・遊灯

☆☆☆☆☆  
クオン

LP：4000

手札：5枚

場：ブラック・マジシャン

☆☆☆☆☆

「『ブラック・マジシャン』ですって……ッ!？」

LD S理事長、赤馬日美香は、目の前に広がるその光景を簡単に信じていることができなかった。その理由としては、遊勝塾側の選手である、クオン・遊灯が出した1枚のモンスターカードにあった。

「ブラック・マジシャン」。

それはデュエルモンスターズの黎明期。初代決闘王<sup>デュエルキング</sup>にして、過去、現在、未来において史上最強のデュエリストと謳われた男“武藤遊戯”が自らの相棒<sup>パートナー</sup>としてデッキのエースに据えていたモンスターこそが、このブラック・マジシャンなのだ。

今では伝説を通り越して、神話と同等に語られる初代デュエルキングの伝説。

元々かなりのレアカードではあったが、武藤遊戯により数多の伝説を打ち立てると、さらに爆発的に人気が広まり、世界中の人々がこのカードを求めるようになる。

しかし、そのあまりの人気故に多くのコレクターは窃盗を警戒しそれらのカードを死蔵するようになり、また所有者の死後盗まれてしまったのか、それとも正当な後継者が隠し持っているのかいつの間にか紛失しているという事態が続出。

その結果、時が経つにつれブラック・マジシャンの姿は表舞台では自然と見なくなっていく。

そして今ではその所有者は確認できるだけでも、世界中で片手で数えられる程度にまで減少してしまった。

世界大会でも使用する者がほとんどいない、まさに伝説のレアカードといってもいいカードなのだ。

普段大企業の経営者に相応しく、あえて常に笑みを浮かべることにより感情を隠すのが得意な彼女がここまで動揺しているのも、まさかいくら元チャンピオンが経営していたとはいえ、このような弱小塾にいる少年がそのようなレアカードを使うとは思っていなかったからだ。

そしてそれは彼女の教え子であるLDSの生徒たちもそうだったようで、彼らはそれぞれブラック・マジシヤンの登場に動揺した顔を見せている。

「ブラック・マジシヤンだと……!?なんであんなやつが!!」

「あの幻のレアカードをこんな弱小塾のやつが?」

「すごい。初めて見た……」

そしてそれは遊矢、柚子、権現坂。遊勝塾の古参メンバー以外の面々も同じだった。

「あ、あれって……」

「ほ、僕知っている!!教科書に載ってたよあれ!」

「ブラックマジシヤン、本物はじめて見た!しびれるく!!」

そしてその中で一番驚いているのは遊勝塾で最も新入りである紫雲院素良だった。

「うっそ……。ブラック・マジシヤンなんて僕はじめて見たよ!」

「そりゃあ、そうだ。プロの歴史の中でも使っていたデュエリストは片手の数しかいなかったって話だからな」

素良の言葉にそう答えたのは遊矢。その表情はなぜかどこか自慢げに見える。どうやら自分の兄が皆を驚かせたのがよほど嬉しかったようだ。

そんな彼らの様子を見て、クオンは思わずといった感じで僅かに笑みを浮かべる。

「まあその反応になりますよね。私もこのカードを当てた時にはか

なり驚きましたし)」

ふとなんとなく買ったパックに、前世のエースであったこのカードが入っていた時には思わず運命を感じてしまったものだ。

気のせいか、こちらに僅かに視線を向けて僅かに笑みを浮かべているように見えるブラック・マジシャンの様子に苦笑しながらも、クオンはデュエルを続ける。

「———それではバトルです。ブラック・マジシャンでタルワール・デーモンを攻撃。『黒・魔・導』!!」

思わぬレアカードの登場に僅かに動揺していた零児であったが、漆黒の波動がブラック・マジシャンの杖から放たれると、瞬時に気持ちを立て直し冷静に対応する。

「ならば、私は伏せカードヴァルキリー「戦乙女の契約書」を発動!!」

☆☆☆☆☆☆  
戦乙女の契約書

永続罨 (原作効果)

①：自分スタンバイフェイズに発動する。  
自分は1000ダメージを受ける。

②：このカードが魔法&罨ゾーンに存在する限り、自分フィールドの悪魔族モンスターは、相手ターンの間は攻撃力が1000アップする。

☆☆☆☆☆☆

「このカードは自分のスタンバイフェイズ毎に私は1000ポイントのダメージを受ける代わりにこのカードが魔法&罨ゾーンに存在する限り、自分フィールドの悪魔族モンスターを相手ターンの間、攻撃力を1000ポイントアップさせることができる」

その言葉と共にタルワール・デーモンが紅色のオーラに包まれる。

☆☆☆☆☆☆

タルワール・デーモン

攻撃力2400↓3400

☆☆☆☆☆☆

「これでブラック・マジシャンの攻撃力を超えた。行け、タルワール・デーモン。『迎撃一閃』!!」

タルワール・デーモンはブラック・マジシャンの放った波導を切り裂くと、今度はブラック・マジシャンに向かって自分から襲いかかる。思わぬ危機に襲われるクオンであったが、彼は飄々な笑みを浮かべながらもその攻撃に対応して見せる。

「なら私はアクションマジック。クイック・マジック「早撃ち魔術」を発動」  
「ッ!?いつの間に!!」

☆☆☆☆☆☆  
早撃ち魔術クイック・マジック

アクションマジック（作者オリジナル）  
手札の魔法カードを1枚選択する。選択した魔法カードをこのターン速効魔法として使用できる。

☆☆☆☆☆☆

驚愕の表情を見せる零児。だがクオンはそんな彼の様子に笑みを浮かべるだけでデュエルを続ける。

「このカードは手札の魔法カードを速効魔法として使用できるアクションマジック。私はこのカードの効果により手札のヒュグロの魔導書の効果を発動。このカードの効果によりターン終了時までブラック・マジシャンの攻撃力を1000ポイントアップ!!」

☆☆☆☆☆☆

ブラック・マジシャン

攻撃力2500↓3500

☆☆☆☆☆☆

ヒュグロの魔導書の効果により攻撃力が上昇したブラック・マジ

シヤンは、タルワール・デーモンの攻撃を杖で受け切り弾き飛ばすと、不敵な笑みを浮かべながら紅色の波導でタルワール・デーモンを吹き飛ばした。

「ぬッ!?」

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：4000↓3900

☆☆☆☆☆☆

魔力の波動の余波による衝撃により、零児は僅かに顔を顰めた。

「モンスターを破壊したことによりヒュグロの魔導書の効果を発動。その効果によりデッキから「セフェルの魔導書」を手札に加えます」

☆☆☆☆☆☆

セフェルの魔導書まどうしょ

通常魔法

自分フィールド上に魔法使い族モンスターが存在する場合、

このカード以外の手札の「魔導書」と名のついたカード1枚を相手に見せ、

「セフェルの魔導書」以外の自分の墓地の

「魔導書」と名のついた通常魔法カード1枚を選択して発動できる。

このカードの効果は、選択した通常魔法カードの効果と同じになる。

「セフェルの魔導書」は1ターンに1枚しか発動できない。

☆☆☆☆☆☆

クオンが手札に加えたこのカードは簡単に言えば墓地の魔導書魔法カードの効果をコピーするというもの。

本来なら魔法・罨カードから自分の魔法使い族モンスターを守るこ

とができるトーラの魔導書でもいいのだが、こちらのカードの方が応用が効くと考え、彼は次のターンに備えてこのカードを選んだのだ。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

トーラの魔導書まじょうしょ

速攻魔法

フィールド上の魔法使い族モンスター1体を選択し、

以下の効果から1つを選択して発動できる。

●このターン、選択したモンスターはこのカード以外の魔法カードの効果を受けない。

●このターン、選択したモンスターは罠カードの効果を受けない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「さらに私はカードを2枚伏せてターンを終了します」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クオン

LP：4000

手札：3枚

場：ブラック・マジシャン

魔法・罠：伏せカード2枚

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ブラック・マジシャンの攻撃により削られた零児のライフはたったの100。

だが先手を取られてしまったことには変わりなく、彼の伝説を聞いてきたLDSの面々は動揺の色を見せる。

「なッ!？」

「まさか、社長が先手をとられるなんて……」

だが、そんな彼らの言葉にLDS会長である赤馬日美香はなんでもないので答える。

「落ち着きなさい、あなたたち。たった100ポイントよ」

「でも……」

「それに零児さんはまだあのデッキの真の力を出していない。勝負はまだこれからよ（……………そうでしょう？零児さん）」

そして日美香が視線を向けた先には、先手を取られたはずの零児が、しかし彼は全く焦った様子を見せずに、立っていた。

彼は先ほど自分のモンスターが倒されてしまったばかりとは思えないほど何事もなかったかのように、何か納得したような仕草を見せる。心なしか、どこか楽しそうな笑みも浮かべていた。

「なるほど、ブラック・マジシャン。これで確信が持てた。——やはり君が先日アメリカでプロ資格を取得したというアメリカで最少年のプロデュエリスト。クオン・遊灯か」

……………  
……………  
……………  
……………  
……………

『……………は？』

零児の言葉に、観客席にいた殆どの面々が困惑の声をあげる。

それもそうだろう。まさか自分たちより少し年上ではあるが、同年代といってもいい少年が突然プロだといわれても、いわれたほうは困惑するしかないだろう。

特に混乱していたのは彼が所属する遊勝塾の面々。特にその最古参である遊矢、柚子、権現坂の三人組だ。

もしそのようなことがあれば彼らが一番に知るはずだが、彼らはそのようなこと全く知らなかったからだ。

自然とその場の全員の視線がクオンへと集中する。

そんな彼らの視線に気づいていないのか、クオンはただ訝しげな顔で首を傾げる。

「なんで知ってるんです？遊勝塾の皆を驚かそうと今まで内緒にしていたのに」

「私たちレオ・コーポレーションは日々世界中の優れたデュエリスト

の情報を集めている。いくら先月プロ資格を入手したばかりとはいえ、アメリカ最年少でプロへと化した君のことを知らぬはずはないだろう」

最も無所属と聞いていたから先ほどまで確信はもてなかったがと言葉を締めくくる零児。その彼の言葉に何かを思い出したのか、日美香が叫び声を上げる。

「思い出したわ！まさかあの奇術師トリックスターがこんなところにいるなんて!？」  
「トリックスター？理事長あいつのことを知ってるんですか？」

北斗のその言葉に、日美香は一瞬きつい眼差しで一瞥するが、さすがに何の関係もない自身の生徒に八つ当たりのような真似をするわけにはいかず、一度目を瞑り深い息を吐くと、再び口を開いた。

「トリックスター。それは三年前にアメリカに現れた大会荒らしのデュエリストのことよ。当時中学生だったそのデュエリストは、彗星の如く現れると大小様々な規模を大会に出場し、多くの成績を残した。ブラック・マジシャンをエースに据えた、その魔法や罠カードを上手く使ったトリックキーな戦術と、その鮮やかなパフォーマンスからトリックスターの名がついた。LDSのアメリカ支部から送られてきたスカウト候補リストに写真付きで名前が載っていたのだけれど………」

心なしか釣り上った威圧感ある眼差しでクオンへ視線を向ける日美香であったが、当の本人であるクオンは何も感じたような感じは受けず、ただ首を竦める。

「別に特に不思議な話ではないでしょう。私は元々遊勝塾の人間です。厄介ごとになりそうだと考えたら戻ってくるのが当然でしょう。」

——— 実際こうして業界最大手のLDSが買収に乗り出したわけですし」

「くッ!？」

クオンの言葉に苛ただしげに歯切りするする日美香。そんな彼女の様子にクオンは苦笑しながらも零児へと視線を向ける。

「まあ、私がプロ資格を持っている云々はこのさい別にいいでしょう。今は関係ないですからね。デュエルを続けるとしましょう」

「ふむ、それもそうだな」

クオンの言葉に零児は納得したように頷くと、デッキからカードを一枚引く。

「それでは私のターン。ドロ」

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：3900

手札2枚

伏せ：戦乙女の契約書

伏せ1枚

☆☆☆☆☆☆

「あなたのスタンバイフェイズ。戦乙女の契約書の効果により、1000ポイントのダメージを受けてもらいます」

クオンのその言葉とともに、零児の胸元に小さくない痛みが走る。

「ぐうッ!?!」

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：3900↓2900

☆☆☆☆☆☆

いまだデュエルが始まったばかりだというのに1100ポイントという少くないダメージを負った零児。

確実に追い詰められているはずなのに、彼は苦悶の声自体はあげるものの、まるで動揺を見せず、むしろその口元には余裕の笑みを浮かべていた。

彼は先ほど引いたカードがどんなカードなのかを確認すると、その視線を再びクオンへと向けた。

「……ふむ。いまだ未完成ではあるが、どうやらこのデッキの真の姿

を見せるときがきたようだ」

「真の姿？」

零児の言葉に訝しげに首を傾げるクオンであったが、そんな彼の様子にかまわず零児は話を続ける。

「だが、ちようどいい。ブラック・マジシャンなどという伝説級のカードを見せてもらったのだ。札代わりといってはなんだが、おもしろいものを見せてさしあげよう」

そして、零児はそういうと、そのモンスターを召喚する。

——異次元を制する悪魔の王の石柱を。

「私はこのターン1000ポイントの効果ダメージを受けたことにより、このモンスターを特殊召喚する。出でよ、抗うもの全てを粉碎する征服者。——「DDD反骨王レオニダス」!!」

☆☆☆☆☆☆

デーデーデーはんこつおう

DDD反骨王レオニダス

ペンデュラム・効果モンスター

星7／闇属性／悪魔族／攻2600／守1200

【Pスケール：青3／赤3】

(1)：自分が効果ダメージを受けた時にこの効果を発動できる。

このカードを破壊し、さらにそのターン、

LPにダメージを与える効果は、LPを回復する効果になる。

【モンスター効果】

(1)：自分が効果ダメージを受けた時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、

受けたダメージの数値分だけ自分のLPを回復する。

(2)：このカードがモンスターゾーンに存在する限り、

自分が受ける効果ダメージは0になる。

☆☆☆☆☆☆

その零児の宣言とともに彼のフィールド上に現れたのは黄金の鎧に身を包んだ大型の悪魔。

その体から発せられる、まさに「王」の名に相応しい威圧感に、クオンは目を見開き驚愕の表情を浮かべる。

「な……なんだこのモンスターは？」

零児は癖か何かなのか自身の眼鏡を中指で押し上げてその位置を整えると、鋭くクオンを睨みつける。

「それでは反撃開始と行こうか」

## 第五話 奇術師の決闘VS異次元の王③ “天才” 赤馬零児

「DDD反骨王レオニダス」

異次元の悪魔の王の名を冠するその黄金の悪魔と対峙するクオンはその困惑を隠せずにいた。

なぜなら彼はこの世界に転生を果たしてからは、前世とのカードプールのあまりの差に驚き、このまま放っておいてはいずれ重要なデュエルで致命的なミスを犯してしまうと考え、遊勝塾の中でも一番カード知識の収集に力を入れていた。

そのおかげで彼のカード知識はかなりのもとなっていたのだが、そんな彼の知識でも目の前のモンスターがいったいどんなカードなのかその正体がわからなかったからだ。

「確かに私の知識も完璧ではない。しかし、これほどのプレッシャーを放つモンスター。市場に一回つていけば噂ぐらい聞いてもおおしくないはずだが……!!?そうか!!)」

と、そこまで考えたところでクオンは目の前のモンスターがどういうカードなのか、ある考えに行き着いた。

「なるほど。LDS製のカードということですか」

「ああ、その通りだ」

クオンのその言葉に、零児は静かに頷く。

クオンの前世であるデュエルモンスターズ初期の時代。デュエルモンスターズのカードをデザイン、製造ができるのは、デュエルモンスターズの創造主であるペガサス・J・クロフォードが会長を務めて

いた。インダストリアル・イリュージョン 1 2 社のみであったが、今の時代ではそれなりに厳

しい制約を果たすことができれば、自社製のカードを製造することができる。

つまり、目の前のモンスターはレオ・コーポレーションが製造した、赤馬零児専用カテゴリのモンスターということになる。

「あのペガサス・J・クロフォードは「トウーン」という専用モンス

ターを創造したと聞きますが、さすが世界屈指の大企業のトップにして100年に一度の天才と謳われたデュエリスト。スケールが違いますねえ」

妙なところで感心しているクオンをよそに、零児はデュエルを続ける。

「さて、私はここで特殊召喚したレオニダスの効果を発動させてもらう。このカードは効果ダメージを受けた時に特殊召喚できることは話したと思うが、特殊召喚した際、私は自分が受けたダメージの分だけライフを回復することができる。『イーヴィル・キュア』！」

すると、レオニダスの瞳が赤く光ったかと思うと、零児の体を青い波導が包み込む。

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：2900↓3900

☆☆☆☆☆☆

「さらにレオニダスがフィールド上に表側表示で存在する限り、私が受ける効果ダメージは全て0になる」

「それはまた……」

零児の言葉に呆れたような声をあげるクオン。

だがそれも仕方ないだろう。つまり目の前のモンスターがいる限り、事実上バーンダメージで零児を倒すことなど不可能だということなのだから。

「さらに私は「命削りの宝札」を発動。このカードにより、私は5ターン後すべてのカードを捨てることにより、カードを5枚ドロウすることが可能となる」

☆☆☆☆☆☆

命削りの宝札

通常魔法（未OCG）

自分の手札が5枚になるようにデッキからカードをドロウする。  
発動後5回目の自分のスタンバイフェイズ時に手札を全て墓地に送る。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

5ターン後にすべての手札を捨てるというリスクはあるが、最大5枚ものドロウカードを実現することができる、かつて海馬瀬戸も愛用したといわれる超レアカード。

既に禁止になっている強欲な壺をも上回る最強クラスのドロウ増強カードでありながら、あまりの効果により生産が途中で中止されてしまったために、その希少性により未だに制限《現役》であるそのカードの効果により、零児はカードを5枚引く。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

零児

手札0枚↓5枚

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

カード効果により零児は十分に手札を補充すると、さらに魔法カードを発動させる。

「さらに私は永続魔法カード、「地獄門の契約書」を発動。このカードは戦乙女の契約書と同じく、所有者に1000ポイントのダメージを与える代わりに1ターンに1度、デッキからレベル4以下の「DD」モンスターを手札に加える。私はレベル4「DDリリース」を選択」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

地獄門の契約書

永続魔法（原作効果）

①：自分スタンバイフェイズに発動する。  
自分は1000ダメージを受ける。

②：iターンに1度、デッキからレベル4以下の「DD」モンスター

1体を手札に加える事ができる。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

DDリリース

効果モンスター（原作効果）

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 1000 / 守 2100

①：このカードが手札から特殊召喚に成功した場合、

自分の墓地の「DD」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを手札に加える。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

地獄門の契約書の効果により零児はデッキから1枚のカードを手札に加える。

「そして私は永続魔法「魔神王の契約書」を発動する！」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ましんおう  
けいやくしよ  
魔神王の契約書

永続魔法

「魔神王の契約書」の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分メインフェイズに発動できる。

自分の手札・フィールドから、

悪魔族の融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターを墓地へ送り、

その融合モンスター1体をエクストラデッキから融合召喚する。

「DD」融合モンスターを融合召喚する場合、

自分の墓地のモンスターを除外して融合素材とする事もできる。

(2)：自分スタンバイフェイズに発動する。

自分は1000ダメージを受ける。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「このカードも地獄門の契約書同様、自分のスタンバイフェイズ時、自身に1000ポイントのダメージを与えるが、その対価として、1ターンに一度、悪魔族融合モンスターを融合魔法無しに融合召喚できる」

「なッ!？」

「融合魔法無しに、融合召喚だって!？」

その彼の言葉に反応したのは、融合使いである素良と、その素良と戦い苦戦させられた遊矢の二人だった。

その二人の声が聞こえたのか、零児はどこか不適な笑みを浮かべる。

「私が融合するのはDDケルベロスとDDリリース」

☆☆☆☆☆☆

デーデー  
DDケルベロス

ペンデュラム・効果モンスター

星4 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻1800 / 守600

【Pスケール：青6 / 赤6】

(1)：1ターンに1度、自分フィールドの「DD」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターのレベルを4にし、攻撃力・守備力を400アップする。

【モンスター効果】

(1)：このカードが手札からP召喚に成功した時、

「DDケルベロス」以外の「DD」モンスターが自分フィールドに存在する場合に

自分の墓地の永続魔法カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを手札に加える。

☆☆☆☆☆☆

そして零児は先ほど地獄門の契約書の効果により手札に加えたD

Dリリスと、元から手札に会ったDDケルベロスの二枚のカードを天高く掲げると叫びだす。——まるで新たな王の誕生を祝うが如く。「牙むく地獄の番犬よ、闇夜に誘う妖婦よ。冥府に渦巻く光の中で、今一つとなりて新たな王を生み出ささん!!融合召喚。——生誕せよレベル6「DDD烈火王テムジン」!!」  
そして天から一人の紅き王が現れる。

☆☆☆☆☆☆

DDD烈火王テムジン

融合・効果モンスター

星6／炎属性／悪魔族／攻2000／守1500

「DD」モンスター×2

「DDD烈火王テムジン」の(1)の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在し、

自分フィールドにこのカード以外の「DD」モンスターが特殊召喚された場合、

自分の墓地の「DD」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

(2)：このカードが戦闘または相手の効果で破壊された場合、

自分の墓地の「契約書」カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを手札に加える。

☆☆☆☆☆☆

素良と遊矢。そして柚子と真澄のデュエルにより融合召喚については知っていた遊勝塾の面々も、それらとはまた違った融合召喚を披露した零児のやり方に驚きを隠せない。

「あいつ融合使いか!!」

「でもあのモンスターを呼び出すためだけにあんなリスクを?」

「今度はあのレオニダスってモンスターと同じDDD……」

「Dが三つ?」

「どういう意味だ?」

困惑する遊勝塾の面々。塾長である柊修三も、今までの試合で零児が一回も融合召喚を使っていないことを確認すると不安そうな表情を浮かべるが、しかし当の本人であるクオンだけは、ただ感心の声を上げるだけでいつものペースを崩さない。

「ほー、融合魔法無しで融合召喚ですか。フュージョンゲートを使うわけでも無し、専用の融合魔法でも無し。珍しいカードを使いますねえ」

そんな彼の言葉に、しかし零児は無言で返すと、さらなるモンスターを召喚する。

「さらに私はチューナーモンスター。「DDナイト・ハウリング」を召喚する」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ディーデー

DDナイト・ハウリング

チューナー・効果モンスター

星3 / 闇属性 / 悪魔族 / 攻 300 / 守 600

(1) : このカードが召喚に成功した時、

自分の墓地の「DD」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

この効果で特殊召喚したモンスターの攻撃力・守備力は0になり、

そのモンスターが破壊された場合に自分は1000ダメージを受ける。

この効果の発動後、ターン終了時まで自分は悪魔族モンスターしか特殊召喚できない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

すると、零児のフィールド上にワニの顔のようなモンスターが召喚される。

「チューナーモンスターだ?! あやつまさかッ!!」

そのモンスターの登場に、先ほど自身が行ったデュエルが頭の中に

よぎった権現坂は、零児がこれから行おうとしていることがなんなのか理解したのか驚愕の声を上げる。

そんな彼の様子を一瞥しながらも、零児は淡々とデュエルを続ける。

「このカードが召喚に成功した時、墓地からレベル4以下のDDモンスターを特殊召喚することができる。私はこの効果により墓地からDDリリースを特殊召喚する」

すると黒い穴が出現し、その中からユリを模した悪魔が現れる。

☆☆☆☆☆☆

DDリリース

攻撃力100／守備力2100

☆☆☆☆☆☆

新たに出現した悪魔の登場に、クオンはこのデュエルにおいてはじめて笑みを消した。

「……なるほど、シンクロ召喚ですか……」

「ご名答だ。——さあ、行くぞ。私はレベル4のDDリリースに、レベル3のDDナイト・ハウリングをチューニング!!」

すると2体の悪魔が飛び上がったかと思えば、DDナイト・ハウリングが光の輪となりその姿を消し、DDリリースがその光の輪の中を駆け抜ける。

「闇を切り裂く咆哮よ。疾風の速さを得て、新たな王の産声となれ!!」

——シンクロ召喚。生誕せよ、レベル7「DDD疾風王アレクサンダー」!!」

その零児の言葉とともに、光の柱の中から緑色のオーラを纏った新たな王が現れた。

☆☆☆☆☆☆

DDD疾風王アレクサンダー

シンクロ・効果モンスター

星7／風属性／悪魔族／攻2500／守2000

「DD」チューナー+チューナー以外のモンスター1体以上

「DDD疾風王アレクサンダー」の効果は1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードがモンスターゾーンに存在し、

自分フィールドにこのカード以外の「DD」モンスターが召喚・特殊召喚された場合、

自分の墓地のレベル4以下の「DD」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを特殊召喚する。

☆☆☆☆☆☆

シンクロ召喚により新たな悪魔の登場に、観覧席からこのデュエルで何度目かわからない驚きの声上がる。

「やつが使えるのは融合だけじゃなかったのか……!!」

だが、どうやら驚くのはまだ早かったようで、零児のデュエルはさらなる動きを見せる。

「まだ終わりではない。私はDDD烈火王テムジンのモンスター効果を発動」

するとテムジンの纏っていたオーラが紅色から紫色のオーラへと変色する。

「このカード以外にDDDと名のつくモンスターが特殊召喚された時、墓地に存在するDDと名のついたモンスターを1体特殊召喚できる。再び蘇れ、DDRリス!!」

その言葉とともに先ほどアレクサンダーのシンクロ召喚に使われた一体であるDDRリスが再びフィールド上にその姿を現した。

「さらに、DDD疾風王アレクサンダーのモンスター効果を発動! DDと名のついたモンスターが特殊召喚された時、墓地にいるDDと名のついたモンスター1体を特殊召喚することができる!!」

すると、アレクサンダーの周りに突風が吹き荒れ、新たに黒い渦が生まれたかと思えば二足歩行の三つの犬の首を持つ化け物が零児の

フィールドに出現した。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

DDケルベロス

攻撃力1800／守備力600

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「そしてレベル4のDDケルベロスとレベル4DDリリースでオーバーレイ!!」

「なッ!?」

「2体のモンスターでオーバーレイネットワークを構築!!」

そして2対のモンスターが光となり、空に出現した渦の中に飛び込んだかと思えば、その中から大きな雷が、フィールドに落ちた。――そしてその中から三対目の王が出現する。

「この世の全てを統べるため、今世界の頂に降臨せよ!!エクシーズ召喚。生誕せよ、ランク4「怒濤王シーザー」!!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

デーデーデーどとうおう  
DD怒濤王シーザー

エクシーズ・効果モンスター

ランク4／水属性／悪魔族／攻2400／守1200

悪魔族レベル4モンスター×2

「DDD怒濤王シーザー」の(1)(2)の効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：このカードのX素材を1つ取り除いて発動できる。

このターンに破壊されたモンスターをバトルフェイズ終了時に、自分の墓地から可能な限り特殊召喚する。

次のスタンバイフェイズに自分は

この効果で特殊召喚したモンスターの数×1000ダメージを受ける。  
この効果は相手ターンでも発動できる。

(2)：このカードがフィールドから墓地へ送られた場合に発動できる。

デッキから「契約書」カード1枚を手札に加える。

☆☆☆☆☆☆

新たに出現した王の姿に、観覧席から今日一番の驚愕の声がかかる。

「あれは……!?!」

「エクシーズモンスターまでも……」

「な、なんてやつだ!?!」

そしてそれは零児の本気のデュエルを見たことがないLDSの生徒たちも同じであったが、そんな中、赤馬理事長だけは笑みを浮かべていた。

それは先ほどの不安な状態から自らの息子が一気に逆転したことからなる安心の笑みだった。

「(そう、それでいいのよ零児さん。あなたは最強のデュエリスト。こんなところで負けるはずがない)」

そして零児の情報をあらかじめ知っていた柊塾長も、赤馬が行った三つの召喚により生み出された三体のモンスターに動揺こそしていなかったが、その顔にはいつものどこかコミカルな表情はなく、深刻なものを宿していた。

「三つの召喚方法を自在に操る。これが赤馬零児……」

そしてその三体の王と相對しているクオンは、いつもの笑みを浮かべながら、しかし珍しくその額から冷や汗を流していた。

「(これはこれは……。少々まずいかもしれませんがねえ)」

そんな彼の内心を知ってか知らずか。零児はその瞳に鋭い眼光を宿しながら話を続ける。

『DDD』とはすなわち、ディファレント・ディメンションデーモン「D」。

——さあ異次元をも制する王の力、たっぷり味わうがいい  
そして彼は不敵に笑った。

## 第六話 奇術師の決闘VS異次元の王④天才の本気

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：3900

手札：1枚

場：DDD烈火王テムジン

DDD疾風王アレクサンダー

DDD怒涛王シーザー

DDD反骨王レオニダス

魔法・罨：戦乙女の契約書

地獄門の契約書

魔神王の契約書

伏せカード1枚

☆☆☆☆☆☆

4体のDDD、異次元の王を前に、クオンはさすがにいつもの飄々とした笑みを消して、かなり焦っているのが見える。

だが、そんなことは対戦相手の零児には関係のないこと。彼はさっそく目の前の敵を殲滅しようとする。自らの僕たちに命令を下す。

「——それでは、行くぞ。レオニダスでブラック・マジシャンに攻撃!!」

その零児の命令を受けた黄金の王レオニダスは、自らの最も信頼する武器である大剣を振り上げ、ブラック・マジシャンへと襲いかかる。その様子を見た権現坂と遊矢の2人は悲痛な声をあげる。

「まづいッ!? ブラック・マジシャンが破壊されれば、後はモンスターの総攻撃で終わってしまうぞ!」

「義兄さん!」

そしてレオニダスの凄まじい剣撃が、ブラック・マジシャンを斬り裂こうとした——その時だった。

クオンはにやりと笑みを浮かべると伏せカードのうちの1枚を発

動させる。

「トランプカード発動「攻撃の無力化」！このカードの効果により相手モンスターの攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させる!!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
攻撃の無力化こうげき むりよくか

カウンター罠

(1)：相手モンスターの攻撃宣言時に、その攻撃モンスター1体を対象として発動できる。

その攻撃を無効にする。その後、バトルフェイズを終了する。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クオンの言葉と共にブラック・マジシャンの目の前に時空の渦が出現すると、レオニダスの攻撃を弾き飛ばす。

「……ふむ、なるほど。さすがにこの程度で仕留めきることはできないか。——ならば私はカードを1枚伏せ、伏せカード「契約洗浄」を発動する」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
契約洗浄リース・ロンダリング

通常罠 (原作効果)

①：「契約書」カードが発動したターン、自分の魔法&罠ゾーンの「契約書」カードの効果全て無効にして発動できる。このターンのエンドフェイズに、自分の魔法&罠ゾーンの「契約書」カードを全て破壊し、自分は破壊した数だけデッキからドロウする。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

すると、零児のフィールド上にある3枚の契約書カードが突然全て破壊される。

「このカードは契約書カードを発動したターンのエンドフェイズ。自分の魔法・罠ゾーンの契約書カード全てを破壊し、破壊した数だけ

デッキからカードをドローすることができる。私はこのカードによりカードを3枚ドローする」

「なるほど、ここで手札補充ですか。（どうやらレオニダスが破壊されたらこのカードで契約書の自爆ダメージを回避するつもりだったようですね。油断も隙もない）」

そして零児は3枚のカードをドローしてその内容を確認すると、クオンのほうに向きなおる。

「それでは私はこれでターンエンドだ」

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：3900

手札：3枚

場：DDD 烈火王テムジン

DDD 疾風王アレクサンダー

DDD 怒涛王シーザー

DDD 反骨王レオニダス

魔法・罫：伏せカード×1

☆☆☆☆☆☆

「それでは私のターン。ドロー！」

☆☆☆☆☆☆

クオン

LP：4000

手札：4枚

場：ブラック・マジシャン

魔法・罫：伏せカード1枚

☆☆☆☆☆☆

飄々とした笑みを浮かべながら勢いよくカードを引いたクオンで

あつたが、実は内心安堵していた。

「(ふう、なんとか防ぐことができましたか。さすがに今ブラック・マジシャンを失うことはできませんからね)」

そんなことを考えながら、クオンは先ほど引いたカードを含めて自らの手札を再確認すると僅かに顔をしかめる。

「(む。手がないわけじゃありませんが、これは少々賭けになってしましますね。もし先ほど伏せたあのリバーズカードが攻撃反応型だとしたら今度こそ私は終わってしまう。……だが、他に手はありませんし仕方ないですか。それに)」

と、そこでクオンはそれとなく零児が伏せている2枚の伏せカードに視線を向ける。

「(あの2枚のカードの内の1枚は初めから伏せてあつたのに発動させるそぶりすら見せなかった。ということはおそらくあのカードは攻撃反応型やモンスター破壊の罠である可能性は少ない。たぶん彼のデッキは魔法・罠でモンスターをサポートして一気に力を解放するような戦術なのでしょう。ならばやる価値はある)」

そう考えた彼は、まずは下準備とばかりに1枚の魔法カードを発動させる。

「私は魔法カード「師弟の絆」を発動します」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
師弟の絆ししてい きずな

通常魔法 (未OCG)

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が

表側表示で存在する場合に発動する事ができる。

自分のデッキ・手札から「ブラック・マジシャン・ガール」1体を

表側守備表示で特殊召喚する。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「このカードの効果により、私はフィールド上にブラック・マジシャンが存在することによりデッキからあるモンスターを1体を守備表示

で特殊召喚することができます」

クオンのその言葉に零児は訝しげに僅かに首を傾げる。

「あるモンスターだと?」

「そう。それではここで我が劇場きつてのヒロインをご紹介させていただきます。出でよ、最高位の黒魔導師ただ1人の弟子。――

―レベル6「ブラック・マジシャン・ガール」!!」

☆☆☆☆☆☆

ブラック・マジシャン・ガール

効果モンスター

星6／闇属性／魔法使い族／攻2000／守1700

(1)：このカードの攻撃力は、お互いの墓地の「ブラック・マジシャン」

「マジシャン・オブ・ブラックカオス」の数×300アップする。

☆☆☆☆☆☆

クオンのフィールドに突如光が発生したかと思えば、その光の中から魔法使い風の服装の褐色肌の少女が杖をくるくる回転させながら、片目でウインクというどこかあざとい仕草をしながら登場した。

その少女の登場に、観客席で自らの息子を見守っていた赤馬日美香が驚きの声を上げる。

「ブラック・マジシャン・ガールですって!?!まさかそんなカードまでもっているというの!!」

【ブラック・マジシャン・ガール】

それはデュエルモンスターの世界において最上級魔術師ブラック・マジシャンの唯一の弟子といわれる少女の名前。

このカードは師匠であるブラック・マジシャンと同じく武藤遊戯が使用していた伝説のレアカードの1枚として有名なのだが、その存在はクオンの前世である『ブラック・マジシャン使い』パンドラとの戦いの時に、武藤遊戯が召喚したことで初めて確認されるほど目撃情報が少なく、そのレアリティは師匠であるブラック・マジシャンを超え

るほど。

動揺を隠せない様子である日美香の様子を横目に、クオンは内心苦笑する。

「それは驚くでしょうね。私もこのカードが、まさか街角にある小さなカード屋のカードくじなんかでこんなカードが当たるとは思わなかったですし」

カードくじとは、売れ残りのカードなどを数枚づつにランダムでまとめて一つのカードパックとして売り出すというもので、時々個人経営のカードショップなどで1パック100円などで売られている

実はこのカード、クオンがアメリカにデュエル留学したばかりの頃、とある大会に出場する前、運試し代わりに会場の近くにあったカードくじを買ったらなぜか当たってしまったカードなのだ。

いくら、この世界ではシンクロやエクシーズなど前世とは違う新しい召喚方法が生まれて使いづらいとはいえ、コレクションとしての価値は未だ計り知れないものがあるというのに。

まあ最も、思わぬ形伝説級のレアカードといってもクオンにとっては特に欲しいカードではなかったのだ、最初彼は金庫にでも入れて保管しておこうと思っていたらしいのだが、彼のデッキとの相性が悪くなく、また専用サポートもなかなか多かったのだ、こうしてデッキに投入されているというわけなのである。

再びの伝説級のアイドルカードの登場に、その場にいた全ての人間は驚愕の声を上げる。

そしてクオンの対戦相手である零児も最初は驚きに目を瞠っていたが、どうやら真剣勝負にアイドルカードを使うのは彼にとって流儀に反することだったようで、その整った顔を僅かに不快そうに歪めさせる。

「それで？確かに珍しいカードだが、そんなレアリティだけのアイドルカードでこの状況をどうにかできるとでも？」

どこか苛立たしげな彼の言葉に、しかしクオンは苦笑しながらも、いつもの飄々とした態度を崩さずにただ肩を竦める。

「まあ、そう慌てないでくださいよ。確かに私のモンスターたちは基

本的に非力。それはこの娘も同じだ。——だが、魔導師たちの真価は他のカードとの連携コンボにある。それをお見せしましょう」

すると、クオンは1枚の魔法カードを発動させる。

「魔法カードを発動「ユニオン・アタック」。このカードの効果により、私は自分フィールド上のモンスターたちの攻撃力を1体に集中させることができる。私はこのカードの効果により、ブラック・マジシャンにブラック・マジシャン・ガールの攻撃力2000を加える」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ユニオン・アタック

通常魔法

(1)：自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

このターンのバトルフェイズ開始時、そのモンスターの攻撃力は、他の自分フィールドの攻撃表示モンスターの攻撃力の合計分、バトルフェイズ終了時までアップする。

このターン、対象のモンスターが相手に与える戦闘ダメージは0になり、

他の自分のモンスターは攻撃できない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ユニオン・アタックの効果により、ブラック・マジシャンの攻撃力がほぼ倍近くまで上昇した。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ブラック・マジシャン

攻撃力2500↓4500

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ブラック・マジシャンの急激な攻撃力の上昇に、零児は先ほどの態度が嘘だったというように、驚愕の表情を見せる。

「攻撃力4500だと!？」

「もつとも強い力にはリスクがつきもの。このカードで攻撃力を上げたモンスターは相手に戦闘ダメージを与えることはできず、他のモンスターは攻撃することはできなくなりますが。しかし、あなたのモンスターを倒すのならこれで十分でしょう。さらに私はこのカード「拡散する波導」を発動する!!」

☆☆☆☆☆☆☆☆  
拡散する波導かくさん はどう

#### 通常魔法

1000ライフポイントを払い、

自分フィールド上のレベル7以上の魔法使い族モンスター1体を選択して発動できる。

このターン、選択したモンスター以外のモンスターは攻撃できず、選択したモンスターは全ての相手モンスターに1回ずつ攻撃しなければならぬ。

この攻撃で破壊された効果モンスターは効果を発動できず、無効化される。

☆☆☆☆☆☆☆☆

「このカードはレベル7以上の魔法使い族モンスターのみが扱える上級魔法。このカードの効果により、このターン1000ライフポイントを支払うことにより、私のブラック・マジシャンは相手フィールド上全てのモンスターに攻撃することができる」  
「なんだとッ!？」

☆☆☆☆☆☆☆☆  
クオン

LP:4000↓3000

☆☆☆☆☆☆☆☆

「行け、ブラック・マジシャン。超・黒・魔・導!!」

クオンのその号令と共に、零児のモンスター全てに魔力の嵐が降り注ぐ。

魔力の衝撃により零児のフィールド上に砂煙が巻き起こるのを見て、遊勝塾の面々は歓声をあげる。

「やった!!」

「これでクオンおにいちちゃんの大逆転よ!」

「しびれる〜♪」

他の面々も皆顔を綻ばすが、しかしその中でただ1人その表情を崩さず、真剣な面持ちでフィールドに視線を向けている者がいる。遊勝塾のルーキー素良だ。

「喜ぶのはまだ早いと思うよ」

「え?」

「フィールドをよく見てみなよ」

そういつて素良は零児のフィールドへと視線を向けたので、他の面々もそれにつられて零児のフィールドへと視線を戻すと、そこには信じられない光景が存在していた。

「なッ!?!」

「あれは!!」

驚愕の声を上げる遊勝塾の面々。

だがそれも仕方ないだろう。なぜならそこには、先ほどクオンのブラック・マジシャンの攻撃で全滅したはずの零児のモンスターたちが五体満足の状態でそこに立っていたのだから。

しかしその光景に一番驚愕しているのは、遊勝塾のメンバーたちでも、LDSのメンバーでも、ましてや対戦相手の零児でもなく、その光景と正面から対面しているクオン・遊灯だった。

「……………ん……………だど……………!?!」

クオンは混乱していた。

確かに自分はブラック・マジシャンの攻撃で零児のモンスターたちを全て壊滅させたはず。

「(なのにどうして……………?)」

そんな彼の疑問に答えたのは、おそらくその現象を起こしたであろう人物である零児だった。

「私は怒濤王シーザーの効果を発動させてもらったのさ」

「なに……?」

零児の言葉にクオンは咄嗟に零児のフィールドにいるモンスターの1体、エクシーズモンスター怒濤王シーザーの周りで漂っていたオーバーレイユニットが1つ減っているのが見えた。

「怒濤王シーザーはオーバーレイユニットを1つ取り除くことにより、バトルフェイズ終了時このターン破壊された私のモンスター全てを墓地から特殊召喚することができる。この効果により、私は破壊された全てのモンスターを復活させたのだ」

「……なるほど。拡散する波動は破壊したモンスターの効果を封じることができるとは、効果を発動したのは破壊される前。向こうにはできなかったというわけですか」

「ああ、その通りだ。残念だったな」

「く……ッ」

笑みを浮かべる零児の姿に、自分の考えを先読みされたせいとかクオンは屈辱で歯噛みするが、それも一瞬頭から振り払い、気を取り直す。  
「……ならば私はカードを1枚伏せてターンを終了します」

☆☆☆☆☆☆

クオン

LP：3000

手札：1枚

場：ブラック・マジシャン

ブラック・マジシャン・ガール

魔法・罫：伏せカード×2

☆☆☆☆☆☆

「それでは、私のターン。ドロ」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

零児

LP：3900

手札：4枚

場：DDD烈火王テムジン

DDD疾風王アレクサンダー

DDD怒涛王シーザー

DDD反骨王レオニダス

魔法・罨：伏せカード×1

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

零児はドローしたカードを確認すると真剣な顔で何か確認していたが、やがてその視線をクオンへと戻すと、ふと顔を綻ばす。

「しかし、まさか1度とはいえあの状況をひっくり返されかけるとは思わなかった。ここまでやるとは正直思わなかった。それに敬意を表するというわけではないが、せっかくだから私のとっておきを披露させてもらおう」

「とっておきだと?」

クオンのその言葉に、しかし零児はただ僅かに笑みを浮かべるだけでなにも応えず、デュエルを再開する。

「まず私はトラップカード「DDDの人事権」を発動。このカードの効果により自分フィールド上のDDDモンスター3体をデッキに戻し、その後デッキからDDと名のついたモンスター2体を手札に加える。私はこのカードにより、テムジン。アレクサンダー。シーザーの3体をエクストラデッキに戻し、デッキから2体のDDモンスターを手札に加える」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

DDDの人事権

通常罨

①・自分フィールドの「DDD」モンスター3体をデッキに戻す。  
その後、デッキから「DD」モンスター2体を手札に加える。

☆☆☆☆☆☆

零児のフィールド上から、光となって彼のエクストラデッキに戻る  
3体のDDD。その光景にクオンは不思議そうな顔をした。

「どういうことですか？せつかくのDDDを全てデッキに戻すなど？正  
気の沙汰とは思えない」

「まあ、見ているといい。——私の本当の全力を!!」

そういうと彼は、2枚のカードを目の前に掲げる。それは先ほど彼  
が3体のDDDを犠牲にしてまで手札に加えたモンスターだった。

そして高らかに謳いあげる。最強の王をこのフィールドに降臨さ  
せるために。

「私はスケール1の魔導賢者ガリレイとスケール10の魔導賢者ケプ  
ラーでペンデュラムスケールをセッティング!!」

「……な………に……?」

☆☆☆☆☆☆

DD魔導賢者ケプラー

ペンデュラム・効果モンスター

星1／闇属性／悪魔族／攻 0／守 0

【Pスケール：青10／赤10】

①：自分スタンバイフェイズに発動する。

このカードのPスケールを5つ下げる。

その後、このカードのPスケール以下のレベルを持つ、

P召喚した自分フィールドのモンスターを全て墓地へ送る。

【モンスター効果】

①：1ターンに1度、自分フィールドのPモンスター1体を対象と  
して発動できる。

そのモンスターを手札に戻す。

☆☆☆☆☆☆

☆☆☆☆☆☆

DD魔導賢者ガリレイ

ペンデュラム・効果モンスター

星10／闇属性／悪魔族／攻 0／守 0

〔Pスケール：青1／赤1〕

①：自分スタンバイフェイズに発動する。

このカードのPスケールを倍にする。

その後、このカードのPスケール以下のレベルを持つ、

P召喚した自分フィールドのモンスターを全て墓地へ送る。

〔モンスター効果〕

①：このカードが戦闘を行う場合、

このカードの攻撃力は、自分のPゾーンのカードの攻撃力の合計になる。

☆☆☆☆☆☆

零児のその言葉に驚きの声を上げるのはクオン。零児の口から出てきたその驚きの言葉に、これでもかというくらい目を瞠る。

だが零児はそんな彼の様子を一瞥しただけでなにもいわず、ペンデュラムスケールにセッティングした2体の悪魔がフィールドに無事に現れたのを確認すると言葉を続ける。

「これでレベル2からレベル9のモンスターが同時に召喚可能!!」

そして観覧席の面々もまさかのペンデュラムモンスターの登場に驚きで沸いた。

「あれは、ペンデュラムモンスター!?!」

「そんな!!」

「嘘……ッ!?!」

だがそんな彼らの中でも最もその登場に驚いていたのは、ペンデュラム召喚をこの世に誕生させた少年、榊遊矢。

今まで自分だけが唯一のペンデュラム召喚の使い手だと信じていた遊矢は、呆然とした表情でその光景を見ている。

「……なんで?どうしてあいつがペンデュラムをツ!?!」

半ば茫然自失としている遊矢を横目で確認した赤馬理事長は、やがて興味を無くしたかのようにその視線をデュエル場へと戻す。

ここに来るまで、突如新しい召喚方法を編み出した遊矢を、彼女はひよつとして自分たちの真の敵の仲間なんじゃないかと考えていたが、今の彼の態度でその考えが自分の杞憂だったことを察したからだ。

「(あの様子では彼は榊遊勝から特になにも聞いていないようね。たぶんなにもいわれずにペンデュラムカードを渡された。つまり彼は何も知らないことになる。……となるともう警戒する必要はなさそうね)」

そして赤馬理事長は口元に笑みを浮かべながら、その視線をクオンへと向ける。

「(うちの零児さんを相手にここまでやる腕は見事だったけど、どうやらここまでのようね。——さあ、とくと見なさい坊や！零児さんの真の力。我らレオ・コーポレーションの技術の結晶を!!)」

そしてそんな彼女の言葉に答えるがごとく、零児は力強く、それでいて謡うようにそのモンスターたちを呼び出した。——そう、最強の異次元の王たちを。

「我が魂を揺らす大いなる力よ。この身に宿りて闇を引き裂く新たな光りとなれ！」

——ペンデュラム召喚、出現せよ私のモンスターたちよ!!」

そして空に浮かぶ光りの渦から3体のモンスターが現れる。

その姿を見て唾然とする遊勝塾の生徒の一人、フトシが掠れるような声を漏らす。

「なんだ……あれ……?」

だが彼がここまで驚くのも無理はない。

零児が呼び出したまさに振り子を模したような巨大な3体のモンスターは、それほど大きな威圧感プレッシャーを体から放っていたのだ。

「全ての王をも統べる3体の超越神。レベル8「DDD死偉王ヘル・アーマゲドン」召喚!!」

☆☆☆☆☆☆

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン

ペンデュラム・効果モンスター

星8／闇属性／悪魔族／攻3000／守1000

【Pスケール：青4／赤4】

(1)：1ターンに1度、自分フィールドの

「DD」モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力はターン終了時まで800アップする。

【モンスター効果】

(1)：1ターンに1度、自分フィールドのモンスターが戦闘・効果で破壊された場合、

そのモンスター1体を対象として発動できる。

このカードの攻撃力はターン終了時まで、

対象のモンスターの元々の攻撃力分アップする。

この効果を発動するターン、このカードは直接攻撃できない。

(2)：このカードは、このカードを対象としない魔法・罫カードの効果では破壊されない。

☆☆☆☆☆☆

そのあまりの重圧に圧倒させられたのか、呆然としているクオンの姿を零児は片手で眼鏡の位置を直しながら鋭く見据える。

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：3900

手札：一枚

場：DDD反骨王レオニダス

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン×3

☆  
☆  
☆  
☆  
☆  
☆

「——さあ、そろそろ決着を着けようか」

## 第七話 奇術師の決闘VS異次元の王⑤悪魔のペンデュラム

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：3900

手札：1枚

場：DDD反骨王レオニダス

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン×3

魔法・罫：リバースカード×1

☆☆☆☆☆☆

### 【ペンデュラム召喚】

義弟である遊矢が生み出した最新の召喚方法。

未だ遊矢しか使うことができないはずのその召喚方法により3体のモンスター「DDD死偉王ヘル・アーマゲドン」。そのあまりの威圧感にクオンは飲まれかかるが、なんとか気を取り直して踏みとどまると、冷や汗を流しながらも、皮肉げな笑みを浮かべる。

「……なるほど、さすがはレオ・コーポレーション。ペンデュラム召喚のメカニズムを既に解明していたとは」

「まだ、試作品ではあるがね。それでも実際に使うには十分だと自負しているよ」

僅かに笑みを浮かべながらクオンに答える零児。しかし次の瞬間、その笑みをデュエリスト特有の闘志によって消し去ると、言葉が続ける。

「それでは、まずは魔術師の少女に消えてもらおう。DDD死偉王ヘル・アーマゲドンで、ブラック・マジシャン・ガールに攻撃!!」

その霊見の言葉により一体のヘル・アーマゲドンの体から紫色の光線が放たれる。

「させるか!!」

ブラック・マジシャン・ガールが破壊されようとしたまさにその瞬間。クオンはフィールド上に浮かぶ光の玉を足場に、軽やかに空中を駆けながらその中に1つに引つかかっていたアクションカードを手に取り、宙返りしながらその場で着地すると、そのまま発動させる。「私はアクションマジック「回避」を発動！このカードで相手モンスター1体の攻撃を無効とする!!」

☆☆☆☆☆☆

回避

アクション魔法（未OCG）

相手モンスター1体の攻撃を無効とする。

☆☆☆☆☆☆

回避の効果により、ブラック・マジシャン・ガールの目の前に光の防壁が貼られた。

これでブラック・マジシャン・ガールの破壊は免れると思われたが、突然その防壁は破壊されてしまう。

「なッ!？」

なにが起こったかわからず驚愕の声を上げるクオン。咄嗟に対戦相手の零児の方に視線を戻すと、その手には1枚の魔法カードが握られていた。

「悪いが私もアクション・マジックを発動させてもらった。この「対抗奇術」をね」

☆☆☆☆☆☆

対抗奇術

アクション魔法（作者オリジナル）

1000ライフポイントを支払うことにより、相手の魔法の発動を無効にする。

☆☆☆☆☆☆

対抗奇術。このカードは1000のライフポイントを支払うことにより、相手の魔法カードの発動を無効にするアクションマジック。どうやら、零児はクオンが1体目のヘル・アーマゲドンの攻撃を無効にすることを読んでいたらしく、いつの間にか拾っていたこのカードの効果により回避の効果が無効にしたらしい。

☆☆☆☆☆☆

零児

LP：3900↓2900

☆☆☆☆☆☆

「これでブラック・マジシャン・ガールにこの攻撃を防ぐ術はない。行け、ヘル・アーマゲドン!!」

零児の言葉の通り、防壁を失ってしまったブラック・マジシャン・ガールに、ヘル・アーマゲドンの攻撃に対抗するすべはなく、零児の号令と共に発射された破壊の光に吞まれ、そのまま破壊されてしまう―――はずだった。

しかし、クオンも一流のデュエリスト。未だ飄々とした笑みを崩さず、指を一つ鳴らして1枚のリバースカードを発動させる。

「ならば、私はリバースカード、「ブラック・イリユージョン」を発動!!」

☆☆☆☆☆☆

ブラック・イリユージョン

通常罫

(1)：自分フィールドの攻撃力2000以上の魔法使い族・闇属性モンスターは、

ターン終了時まで、戦闘では破壊されず、効果は無効化され、相手の効果を受けない。

☆☆☆☆☆☆

クオンがそのリバーズカードを発動させると、ブラック・マジシャンとブラック・マジシャン・ガールの前に、大きく「BM」と書かれた盾が出現し、ヘル・アーマゲドンの攻撃を受け流した。

「このカードは自分フィールド上の攻撃力2000以上、魔法使い族・闇属性モンスターを、戦闘による破壊、そして相手のカード効果により干渉から守護するトラップカード。このカードの効果により、このターン私のフィールド上のブラック・マジシャン。そしてブラック・マジシャン・ガールは破壊から免れることができます」

だがそんなクオンの言葉にも、零児は冷静な態度を崩さない。

「だが、そのカード効果では戦闘ダメージまでは防げないはず。ならば戦闘ダメージだけでも受けてもらおう。——私は2体目のヘル・アーマゲドンでブラック・マジシャンを攻撃!!」

零児のその言葉と共に、2体目のヘル・アーマゲドンの攻撃が、ブラック・マジシャンに向かって放たれる。

ブラック・イリユージョンの効果により、その攻撃は先程のように盾で受け流されるが、衝撃までは受け流すことができず、クオンはそのライフにダメージを受ける。

「ぐ、ぐう…ッ」

☆☆☆☆

クオン

LP:3000→2500

☆☆☆☆

苦悶の声をあげるクオン。だが、零児はそんな彼に構わずさらなるモンスターに命令を下す。

「さらに3体目のヘル・アーマゲドンの攻撃」

ヘル・アーマゲドンの攻撃により、ブラック・マジシャンにさらなる破壊の光が降り注ぐ。

そしてそれによって発生した衝撃波がクオンに襲いかかった。

「がッ!？」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クオン

LP : 2500 ↓ 2000

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「最後にレオニダスでブラック・マジシャンに攻撃」  
「く!？」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クオン

LP : 2000 ↓ 1900

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

黄金の悪魔の剣撃の衝撃にクオンは僅かに眉をしかめたが、なんとか持ちこたえる。

「……ふむ。このターンで終わらせようと思っていたが、流石にそう簡単にはとらせてもらえないか。ならば私はカードを1枚伏せてそのままターンを終了するでしょう」

そして絶体絶命の危機的状况で、ターンはクオンへと移行する。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

零児

LP : 2900

手札 : 1枚

場 : DDD反骨王レオニダス

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン×3

魔法・罫 : 伏せカード1枚

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

このターンで逆転できなければ自らの敗北は確実だと考えたのか、

久遠は今ままで最も力強くカードをドローする。

「私のターン。ドロー!!!」

☆☆☆☆☆☆

クオン

LP：1900

手札：2枚

場：ブラック・マジシャン

ブラック・マジシャン・ガール

魔法・罨：伏せカード1枚

☆☆☆☆☆☆

ドローカードを確認した久遠は僅かにほつと息をつく。

それは直接逆転に繋がるカードではないが、逆転できるかもしれないカードだったからだ。

そして久遠はその喜びのままにその魔法カードを発動させる。

「私は魔法カード「運命の宝札」の発動します」

☆☆☆☆☆☆

うんめい ほうざつ  
運命の宝札

通常魔法（未OCG）

サイコロを1回振り、出た目の数だけ自分のデッキからカードをドローする。

その後、出た目の数だけデッキの一番上からカードをゲームから除外する。

☆☆☆☆☆☆

このカードはサイコロを振り、出た目の数だけ自分のデッキからカードをドローし、その後出た目の数だけデッキの上からカードをゲームから除外するドローソース。

そのカードの効果に従い、空中でソリッド・ヴィジョンでできたサ

イコロが振られた。

そしてその結果出た目は……………「5」。

「よし。これで私はカードを5枚ドロワーできる。ドロワー!!」

そして5枚のカードをデツキから引いた久遠。それを確認した久遠は、驚きで目を瞪る。

彼はここで見事に引き当てたのだ。逆転のコンボへと必要な全てのキーカードを。

「揃った、逆転の方程式が」

「なに……………」

久遠の言葉がよく聞こえなかったのか、訝しげな声を上げる

しかし、彼は零児の眩きにただ笑みを浮かべて返すと、1枚のカードをデュエルデスクへと叩きつける。

「私はまずはこのカード「ガガガマジシャン」を召喚させていただきま  
す」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ガガガマジシャン

効果モンスター

星4 / 闇属性 / 魔法使い族 / 攻1500 / 守1000

1ターンに1度、自分のメインフェイズ時に

1から8までの任意のレベルを宣言して発動できる。

エンドフェイズ時まで、このカードのレベルは宣言したレベルになる。

「ガガガマジシャン」は自分フィールド上に1体しか表側表示で存在できない。

このカードはシンクロ素材にできない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クオンのフィールドに現れたのは、まるで特攻服のような黒い衣装に身を纏った男性の魔術師。

その鋭い眼差しで、零児を睨みつける。

「このモンスターは1ターンに1度、そのレベルを1から8までの好きなレベルに変更することができる。私はその効果によりガガマジシヤンのレベルを6へと変更」

☆☆☆☆☆☆

ガガマジシヤン

レベル4↓6

☆☆☆☆☆☆

ここに来て、やっと彼の狙いがなんなのか理解したのか、零児はその顔に納得の色を見せる。

「レベル6のモンスターが2体。——なるほど、エクシーズ召喚か」

「That's right. さあ、そろそろショーのクライマックスと行きましょう。——私はレベル6のブラック・マジシヤン・ガールとレベル6にしたガガマジシヤンの2体でオーバーレイネットワークを構築！」

すると、ブラック・マジシヤン・ガールとガガマジシヤンの2体が上空に出現した光の渦の中に飛び込んで、一つに交わる。

そして、その渦の中からそのモンスターは現れる

「真なる魔術師の力を受け継ぐ乙女よ。今同胞の魂と混じり合い、新たな力を持って我が元に舞い降りよ。エクシーズ召喚。魅了の魔力を持つ美☆魔☆嬢ここに降臨！レベル6「マジマジ☆マジシヤンギャル」!!」

すると、渦の中から先ほどまでフィールド上にいたブラック・マジシヤン・ガールとそっくりな、しかしそれでいて明らかに存在感が違う1人の美少女が舞い降りる。

☆☆☆☆☆☆

マジマジ☆マジシヤンギャル

エクシーズ・効果モンスター

ランク6／闇属性／魔法使い族／攻2400／守2000

魔法使い族レベル6モンスター×2

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除き、手札を1枚ゲームから除外して以下の効果から1つを選択して発動できる。

●相手フィールド上のモンスター1体を選択し、このターンのエンドフェイズ時までコントロールを得る。

●相手の墓地のモンスター1体を選択し、自分フィールド上に特殊召喚する。

☆☆☆☆☆☆

零児は突如現れたその美しい魔女に目を奪われかける自分を自覚しながらも、なんとかそこから視線を反らすと、クオンを睨みつける。

「だが、所詮は攻撃力2400。ヘル・アーマゲドンには及ばない」  
そんな彼の言葉に、しかしクオンは余裕の笑みを崩さない。

「そう、焦らないでくださいよ。このカードの真価はこれからです。——マジマジ☆マジシヤンギヤルの効果を発動！このカードのオーバーレイユニットを墓地へと送りさらに手札を1枚除外することにより相手モンスター1体のコントロールをこのターン、エンドフェイズまで奪うことができる!!」  
「なんだと!？」

「私は手札のトーラの魔導書を除外し、あなたのヘル・アーマゲドン1体のコントロールを奪わさせていただきます。魅了の魔法」  
チャーム・マジック

☆☆☆☆☆☆

トーラの魔導書まじょうしょ

速攻魔法

フィールド上の魔法使い族モンスター1体を選択し、

以下の効果から1つを選択して発動できる。

●このターン、選択したモンスターはこのカード以外の魔法カードの効果を受けない。

●このターン、選択したモンスターは罠カードの効果を受けない。  
☆☆☆☆

そのクオンの指示と共にトーラの魔導書をゲームから除外すると、マジマジ☆マジシヤンギャルは1体のヘル・アーマゲドンの前に飛び出てウインクすると、彼女の体からピンク色のハートが飛び出て、アーマゲドンに当たる。

するとアーマゲドンの瞳がハートの形になり、そのアーマゲドンはそのまま自身の居場所を零児のフィールドからクオンのフィールドへと移動した。

そんな様子を見ていた零児は屈辱で歯噛みする。

「(くっ!?まさかこんな効果があるとは……。だがたった一体のコントロールを奪ってもせいぜい相打ちさせるのが関の山。逆転とは言い難いはずだがどうする気だ?)」

そんな彼の内心を見透かしてか、クオンは笑みをさらに深めるとエクストラデッキから逆転の最後のカードを取り出した。———そう、自身の持つ真の切り札を。

「さあさあ、紳士淑女の皆さん!これより当劇場の主役を皆さんに紹介しましょう!!私はマジマジ☆マジシヤンギャル1体で再びオーバーレイネットワークを再構築!!」

「なに!?オーバーレイネットワークの再構築だと!!」

『オーバーレイネットワークの再構築』。それはLDSのエクシズコース所属の志島北斗も魅せた、エクシズモンスター1体を使い更なる強力なエクシズモンスターを呼び出すという才あるデュエリストのみに許された技。

これを行うということはつまり、

「(さらに強力なエクシズモンスターを召喚するということ!!)」

密かに戦慄する零児をよそに、久遠は両手を広げると、自身の切り札を呼び出すために天へと叫ぶ。———そしてそのモンスターは現れた。

「伝説の中に生きる黒の魔術師よ。今こそ仲間の力をその手に、その

真なる姿を顕現させよ。我が手に勝利を!!

——エクシーズ召喚。出でよ、ランク7「幻想の黒魔導師」!!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
幻想の黒魔導師げんそう くろまどうし

エクシーズ・効果モンスター

ランク7／闇属性／魔法使い族／攻2500／守2100

レベル7モンスター×2

このカードは自分フィールド上の魔法使い族・ランク6のエクシーズモンスターの上にこのカードを重ねてエクシーズ召喚する事もできる。

1ターンに1度、このカードのエクシーズ素材を1つ取り除いて発動できる。

手札・デッキから魔法使い族の通常モンスター1体を特殊召喚する。

また、魔法使い族の通常モンスターの攻撃宣言時、

相手フィールド上のカード1枚を選択して発動できる。

選択したカードをゲームから除外する。

「幻想の黒魔導師」のこの効果は1ターンに1度しか使用できない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クオンが召喚した、どこか彼のエースモンスターであるブラック・マジシャンに酷似したその魔術師の姿に、しかし零児は今度はブラック・マジシャンやブラック・マジシャン・ガールを召喚した時のような驚きは見せず、どこか困惑したような表情を見せる。

「幻想の黒魔導師だと……？見たことがないが、ブラック・マジシャンを模したモンスターのようだな」

「ええ。海外のとあるカード会社が特別に一枚だけ制作したカード

で、偶然参加していた大会で優勝賞品になっているのを私がいただいできたというわけです。だからあなたが見たことが無いというのも仕方が無いかもしれませんがね」

「なるほど……」

クオンの言葉に得心がいったとばかりに僅かに頷く零児の姿を確認すると、クオンは話を続ける。

「それではデュエルを続けます。——私はここで手札の魔法カードセフェルの魔導書を発動。このカードは手札にあるこのカード以外の魔導書カードを相手に見せることで、このカードの効果をも自分の通常魔導書カードと同じ効果にすることができ。私は手札にある「ネクロの魔導書」を公開することにより、私はこのカードの効果ヒュグロの魔導書と同じ効果に変更する」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ネクロの魔導書<sup>まじょうしょ</sup>

装備魔法

自分の墓地の魔法使い族モンスター1体をゲームから除外し、

このカード以外の手札の「魔導書」と名のついた

魔法カード1枚を相手に見せて発動できる。

自分の墓地の魔法使い族モンスター1体を選択して

表側攻撃表示で特殊召喚し、このカードを装備する。

また、装備モンスターのレベルは、

このカードを発動するために除外した

魔法使い族モンスターのレベル分だけ上がる。

「ネクロの魔導書」は1ターンに1枚しか発動できない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クオンの言葉とともに、フィールドに出されていたセフェルの魔導書の画面が塗りつぶされ、ヒュグロの魔導書へと入れ替わる。

「既に知っていると思いますが、ヒュグロの魔導書の効果はフィールド上の魔法使い族モンスターの攻撃力を1000ポイント上昇させ

るバンプアップ効果。この効果により、私は幻想の魔導師の攻撃力を1000ポイントアップする」

☆☆☆☆☆☆

幻想の黒魔導師

攻撃力2500↓3500

☆☆☆☆☆☆

「さらに私は幻想の黒魔導師の効果を発動。1ターンに1度、このモンスターオーバーレイユニットを取り除くことにより手札、デッキから魔法使い族の通常モンスターを特殊召喚する。私はデッキから2枚目のブラック・マジシャンを特殊召喚!!」

幻想の黒魔導師は自身を取り巻く光の玉を一つ杖に吸収させると天に掲げる。

すると空中に光の玉が出現し、その中から2体目のブラック・マジシャンが再びクオンのフィールド上に現れた。

☆☆☆☆☆☆

ブラック・マジシャン

攻撃力2500守備力2000

☆☆☆☆☆☆

問答無用で上級モンスターをフィールドに呼び出すその強力な効果に、しかし零児は冷静な表情を崩さず、僅かに眉を潜める。「確かに強力な効果だが、今更そのようなモンスターを呼んだところでなにができるというんだ？」

零児のその言葉に、しかしクオンは余裕の笑みを崩さず、さらなる魔法カードを発動させる。

「私はさらに魔法カード「千本サウザントナイフ」を発動。このカードはフィールド上にブラック・マジシャンが存在する場合に発動可能な専用スペル。その効果は相手フィールド上のモンスター1体を破壊する」

「なッ!?!」

「私はこの効果により、ヘル・アーマゲドン1体を破壊する」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

サウザンド  
千本ナイフ

通常魔法

自分フィールド上に「ブラック・マジシャン」が存在する場合に発動できる。

相手フィールド上のモンスター1体を選択して破壊する。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

魔法カードの発動と共に千本のナイフがブラック・マジシャンの周りに出現したかと思えば、そのナイフがそのまま1体のヘル・アーマゲドンへと降り注ぎ、そのままそれを破壊した。

その光景に、零児は僅かに顔を歪めながらもひとつ舌を打つ。

「……だがペンデュラムモンスターは破壊された場合エクストラデッキに戻り、次のターンには再び召喚できるようになる。そして私はDDD死偉王ヘル・アーマゲドンの効果を発動する!!」

するとフィールド上に残った1体のヘル・アーマゲドンのオーラが倍増し、その攻撃力が上昇する。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン

攻撃力3000↓6000

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

その姿を見て、観覧席の権現坂が叫び声を上げる。

「攻撃力6000だど!?!」

「そう、DDD死偉王ヘル・アーマゲドンは一ターンに一度、戦闘・効果で破壊されたモンスターの攻撃力分その攻撃力を上げることができきる。つまりこれは先ほどのアーマゲドンの攻撃力分その力を上げ

たわけだ。君のそのモンスターたちではこいつを超えることなどできらわけがない」

それはこの状況を見れば誰もがわかる現実。まさに『絶望』と呼ぶに相応しい絶体絶命の状況だった。

しかしそんな中、クオンはハットで目元を隠すと、その口元を不敵な笑みに形作る。

「——それはどうかな？」

「……なんだと？」

「バトル。ブラック・マジシャン！でDDD反骨王レオニダスへと攻撃!!」

「なにッ!？」

突然のクオンのまさに蛮行ともいってもいい行為に零児は驚愕の声を浮かべる。

そして彼の行動に驚いたのは零児だけではなく、観覧席にいた面面相觑も同じく驚きの顔を浮かべていた。

「なんだとッ!？」

「なにをする気だ、あいつ!!」

「自爆する気?」

だがそこでクオンは口を開くと、その効果を発動させる。——自身の逆転の一手となるカードの真の力を。

「私はこの瞬間、幻想の黒魔導師の更なる効果を発動!!1ターンに1度、魔法使い族の通常モンスターの攻撃宣言時、相手フィールド上のカードを一枚ゲームから除外することができる!!」

「なに!？」

そのあまりの効果に、今日一番の驚愕を見せる零児。

だが、それも仕方ない。

つまりこのカードは魔法使い族の通常モンスターさえいれば、1ターンに1度とはいえ、毎ターン問答無用で相手フィールド上のカードを除外できる。

そしてペンデュラムモンスターは破壊されればエクストラデッキに戻り、次のターンになれば再度呼び出すことができるが除外されて

しまつてはどうすることもできない。まさにペンデュラムの天敵といつてもいい効果だったのだから。

さらにDDD反骨王レオニダスは、実は契約書やDDの効果を発動する際に発生する自爆ダメージを無効にすることができ、零児の戦術の中核となる重要なカード。

ペンデュラム召喚の弱点をつき、さらに確実に零児の戦力を減らす、まさに見事な手だった。

そしてクオンは幻想の黒魔導師とその視線を一瞬合わせながらも領くと、その手を一気に振り下ろす。

「幻想の黒魔導師。破滅の魔術―ブラック・コア!!」

すると幻想の黒魔導師の杖から黒い球体が出現し、零児のフィールドに最後に残ったヘル・アーマゲドンがそれに吸い込まれる。

そして、攻撃対象がいなくなったことにより、ブラック・マジシャンの攻撃力は中断させる。

「…………だがまだ私のフィールド上には2体のヘル・アーマゲドンが残っている。これでは私にダメージを与えることはできんぞ?」

だがそんな零児の言葉に、クオンはただニヤリと笑みを浮かべる。

「対象がいなくなったことにより、私はブラック・マジシャンの攻撃を中断。――そして私は幻想の黒魔導師でヘル・アーマゲドンに攻撃します」

「なツ!?ばかな、ヘル・アーマゲドンの攻撃力は6000。いくら強化したとはいえ、幻想の黒魔導師では倒すことはできないぞ!!」

観客席の誰かから聞こえてきたその言葉に、クオンは内心苦笑する。

「まあ、そう思うのも仕方ありませんね。傍から見ればただの自爆と同じでしょうし。――だからこそ、驚かせがいがあるというものです」

そして、彼は最後のカードを発動させた。

「ここで最後の伏せカード「禁じられた聖杯」を発動!!フィールド上の効果モンスターの効果をターン終了時まで無効化することができる」「なんだとツ!？」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

禁じられた聖杯きんせいはい

速攻魔法

フィールド上に表側表示で存在するモンスター1体を選択して発動できる。

エンドフェイズ時まで、選択したモンスターの攻撃力は

400ポイントアップし、効果は無効化される。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

聖なる水を浴びせられたことにより、ヘル・アーマゲドンの体を包み込んでいたオーラが全て消し飛んだ。

「私はこのカードの効果により、ヘル・アーマゲドン1体の効果は無効化することにより、ヘル・アーマゲドンの攻撃力は3400ポイントに減少します」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

DDD死偉王ヘル・アーマゲドン

攻撃力6000↓3400

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

まさかの反撃に驚愕の表情を浮かべる零児。それに対してクオンは最初と同じく飄々とした笑みを浮かべる。

「これで幻想の黒魔導師の攻撃力はヘル・アーマゲドンの攻撃力を超えた。行け、幻想の黒魔導師。ハイ・エンシェントブラック・マジック超古代黒魔導師!!」

幻想の黒魔導師の杖先から巨大な魔力の波動が出現する。

「むうッ!?!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

零児

LP : 3900 ↓ LP : 3800

☆☆☆☆☆☆

僅かに苦しげに呻き声を上げる零児。

そんな彼の様子に、しかしクオンはチャンスとばかりに攻撃の手を緩めない。

「私はヘル・アーマゲドンの破壊に成功したため、ヒュグロの魔導書の効果によりデツキから2枚目のトーラの魔導書を手札に加える。――

――さらに私はヘル・アーマゲドンで直接攻撃!!」

マジマジ☆マジシャンギヤルで零児からそのコントロールを奪い取ったヘル・アーマゲドンから放たれた破壊の光が、元の持ち主であるはずの零児へと降り注ぐ。

「!?零児さん!!」

息子のまさかの絶体絶命の危機に、観覧席から悲痛な声を上げる赤馬理事長。

しかし、あわやそのまま敗北しかねないその状況に、零児は全く諦める様子を見せず、その瞳を鋭く光らせると、そのリバースカードを発動させた。

「私はその攻撃に対し、トラップカード「カード・ブロック」を発動!!」

☆☆☆☆☆☆

ガード・ブロック

通常罠

相手ターンの戦闘ダメージ計算時に発動する事ができる。

その戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージは0になり、自分のデツキからカードを1枚ドローする。

☆☆☆☆☆☆

ガード・ブロックの効果により、零児の周りに光の膜が貼られたかと思うと、そのままその膜がブラック・マジシャンの攻撃を防ぎきった。

「このカードは戦闘ダメージ計算時に発動できるトラップカード。そ

の戦闘によって発生する自分への戦闘ダメージを0にし、私はデッキからカードを1枚ドロウすることができる。ドロウ!!」

勢いよくデッキからカードをドロウする零児。そんな彼の姿に勝負を決められなかった悔しきで僅かに歯噛みするクオンであったが、首を僅かにふり気を取り直すと、自身のモンスターにさらなる命令を下した。

「ならば2体目のブラック・マジシャンで攻撃です。行け、ブラック・マジシャン。黒・魔・導!!」

ブラック・マジシャンの杖から放たれた強力な魔力の波動。

しかし零児はその攻撃に不敵に笑うと、手札から1枚のカードのモンスターをフィールド上に出現させる。

「私はその直接攻撃に対し、手札のバトルフェーダーの効果を発動。相手モンスターの直接攻撃の際、このカードをフィールド上に特殊召喚することにより、このバトルフェイズを終了させる」

☆☆☆☆☆☆

バトルフェーダー

効果モンスター

星1／闇属性／悪魔族／攻 0／守 0

(1)：相手モンスターの直接攻撃宣言時に発動できる。

このカードを手札から特殊召喚し、その後バトルフェイズを終了する。

この効果で特殊召喚したこのカードは、

フィールドから離れた場合に除外される。

☆☆☆☆☆☆

突如フィールド上に出現した振り子の悪魔に、クオンは驚愕の表情を見せる。

「な……ッ!?バトルフェーダーだと。まさかガード・ブロックのードローで引き当てたともいうのか!!」

クオンのその言葉に、零児はいつもの冷静な笑みとは違う、気のせ

いか少し得意げな顔で答える。

「生憎と運はいい方なのでね。さて、次はどうする?」

「……………私はカードを2枚伏せてこれでターンを終了。私のターンが終了したことによりヘル・アーマゲドンのコントローラーがあなたのフィールド上に戻ります」

クオンのフィールドから零児へとヘル・アーマゲドンのコントローラーが戻ると共に、クオンから零児へとターンが移行する。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
クオン

LP : 1900

場 : ブラック・マジシャン×2

幻想の黒魔導師

ヘル・アーマゲドン

魔法・罨 : 伏せカード×2

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

零児は自分のフィールド上にヘル・アーマゲドンの姿が戻ったことを確認すると、デッキからカードを勢いよくドロウする。

「了解した。私のターン、ドロウ!!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

零児

LP : 3800

手札1枚

場 : バトルフェーダー

ヘル・アーマゲドン

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ドロウしたカードを確認しながらにやら考え込んでいる零児の姿に、クオンは口元に笑みを浮かべながらも、警戒からかその瞳を鋭

く光らせる。

相手の場にいるモンスターの攻撃力が自身のモンスターの攻撃力より上だということもあるが、彼が警戒している理由はそれだけではない。実際にデュエルする姿を見たことはないが、聞こえてくる噂から凄腕のデュエリストだと考えてはいたが、まさかここまでやるとは思っていなかったからだ。

「さすが今は表舞台から姿を消しているとはいえ、未だに最強とも噂されることもある天才デュエリスト。さすがに一筋縄ではいかないようですねえ。——それに幻想の黒魔導師の効果によりレオニダスの除外に成功したとはいえ、未だ彼のエクストラデッキには2体のヘル・アーマゲドンが眠っている。それはいつでもペンデュラム召喚に呼び出され、フィールド上に存在するヘル・アーマゲドンと合わせて3体のヘル・アーマゲドンの攻撃により、私のフィールドは今度こそ壊滅してしまう。下手したらこのターンで負ける可能性も否めない。……まあ一応、対策は用意してはいますけどねえ」

クオンはその視線を自身の場にある、2枚の伏せカードへと落とす。

「私が今伏せたのは魔法使い族モンスターへの魔法・罨カードの干渉を防ぐトーラの魔導書。そしてもう1枚は攻撃反応型最強のトランプカード「聖なるバリアミラーフォース」。例えまたペンデュラム召喚でモンスターを大量召喚しても、このカードで全滅させることが可能のはず」

☆☆☆☆

聖なるバリア —ミラーフォース—

通常罨

(1)：相手モンスターの攻撃宣言時に発動できる。

相手フィールドの攻撃表示モンスターを全て破壊する。

☆☆☆☆

「(これで彼がどのような行動をしてきても対処はできる。………さ

て、彼はこの布陣をどうやって突破するでしょうか)」

どこか期待しながら、零児へと視線を戻すクオン。

彼のデュエリストとしての勘がいつていたのだ。

彼はこのままで終わることはない。何かとんでもないことをやってのけると。——尤も、デュエルがこのまま続けばの話だったが。

「なにッ!？」

「……これは?」

それは突然起こった。

零児のペンデュラムスケールにセッティングしてあった魔導賢者ケプラーとガリレイの体から、なにやら機会がシヨートしたような音がしたかと思えば、体から電流をはじけさせ、光の柱に記されたそれぞれのモンスターのスケールがどんどん減少していき、とうとう2体のスケールが2から5までへと減少してしまう。

そしてその現象の影響か、それと同時に彼の場にいたヘル・アーマゲドンが巻き込まれるように爆発を起こして、そのまま破壊されてしまった。

クオンはなにが起こったかわからないようで呆然としていたが、零児はなにが起こったのか察したようで、目を細めながらも舌打ちを打つ。

「なるほど、ここまでが限界か」

そして観覧席にいた遊勝塾の面々も思いがけない事態にしばし呆然としていたが、どうやらその事態がクオンに有利に働きそうなことは理解できたようで、ここぞとばかりに声援を送る。

「行けー、今だ!!」

「これは好機だ」

「今なら、3と4のモンスターしか呼べないはず!」

「がんばれー!!」

クオンはそんなちゃっかりした声援に今は相手のターンなんですけどねえと苦笑しつつ、零児の方に視線を戻すと、彼は今のフィールドの状況になにか思うことがあるのか、光の柱の中にいる二体のペン

デュラムモンスターを視界に入れながらもなにやら思考に耽っていた。

「(所詮はプロトタイプ。まだまだ安定しない。しかしこの状況は……まさかッ!?)」

と、そこで零児はなにかに気づいたようで、片手で顔全体を覆うと突然笑い出した。

「ふふふ、ふははははははは!!なぜ、気づかなかった。ペンデュラムも完成形ではないことに」

「……なに?」

零児のその言葉に、クオンは不審そうに眉間を寄せる。

そして観覧席にいるもう一人のペンデュラム召喚の使い手である遊矢も、零児の言葉に驚きの表情を示す。

「ペンデュラムも……完成形ではない?」

詳しく事情を聞きたいところだが、だが零児はそんな彼らにかまわず話を続ける。

「私には見えた。ペンデュラム召喚の更なる進化の可能性が。今、それを実証してみせよう!」

そういうと零児は片手を天上へと高く上げる。

するとクオンはなぜか彼から受ける威圧感が急激に増したような感じを受けはじめた。

「(なんだ?やつはなにをしよう……?)」

だが、そこでとある人物の叫び声により、デュエルに邪魔が入ってしまう。

「——なんですって!」

「ん?」

「え?」

観覧席から聞こえてきたその声に、零児とクオンは二人ともその視線を声の発生源の方へと移動させる。

するとそこいたのはLDSの理事長、赤馬日美香だった。

彼女は部下らしき男から小声でなにか伝えられており、それを横で聞いていたLDSの生徒光津真澄が、普段は男子生徒から「可愛くな

い」と陰口を叩かれるぐらいの冷静沈着さから一転、驚きの声を上げる。

「マルコ先生が!？」

「零児さん!!」

そしてそれは赤馬理事長にとっても一大事だったようで、彼女は普段の自信に満ち溢れた表情から一転、継るような視線を自らの息子へと向ける。

そんな母親の顔を見た零児はなにやら只ならぬ気配を感じ、デュエル中ではあるが何が起こったのか事情を聴くために、自身のデュエルディスクで自身の腹心である“中島”と回線をつないだ。

「どうした、中島?」

そして中島から事情を聴いた零児は表情を僅かに強張らせると、先ほどのやる気はどこへやら。デュエルディスクを停止させると、出口へと速足で歩きだす。

そんな彼の突然の行動に、先ほどまで呆然としていたクオンは我に返ると慌てて口を開く。

「ちよ、ちよつと?」

「この勝負預ける」

「はあ!？」

いきなりのその言葉に思わずクオンはいつもの飄々とした調子を崩し素っ頓狂な叫び声をあげてしまうが、そんな彼の様子に零児はくすりとも唾うこともなく、クオンに対して言葉を続ける。

「緊急の用件ができた。この決着はいずれまたつける」

「は、はあ……?」

最後に思わぬ言葉を受けてクオンは結局間抜けな声しか出すことができず、零児もそんな彼を一瞥すると、そのままその場を去ろうとしたのだが、そんな彼に声をかける者が。

「待って!!」

「ん?」

「おや?」

その声にクオンと零児が振り向くと、そこには走ってきたのだろ

う。いつの間にか息を切らしたクオンの義弟である遊矢が立っていた。

遊矢は息を整えると真剣な、それでいてどこか怯えたような表情を浮かべながら口を開く。

「あ、あんた名前は？なんでペンデュラムを！」

「……なるほど、榊遊矢。榊遊勝の実子か」

「!?父さんのこと知ってるのか？」

「もちろん。君の父上、榊遊勝のことは、アクションデュエルに新しい可能性をもたらした開拓者<sup>バイオニア</sup>として深く尊敬しているよ。尤も養子がいるなんて話は今の今まで聞いたことなかったが」

そういうと、零児はチラリとその視線をクオンへと視線を一瞬向けた後、再びその視線を遊矢へと戻す。

「あいにくと、ペンデュラムのことは企業秘密でもあるから詳しくはいえないが、とりあえず自己紹介だけはおこうか。——私の名前は“赤馬零児”。一応レオ・コーポレーションの社長をしているよ」

「…赤馬……零児……」

噛み締めるように零児の名を口にする遊矢。そんな彼に構わず零児はその場で踵を返す。

「いずれ君とも戦ってみたいものだ」

そんな言葉を残し、零児は今度こそ遊勝塾を後にするのだった。

## 奇術師の設定紹介※ネタバレあり

### ■クオン・遊灯ゆうひ

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

年齢：16歳

性別：男

所属：遊勝塾

通り名：奇術師《トリックスター》

デツキ：【魔法使い族】

特技：奇術マジック

好きなこと：人を驚かせたり、楽しませること

エースモンスター：ブラック・マジシャン

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

この小説の主人公にして転生者。両親は既に他界しているが、日本人の父親とフランス人とのハーフ。

前世はグルズで「ブラックマジシャン使い」の異名で恐れられていたレアハンター”パンドラ”。

バトルシテイ終了後はマリクによる洗脳が解け、恋人であるカトリーナが既に死んでいたことを思い出したことにより、絶望し、自暴自棄な生活を送っていたが、とあることがきっかけでかつての「自分のマジックで世界中の人々を笑顔にする」という夢を思い出し改心。そこからはマジシャンとして再び表舞台に舞い戻る。

再びマジシャンとして復帰した後は、自分の理想に賛同してくれるマジシャンやスポンサーを集い、仲間たちと共に世界中でマジックショーを披露し続け、その結果、仲間たちと共に世界ノーベル平和賞。そして個人としては奇術師としての最高の榮譽である「マジック・オブ・ザ・イヤール」を受賞。

しかし、その授賞式でかつてのグルズ時代にデツキごとレアカードを奪った元デュエリストにナイフで滅多刺しにされてそのまま死

亡。そののちに「遊戯王ARC-V」の世界に転生することに。

初めは前世の記憶を忘れていたのだが、ある日家族旅行に行った際に事故にあってしまい両親が死亡。事故の ショックのせいか記憶を思い出した。

記憶を思い出してからは、これからの生活をどうすればいいのかということが悩みであったが、実は彼の家族はARC-Vの世界の主人公である榊遊矢の家族に引き取られる。

そこで義父である榊遊勝からアクシオンデュエル、そしてエンタメデュエルについて教えられ、その思想に感動し、自分が本当に求めていたのはこれだと、正式に遊勝から遊矢と共にエンタメデュエルについての教えを受けることに。

遊勝の失踪後は、遊勝の汚名を少しでも晴らすため、そして遊勝塾に1人でも塾生を取り戻すために、様々な大会に出場したり、チラシを配ったりと試行錯誤していたが、遊勝が失踪してまだすぐの時期であったために遊勝への悪感情がまだ強かったためなかなか上手くいかなかったため、苦悩する毎日を送っていたが、ある日とある企業が開催した大会の優勝者が、デュエルの聖地の一つであるアメリカラスベガスへとデュエル留学へ行けると知り、自らの修業とアメリカにエンタメデュエルという概念を広めるために、その大会の優勝を見事もぎ取り、そのままラスベガスへとデュエル留学へ行くことに。

デュエル留学へ行つて3年。必死の活動が実を結んだのが、アメリカでかなりの知名度を誇るデュエリストとなり、若干16歳でという、赤馬零児と同じくプロ資格の最少年取得記録を打ち立てる。

だが、ある日義弟であるペンデュラム召喚という全く新しい召喚方法を編み出したことを知り、それが産みだす利益に寄ってくる者たちが、遊矢、そして遊勝塾の面々に厄介事を持つてくることを考えた彼は、もうすぐデュエル留学の期間が終わることも考え、彼らの助けとなるために、デュエル留学を早めに切り上げ、日本へと帰国した。

エンタメデュエルを広めるために、アメリカという国限定ではあるが様々な大会に出場していたためにアメリカではかなりのファンがおり、また前世では不本意とはいえ、自身の悪行が原因で思わぬ形で

死ぬことになってしまったため現世ではそれなりに高い正義感を持っており、自身で解決できそうな厄介事には進んで首を突っ込むようになってしまったために、さりげなく一人人としては考えられないほどの人脈を持っていたりする。(例：友人がプロ資格を取得した記念とはいえかなりの金額がかかるはずの企業オリジナルのカードを作り、それをぽんと上げてしまう大企業の社長など)

現世では、なぜかデュエルでもパックを買った時やデュエル時にもかなり引きがよくなっており、伝説のレアカードとなっているブラック・マジシャンを自力で手に入れたり、同じく伝説のレアカードであるはずのブラック・マジシャン・ガールをカードくじで当てたり、追い詰められてもかなりの確率で逆転できたりしており(ご都合主義)、そのおかげか、プロデュエリスト試験でもかなりの好成績で合格した。

## 謎の襲撃者編

### 第八話 兄弟対決!?! VS 遊矢①ペンデュラム召喚

業界最大手のデュエル塾であるLDSの来襲を受け、塾の経営権を賭けて戦うこととなった遊勝塾の面々。遊勝塾が誇る三つのエリートコースであるエクシーズ、融合、シンクロコースでトップに立つ生徒たちと戦うことになった。

幸いちようどアメリカから帰国していた遊矢の義兄であるクオンが、突如参戦することとなったレオ・コーポレーションの社長である赤馬零児と互角の戦いをくり広げ、その後何かトラブルがあったのか勝負が着く前にどこかへ行ってしまったために遊勝塾の危機は免れることとなったのだが、なぜかその戦いが終わった後でも遊勝塾備えつきのデュエル場で2人のデュエリストが相對していた。

1人は榊遊矢。

かつてのデュエルチャンピオンの血を引くエンタメデュエリスト。一時はタイトルマッチ前に突如父が失踪してしまったために卑怯者の息子として蔑みの視線を送られていたが、新たな召喚方法であるペンデュラム召喚を生み出し現チャンピオンであるストロング石島を倒したことにより、新世代の代表的なデュエリストの1人として、そして榊遊勝の後継者として、現在では舞網市で多くのファンを持つエンタメデュエリストとして有名だ。

そして、もう1人はクオン・遊灯。

遊矢の義兄にして前世の記憶という不思議な物を持つエンタメデュエリスト。エンタメデュエルをアメリカに広めるため、そしてエンタメデュエリストとして腕を磨くためにアメリカへと渡り、なんとプロ資格を取得した一流のデュエリスト。舞網市では殆どその存在を知る者はいないが、アメリカではエンタメデュエルの第一人者として、若くしてこれまた多くのファンを獲得している。

それぞれ、根拠地は違うが多くの人々に次代のデュエリストとして期待されている2人であったが、なぜそんな2人がこのように対峙し

ているのか？それを説明するには時間をLDSの面々が去った直後の時まで時間を遡らなければならない。

☆

☆

何か重大なトラブルでも起こったのか、LDSの面々が慌ただしく去っていったのを見て困惑していた遊勝塾のメンバーたちであったが、これで遊勝塾消滅の危機をなんとか免れてたと安堵のため息をついたのだが、そんななか1人だけ浮かぬ顔をしているものがいた。遊矢だ。

自分だけしかできないはずの自分が新たに生み出した召喚方法「ペンデュラム召喚」。そのペンデュラム召喚を、しかしクオンと零児のデュエルで零児がそのペンデュラム召喚を行ったことにより、もはやペンデュラム召喚が自分だけの物ではないと知ったために彼は落ち込んでしまったのだ。

素良が無責任な発言をし、それを子供たちから責められ彼がその場を後にした後、子供たちはそのまま遊矢を慰めようとしたのだが、その当の本人である遊矢は、

「————ペンデュラム召喚はもう俺だけの物じゃない!!」

と叫び、彼らが差し出してきた手を振り払いそのまま去ろうとする。

そんな彼の様子を見ていた遊勝塾の塾長である柊修三は、遊矢を諫めようと前に出ようとしたが、そんな彼より先に遊矢に近寄るものがあった。——遊矢の義兄であるクオンだ。

遊矢の腕を掴んでその場を去ろうとしているのを止めた彼は、いつものように飄々とした笑みではなく、どこか厳しい顔をしながら口を開く。

「どこに行くのですか遊矢？」

「兄さん……」

遊矢は自身を止めた兄の顔を何かいいたげに見上げるが、しかし結局その場でなにもいうことなくその場で俯いてしまう。

そんな遊矢の姿に、クオンはその場でため息を吐いた。

「はあ……。そんなに赤羽零児がペンデュラムを使ったことがショックでしたか？」

「ッ!？」

「どうやら凶星のようですね。——ですが、今回のことが無くてみずれば彼はペンデュラムを手に入れたと思いますよ。あの赤羽零児ならね」

「え?」

「赤羽零児。彼は日本でプロ資格取得の最少年記録を叩きだした天才デュエリスト。そしてあのレオ・コーポレーションの社長でもある」  
レオ・コーポレーション。それはデュエル業界において世界最大ともいえる業績規模を誇る大企業。クオンはそのレオ・コーポレーションの社長である零児ならば、ペンデュラム召喚を解析し、新たにペンデュラムカードを造ることなど造作もないのだろうと口にする。

「尤も、あの最後にペンデュラムモンスターが自然と破壊されていた様子を見ると、まだ完全に完成というわけではなさそうでしたが。しかしあの様子を見るに、完全に完成させて流通レベルにまでに実用化させるのも時間の問題みたいですが」

「そんな……」

「(はあ……。デュエルの腕は大分成長したようですが、弱気な性格は変わっていないようですね」

自身の言葉に落ち込む遊矢を見てやれやれと頭を振るクオンであったが、その後少し何かを考え込むような仕草を見せると、にっこりと笑みを浮かべ、遊矢の顔を覗き込み彼はこう提案したのだ。

「それでは遊矢。久しぶりに私とデュエルといきましょうか」

「……は?」

☆

☆

と、まあ以上のようなやりとりがあり、彼らのデュエルは実現する運びになったのである。

最初は赤馬零児のペンデュラム召喚にショックを受けていた遊矢は、乗り気じゃないとそのデュエルを断ろうとしたのだが、しかし久

遠はそんな遊矢の言葉を聞かず、子供たちに「私たちのデュエルみた  
くありませんか？」などといつて場を盛り上げてクオンの方が強引に  
デュエルにこぎつけたのだ。

だからこそ、子供たちはどこかわくわくした表情でデュエル上に視  
線を向けていたが、しかし柚子はどこか心配そうにデュエル場で対峙  
している2人を見つめていた。

「クオン兄さん、どうしてこんなことを……」

どこか信じられないような気持ちでそうぽつりと呟く柚子。彼女  
には、なぜクオンがショックを受けて意気消沈している遊矢にこのよ  
うな手まで使って無理やりデュエルさせようとしているのかわから  
なかったからだ。

だが、同じ“漢”であり、クオンがなにをしようかなんとかなく理解  
していた権現坂は、彼女の肩を軽く手を乗せながら慰めるように言葉  
を続ける。

「大丈夫だ柚子」

「権現坂……」

「クオン殿は普段は飄々とした態度をとっているが、弟思いの御仁。  
遊矢のためにならぬことはせぬよ」

そして信頼の眼差しをクオンに向ける権現坂。そしてそれはコン  
トロールルームで2人の姿を見下ろしている修三も同じだった。

彼は本来自分がやるべきことをクオンに任せてしまったことに申  
し訳なさを感じながらも、彼なら自分よりうまくできるだろうと信  
じ、ならば年長者として自分は2人のエンタメデュエリストのために  
最高の舞台を用意するだけだと1枚のアクションフィールドを発動  
させる。

「それでは行くぞ2人も。最高のエンタメデュエルを見せてくれ！

——アクションフィールド”マジカルブロードウェイ”発動!!」  
そして修三がコントロールパネルを押すと、フィールド上には多く  
の巨大なビルが立ち並び、光に溢れた大都市が現れる。

そのフィールドを見たクオンは内心で苦笑した。そのフィールド  
魔法が義父・榊遊勝が最も得意としていたアクションフィールドであ

ることに気づいたからだ。

「なるほど、「マジカルブロードウェイ」。遊勝さんが最も得意としていたワールド魔法ですか。なるほど、塾長も粋なことをしてくれま  
すねえ……）」

そんなことを考えながら、クオンが遊矢に視線を向けると、そこには、未だなぜ自分がここに立っているのかわからないのか理解できていないような、どこか不安げな顔をしてクオンのことを見つめていた。

「兄さん、本当にやるのか？」

「ええ、あなたがどれだけ腕を上げたいのか知りたいですし、それに――」

そういつてクオンが観客席でこちらを期待の眼差しで見ている3人の子供たちへと視線を向ける。3人は3人ともキラキラした瞳でこちらを見ており、これから始まるデュエルを余程楽しみにしていることがわかる。

「あんなに期待した眼でこちらを見られたら、答えなくてはエンタメデュエリストの名が廃りますよ？」

「うぐツ!？」

どうやらそれは遊矢自身も思っていたようで、クオンの言葉に彼は言葉に詰まらせる。

そんな彼の姿に、クオンはくすりと笑みを深めながらも密かに呟いた。

「……それに私もあなたに伝えたいことがありますしね（ぼそり）」

「え？兄さん何かいった？」

遊矢はクオンの呟きに何をいったのか尋ねるが、クオンは「なんでもありませんよ」と笑って誤魔化しながらも話を続ける。

「それではそろそろ始めましょうか」

そんなクオンの言葉に遊矢が頷くと、お互い共に大きな声でお決まりの掛け声を交互に上げる。

「戦いの殿堂に集いしデュエリストたちが！」

「モンスターと共に、地を蹴り、宙を舞い！」

「フィールド内を駆け巡る！」

「見よ！これぞデュエルの最強進化系！」

「アクシヨォー——ン……」

「——デュエル!!」

そしてここにエンタメデュエリスト同士の兄弟対決が始まった。

☆

☆

始まった兄弟対決。デュエルディスクの判定により、先行は遊矢から始まる。

「俺のターン!!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

遊矢

LP：4000

手札5枚

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「(兄さんが何を考えてるのか知らないけれど、やれっていうならやってやるよ!!)」

そんなどこかやけくそ気味な思考になった遊矢は、手札にある「時読みの魔術師」と「星読みの魔術師」でペンデュラム召喚を試みようとするが、そこで彼の脳裏に赤馬零児がペンデュラム召喚を成功させた場面が過ぎった。

「……ッ！」

それを思い出した遊矢は、なぜかその手を止めてしまい、違うカードを選択した。

「俺は手札から「E Mフレンドンキー」を召喚する！」

☆☆☆☆☆☆

EM《エンタメイト》フレンドンキー

効果モンスター

星3 / 地属性 / 獣族 / 攻1600 / 守 600

(1) : このカードが召喚に成功した時に発動できる。

自分の手札・墓地からレベル4以下の「EM」モンスター1体を選んで特殊召喚する。

☆☆☆☆☆☆

遊矢のフィールドに出てきたのは☆のマークがついた箱を背負ったシルクハットを被ったロバ。

そして遊矢はそのままそのモンスターの効果を発動させる。

「さらに俺はフレンドンキーの効果を発動。このカードが召喚に成功した時に俺は手札・墓地から「EM」と名のつくカードを特殊召喚することができる。俺は手札から「EMウイップ・バイパー」<sup>エンタメイト</sup>を特殊召喚!!」

☆☆☆☆☆☆

EM<sup>エンタメイト</sup>ウイップ・バイパー

効果モンスター

星4 / 地属性 / 爬虫類族 / 攻1700 / 守 900

(1) : 1ターンに1度、フィールドの表側表示のモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターの攻撃力・守備力をターン終了時まで入れ替える。

この効果はお互いのメインフェイズにのみ発動できる。

☆☆☆☆☆☆

そしてフレンドンキーが背負っていた箱から1匹のシルクハットを被ったヘビが飛び出した。

「さらに、俺はカードを1枚伏せてターンを終了する!!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
遊矢

LP：4000

手札：2枚

場：EMフレンドンキー

EMウィップ・バイパー

魔法・罨：伏せカード1枚

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

遊矢のその宣言と共に、次はクオンのターンへと移行する。

「それでは私のターンですね。ドロロー!!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クオン

LP：4000

手札6枚

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

クオンはドロローカードを確認してなにやら考えていたが、やがてその笑みを深めると遊矢へと視線を向ける。

「遊矢。一つだけ聞きたいことがあるのですがよろしいですか?」

「?なんだよ?」

不思議そうに首を傾げる遊矢。だがクオンはそんな遊矢の様子に構わず話を続ける。

「ペンデュラム召喚を使わない……いや、ペンデュラム召喚を使うのが怖いですか? 赤馬零児と比べられるのが」

「ツ!? な、なんで!!」

「やっぱり……」

クオンの言葉にびくりと反応する遊矢の姿を見て、クオンは先ほどから遊矢に感じていた違和感の正体が自分の想像通りだと知り、納得の言葉を吐いた。

そう、遊矢が先ほどペンデュラム召喚の手を止めたのは、無意識に赤馬零児の姿が頭によぎり、自分だけの力だ思っていたペンデュラム召喚で彼に劣ると思われるのが怖いと感じていたからこそ、彼はペンデュラム召喚をするのを止めてしまったのだ。

前世の長く濃厚な人生経験により、人並み外れた観察眼を得ていたクオンはそのことを見抜いていたのだ。

遊矢はしかしそのことを認めたくないのか、「あ、う……」となにやら言葉を紡ごうとするが、クオンの言葉が凶星だったことには変わらなかつたので、そのままその場で俯いてしまう。

そんな遊矢の様子に、クオンはしばし厳しい顔をしていたが、やがてその顔をいつもの笑みに戻すと言葉を続ける。

「遊矢。何事も初めてをしてのけた人はいますが、それを自分だけの物にした人は私の知る限りいません。——私がそれを教えてあげましょう」

「え？」

不思議そうに顔を上げる遊矢。そんな彼の様子に笑みを深めながらもクオンは1枚の魔法カードを発動させる。

「私は魔法カード「召喚師のスキル」を発動。このカードの効果により私はデッキからレベル5以上の通常モンスターを手札に加えることができます」

☆☆☆☆☆☆

召喚師のスキル

通常魔法

(1)：デッキからレベル5以上の通常モンスター1体を手札に加える。

☆☆☆☆☆☆

召喚師のスキルとは、デッキからレベル5以上の通常モンスターを手札に加えるカード。

通常モンスターを主軸にしているデッキを使うデュエリストなら

ばかなりの確率で採用している魔法カードであり、だからこそ遊矢は  
てつきりクオンが自身のエースであるブラック・マジシャンを手札に  
加えるのかと思ったのだが、クオンが手札に加えたのは、遊矢にとつ  
て、いやこのデュエルを見ている人にとってあまりに予想外のカード  
だった。

「私はこのカードを手札に加えさせていただきます」

「なッ!?そ、そのカードは!!」

クオンが手札に加えたカードを見て、遊矢は驚愕の声を上げる。

だが、これも仕方ない。クオンが手札に加えたのは、遊矢にとって  
あまりにも衝撃的なカードだったのだから。

「そう、私が手札に加えたのはこのカード。」

——ペンデュラムモンスター「竜穴の魔術師《まじゅつし》」

☆☆☆☆☆☆

竜穴の魔術師《まじゅつし》

ペンデュラム・通常モンスター

星7／水属性／魔法使い族／攻 900／守2700

【Pスケール：青8／赤8】

(1)：iターンに1度、もう片方の自分のPゾーンに「魔術師」カー  
ドが存在する場合、

手札のPモンスター1体を捨て、

フィールドの魔法・罨カード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

【モンスター情報】

若くして竜の魂を呼び覚ます神通力を体得した天才魔術師。

その寡黙でストイックな魔術への姿勢から人付き合いは苦手だが、  
弟子の「竜脈の魔術師」にいつも振り回され、調子を狂わされてい  
る。

☆☆☆☆☆☆

そう、クオンが手札に加えたのは、通常モンスターではあるがなんとペンデュラムモンスターであるモンスター。

まさかのペンデュラムモンスターの登場に遊矢だけではなく、観客席にいた遊勝塾の面々からも驚きの声上がる。

「えー!？」

「ペンデュラムモンスター!!」

「なんでクオン兄さんが!？」

そんな声に気をよくしたのかクオンはさらに笑みを深めながらも言葉を続ける。

「それではショータイムの始まりです！私はスケール1の「りゅうみやく竜脈の魔術師」とスケール8の竜穴の魔術師をペンデュラムスケールにセツティング！」

☆☆☆☆☆☆  
竜脈の魔術師

ペンデュラム・通常モンスター

星4 / 地属性 / 魔法使い族 / 攻1800 / 守 900

【Pスケール：青1 / 赤1】

(1)：1ターンに1度、もう片方の自分のPゾーンに「魔術師」カードが存在する場合、

手札のPモンスター1体を捨て、

フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを破壊する。

【モンスター情報】

元気だけが取り柄の駆け出しの少年魔術師。

実は無意識のうちに大地に眠る竜の魂を知覚する能力を有しており、

まだ半人前ながらその素質の高さには師匠の「竜穴の魔術師」も一目を置いている。

☆☆☆☆☆☆

そしてクオンがデュエルディスクに2枚のペンデュラムカードをセッティングすると、久遠の背後に2つの魔術師を内蔵した光の柱が出現する。

「これでレベル2から7のモンスターが召喚可能！」

そしてクオンは高らかに謳いあげる。

——— 自らの信頼する僕たちを呼びだすために。

「我が魔導を支えし偉大なる力よ。今こそその威を示し、新たな奇跡を誕生させよ！——— ペンデュラム召喚。現れる我がモンスターたちよ!!」

そしてそんなクオンの口上に応えるかのように彼の頭上に光の渦が出現したかと思えば、そこから1体の禍々しい竜と1人の魔術師が出現する。

「レベル6 「まそつじやりゆう魔装邪竜イーサルウエポン」。そしてレベル7ブラック・マジシャン!!」

☆☆☆☆☆☆  
まそつじやりゆう魔装邪竜イーサルウエポン

ペンデュラム・効果モンスター

星6 / 闇属性 / ドラゴン族 / 攻2300 / 守1600

【Pスケール：青4 / 赤4】

(1)：iターンに1度、自分の墓地の「魔装戦士」モンスター1体を除外し、

フィールドのカード1枚を対象として発動できる。

そのカードを破壊する。

【モンスター効果】

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、

フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

そのモンスターを除外する。

☆☆☆☆☆☆

そしてクオンは呆然とこちらを見ている遊矢に、いつもの笑みとは違う、悪戯が成功した子供のような笑みを浮かべた。

「——さあ、最初からクライマックスと行きましょうか」

## 第九話 兄弟対決!?! VS 遊矢② 奇術師と道化の激突

LDS本部コントロールルーム。ここは、いずれ来るであろう融合次元の侵略のために零児が作戦指令室として密かにLDSの地下に作った一室であり、舞網市全域で行われているデュエルの状況、召喚反応などを全て監視できるようになっている。

LDSの講師であるマルコが件の襲撃者に襲われ、行方不明になってしまったことを聞き、LDS理事長の赤馬日美香とレオ・コーポレーション社長である赤馬零児の2人は、遊勝塾から急ぎ戻り、事件の詳細を部下から聞いたために急いでここまでやってきたのだ。

そして事件の報告を全て聞き終えた彼らが、部下を交えて今後の対応を話し合っている最中、それは起こった。

「――社長、巨大な召喚反応を感知しました!」

突如上がってきたその報告に、ざわめく室内。だがそんな中でも零児は冷静に対応して部下に聞き返した。

「場所は?」

「遊勝塾です」

「なんですって!?!」

驚きの声を上げるのは、日美香。だが、それも仕方ないだろう。日美香は先ほどもまで生徒たちと共にその遊勝塾にいたのだから。そんな場所からそのような召喚反応が出てくるなど驚くなどという方が無理というものだろう。

「落ち着いてください、母上。それで?その召喚方法と使用者は特定できるか?」

「はい。召喚方法はペンデュラム召喚。そしてその使用者は

――『クオン・遊灯』となっております」

その部下の報告に、零児は今度こそ驚きで目を瞪るのであった。

☆

☆

☆☆☆☆☆☆

クオン

LP：4000

手札2枚

場：ブラック・マジシャン（攻撃力2500）

魔装邪龍イーサルウエポン（攻撃力2300）

☆☆☆☆☆☆

ペンデュラム召喚。

本来その創始者である遊矢と赤馬零児以外に使用することができないはずのその召喚方法をクオンが使用したことにより、場内は騒然とするが、それを成し遂げた当の本人であるクオンはそんな彼らの様子に何をいうこともせず、ペンデュラム召喚で呼び出した自身のモンスターを見て満足げな笑みを浮かべる。

「ふむ。ぶつつけ本番でやってみました。案外上手くいくものです」  
そんなどこか暢気なクオンの言葉に、いち早く我に返ったものがない。遊矢だ。

目の前で自分と零児しか使えないはずであったペンデュラム召喚を、なぜか義兄が使って見せたことへの驚愕でしばし呆然としていた遊矢であったが、我に返るといったいどういうことだとクオンに詰め寄った。

「ま、待ってくれよ兄さん!?!な、なんで兄さんがペンデュラム召喚を使えるんだ?あれが使えるのは俺と赤馬零児しかいないはず」

遊矢のその言葉に、クオンはいつもと違い必死な様子の子の様子に、少し驚きながらもいつもの飄々とした笑みは崩さずに答える。

「え、ああ。そういえばそうでしたね。といっても私もこのカードを手に入れたのはここに帰ってきてからのことなんですけどね」

そういつてクオンは話す。自身がこのペンデュラムカードたちを手に入れた時の出来事を。

「実は私がここに来たのはLDSの面々と遊矢たちのデュエルが始まる前のことでした。せっかくですから皆がどのくらい強くなっているかどうか別室で見させてもらっていたのですよ」

そして遊矢とLDSエクシーズコース主席の志島北斗とのデュエルの最中。遊矢がペンデュラム召喚を行った時に、その現象は起こったのだという。

「その遊矢のペンデュラム召喚に呼応するように突然私のデッキが光りだしましてね。何かとデッキを確認してみたら、私のデッキに入っているカードの何枚かがペンデュラムカードとなっていたわけです」

「そんなことが……」

どこか信じられないとでもいうように呆然としている遊矢の姿に、クオンは遊矢にばれないようにそつとため息をつく。

「まあ、遊矢の反応も仕方ありませんか。私も驚きましたしね。まさかあのようなことが起こるとは——尤も心当たりがないわけでもありませんが」

クオンがその視線を自身の首元へと落とすと、そこにはクオンが遊矢と同じく遊勝から譲り受けたペンデュラム型のペンダントがぶら下げてあった。

「あの時ペンデュラムカードと化したのは全て今ペンデュラムスケールにセットしている竜穴、竜脈の魔術師を始めとした遊勝さんから譲り受けたカード。それは遊矢の時読みと星読みの魔術師も同じだったはず。おそらく私たちがペンデュラムカードを手に入れたのは遊勝さんの意志が関係しているのでしょうか……いったいあの人は何を考えているのですかねえ」

クオンは今どこにいるかわからない義父に想いを馳せるが、しかし今はデュエルの真っ最中。ぼうつとしたままいるわけにはいかなないと頭を振ってその考えを追い出すと話を続ける

「まあ、今のところそれは別にいいでしょう。デュエルを続けます。

——私はペンデュラム召喚に成功した魔装邪竜イーサルウエポンの効果を発動します。このカードはペンデュラム召喚に成功した

時フィールド上のモンスター1体を対象に発動できる。対象にしたモンスターを除外する！」

「なッ!？」

「私はEMウィップ・バイパーを選択。行けイーサルウエポン!!」

クオンがそう宣言すると、イーサルウエポンの口から黒い球体が吐き出され、ウィップ・バイパーへと迫る。

遊矢はその効果に一瞬驚愕の表情を見せるが、しかし次の瞬間には歯噛みしながらもせめてもとウィップ・ヴァイパーの効果を発動させる。

「くッ!?なら俺はウィップ・ヴァイパーの効果を発動させる!このカードの効果により俺はイーサルウエポンの攻撃力と守備力を反転させる」

☆☆☆☆☆☆

魔装邪竜イーサルウエポン

攻撃力2300↓攻撃力1600

☆☆☆☆☆☆

イーサルウエポンの攻撃力を減少させたことを見て、クオンは僅かに感心したような表情を見せる。

「なるほど、せめてダメージを減らしにきましたか」

だが、それでもイーサルウエポンの効果を防ぐことはできず、遊矢のウィップ・バイパーはそのままイーサルウエポンの放った小型のブラックホールに吸い込まれ、フィールド上から除外されてしまう。

「くッ!？」

「それではバトルと行きましょう」

そういうと、クオンはイーサルウエポンの頭の上に飛び乗ると、イーサルウエポンはそのまま首の力を使いクオンをそのまま跳ね飛ばす。

そしてクオンはその反動を使い、フィールド上にある様々な障害物を足場に軽やかに移動していく。

その体捌きに、デュエルを見守っていた子供たち三人組から感嘆の声を上げる。

「うわー!!」

「すごい……」

「しびれる〜♪」

その声援が聞こえてきたのか、クオンは笑みをさらに深めながら通りすがりにアクションカードを手にとると、くるくるとアクロバットな動きをしながらその場に着地する。

そしてクオンは自分が手にしたアクションカードを確認すると、自身の僕に攻撃の命を下す。

「それでは行きます。私はブラック・マジシャンでフレン・ドンキーに攻撃。黒・魔・導!!」

ブラック・マジシャンが魔力の波導をフレン・ドンキーに放つ。

遊矢はその攻撃をともに受けるわけにはいかないと、咄嗟にその場を走り出しぎりぎりのところで1枚のアクションカードを手に入れるとそのまま発動する。

「させるか！俺はアクションマジック「回避」を発動。このカードの効果でブラック・マジシャンの攻撃を無効にする!!」

☆☆☆☆☆☆

回避

アクションマジック

相手モンスター1体の攻撃を無効にする。

☆☆☆☆☆☆

するとフレン・ドンキーの周りを緑色の膜が広がり。ブラック・マジシャンの攻撃を弾き飛ばす。

その光景を見て遊矢のことを密かに応援していた柚子は喜びの声を上げる。

「やったーこれでこのターンは遊矢のライフも……」

だが彼女の言葉はそこで止まってしまう。クオンがさらなるマ

ジツクカードを発動したからだ。

「ならば私もアクションマジック「ワンダーチャンス」を発動。このカードの効果により、このターン私のブラック・マジシャンはもう一度攻撃することができます」

「なんだとッ!？」

☆☆☆☆☆☆

ワンダーチャンス

アクションマジック

自分モンスター1体を選択する。そのモンスターはもう一度攻撃できる。

☆☆☆☆☆☆

「ブラック・マジシャンでフレン・ドンキーを再び攻撃します。

『セカンド!マジック』!!」

クオンの宣言と共に、ブラック・マジシャンが再び魔力の波動をフレン・ドンキーに放つと、フレン・ドンキーは今度こそその場で消滅する。

「ぐあッ!？」

☆☆☆☆☆☆

遊矢

LP：4000↓3100

☆☆☆☆☆☆

フレン・ドンキーが破壊された衝撃で思わず呻き声を上げる遊矢。だが、そんな遊矢に構わず久遠の攻撃は続く。

「続いて私は魔装邪竜イーサルウエポンで攻撃。『イービル・フレア』!!」

イーサルウエポンのブレスの攻撃が遊矢へと迫るが、そこで遊矢は1枚の罠カードを発動する。

「俺はこの瞬間、罨カード「E M コール」<sup>エンタメイト</sup>を発動する!!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
E M コール<sup>エンタメイト</sup>

通常罨

(1)：相手モンスターの直接攻撃宣言時に、その攻撃モンスター1体を対象として発動できる。

その攻撃を無効にし、守備力の合計が対象のモンスターの攻撃力以下となるように、

デッキから「E M」モンスターを2体まで手札に加える。

このカードの発動後、次の自分ターンの終了時まで

自分はエクストラデッキからモンスターを特殊召喚できない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

「このカードは相手モンスターの直接攻撃宣言時発動できる。その攻撃を無効にし、俺は守備力の合計が攻撃してきたモンスター以下のE Mモンスターを2枚まで手札に加えることができる。俺は「E Mソード・フィッシュ」<sup>エンタメイト</sup>と「E Mスパイク・イーグル」<sup>エンタメイト</sup>の2枚を手札に加える!!」

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
E Mソード・フィッシュ<sup>エンタメイト</sup>

効果モンスター

星2 / 水属性 / 魚族 / 攻 600 / 守 600

(1)：このカードが召喚・特殊召喚に成功した場合に発動する。

相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力・守備力は600ダウンする。

(2)：このカードがモンスターゾーンに存在し、

自分がモンスターの特殊召喚に成功した場合に発動する。

相手フィールドの全てのモンスターの攻撃力・守備力は600ダウンする。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆  
☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

エンタメイト  
E Mスパイク・イーグル

効果モンスター

星2 / 風属性 / 鳥獣族 / 攻 900 / 守 900

(1)：1ターンに1度、自分フィールドの表側表示モンスター1体を対象として発動できる。

このターン、そのモンスターが守備表示モンスターを攻撃した場合、

その守備力を攻撃力が超えた分だけ相手に戦闘ダメージを与える。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

自身のモンスターの攻撃を利用して手札を増やした遊矢を見て、クオンは思わず感嘆の声を上げる。

「ほう、なるほど。一気に手札を増やすとはなかなかですね」

そうクオンはどこか楽しげに言葉を紡ぐと、自身のデュエルディスクに残りの手札を全てセットした。

「私はこれでターンエンド。——さて、あなたのターンですよ遊矢?」

そうしてクオンは不敵に嗤った。

## 第十話 兄弟対決!? VS 遊矢③ 榊遊勝

☆☆☆☆☆  
クオン

LP：4000

場：ブラック・マジシャン（攻撃力2500）

魔法邪龍イーサルウエポン（攻撃力2300）

魔法・罨：伏せカード2枚

☆☆☆☆☆

突如クオンの強い要望により始まったクオンと遊矢の兄弟対決。クオンが2枚の伏せカードをデュエルディスクをセットしてターンの終了を宣言したために、ターンは遊矢へと移行する。

「俺のターン、ドロー!!」

☆☆☆☆☆

遊矢

LP：3100

手札：5枚

☆☆☆☆☆

ドローしたカードを確認した遊矢は、思わず驚きで目を瞠る。

遊矢がたった今ドローしたカード。それはこの絶体絶命な状況を覆すことができ得る、自身が最も信頼しているカードだったからだ。「よし！こいつペンデュラム召喚することができれば一気に逆転できさる!!」

そう考えた遊矢は、さっそく手札の時読みの魔術師と星読みの魔術師。2枚のペンデュラムカードを使いさっそくペンデュラム召喚を試みようと考えるが、そこで彼の脳裏に再び赤馬零児のペンデュラム召喚の姿がよぎり、ペンデュラムカードに掴もうとした手がそこで止まってしまう。

「…あ……う……ッ!？」

このカードを出さなければこのデュエルは負けてしまう。しかし、いつの間にかペンデュラム召喚が軽いトラウマになってしまった遊矢はその指をどうしても動かすことができなかった。

それを見たクオンは「やはり……」というような感じで飄々とした笑みを消し、その表情を厳しい物に変える。

「赤馬零児がペンデュラム召喚を使って見せたことが大分シヨックだったようですね。これは比べられるのが怖いというより、自身が生み出して『自分だけが使えるペンデュラム召喚』が一種の存在意義アイデンティティとなっていて、赤馬零児がそのペンデュラム召喚を使ったことによりそれが崩されてしまった。それが一種のトラウマとなってしまうているんでしよう」

とそこでクオンはため息をつきながらもくすりと笑みを浮かべる。

「(しかたありませんねえ。こういうのが得意なのは塾長の方で、私のガラじゃないんですがね)」

そう考えたクオンは、顔を上げ遊矢の再び向き直るとその口元にいつもの笑みを浮かべながらも口を開く。

「遊矢」

「な、なんだよ」

突如先ほどからの不敵な笑みから一転、優しげな口調で突然話しかけてきたクオンの姿に、戸惑いながらもなんとかそう返す遊矢。そんな彼の姿に苦笑しながらもクオンは話を続ける。

「いや、なに。こうして2人でデュエルをしていると昔のことを思い出しましてね。ほら、子供の頃なんて遊勝さんと一緒にエンタメデュエルをこうして教わっていたでしょう」

「そういえば……」

クオンの言葉に遊矢はそういえばと昔のことを思い出す。

かつて遊勝がまだ失踪する前は、彼の背中に憧れ、2人してこうして毎日デュエルの腕を鍛える毎日を送っていたことを。

「実はですね。あの頃に私は遊勝さんがデビューした頃の試合の映像を自身の参考にしようとして見てみたことがあるんですよ」

「ッ!?父さんがデビューしたてっていうと……」

「ええ。ちょうどエンタメデュエルを人前に披露し始めた時ですね」

そしてクオンがその映像で見たのは、華麗なデュエルで人々から喝采を浴びるいつもの遊勝の姿ではなく、罵倒と嘲笑を浴びるまさかの姿だったという。

「あの映像を見た後に塾長に聞いてみたのですが、当時の環境ではスリルとスピードを持ちこんだ曲芸染みた動きの遊勝さんのエンタメデュエルは世間では受け入れられず、多くの批判を浴びたそうです」

しかし、榊遊勝は世間のそのような評価にもめげず、自身のデュエルスタイルを貫いたことで、やがて罵声は熱狂へと代わり、彼はアクションデュエル界に燦然と輝く本物のスターとなったのだ。

「新しい世界の扉は、誰かが勇気を出してこじ開けないと開かれることは決してありません。そして遊矢、あなたもペンデュラムの扉を新たに開きました。しかし……」

そこでクオンはゆっくりと自身の背後で光の柱に包まれている2体の魔術師へと視線を向け、一瞬目を瞑ると再び遊矢へと視線を合わせながら口を開く。普段の彼の態度からは想像もできないほど厳しい顔をしながら。

「——最早ペンデュラムはあなただけの物ではなくなりました」

そう、特殊な手段でペンデュラムカードを手に入れたクオンはともかく、世界的大企業の社長である赤馬零児が自身でペンデュラムカードを作り上げ手に入れたとなると、もはやいずれ誰もがペンデュラムカードを手に入れることができるようになるのは時間の問題だといえる。

「遊矢。あなたは赤馬零児や私がペンデュラム召喚を使った時どう思いましたか?ペンデュラム召喚を使わなかった、いや使えなかったところを見るにとてもショックだったのでしょうか。——しかし、遊勝さんならそのようなことはなかったでしょうね。むしろ笑顔を見せたでしょう」

「え、笑顔を!?!」

「ええ。実際塾長から聞きましたが、自身の影響でエンタメデュエル

が広まっても、彼は笑みを浮かべながら、自身も腕を磨き続けたそうです。周囲もあの人に習って切磋琢磨し、それが今のアクションデュエル界の隆盛を築いたとも」

そこで遊矢は赤馬零児が去り際に残した言葉を思い出す。アクションデュエルに新しい可能性をもたらしたパイオニアとして心から尊敬しているという言葉。

「……あいつも、赤馬零児もそうだった」

「遊矢。あなたもペンデュラムという扉を最初に開いた者として腕を磨きなさい。後に続く者たちの模範となれるように」

「遊勝さんと同じようにね」と言葉を締めくくるクオン。そんな彼の言葉に、しかし遊矢はどこか自信なさげに答える。

「でも……俺にそんなこと……」

「できますよ。あなたはあの稀代のデュエルスター。榊遊勝の息子であり——私の自慢の義弟ですから」

「ッ!?兄さん……」

久遠のその言葉に遊矢は感動で思わず瞳を僅かに潤ませる。

そんな彼の姿を見て、クオンは自分でもクサイ台詞をいった自覚があったのか、どこか照れ臭そうに頬を掻きながらも話を続ける。

「怖がって縮こまっていたらなにもできない。勝ちたいならば勇気を持って前に出る」

「それは」

「覚えているでしょう?父さんが私たちに聞かせている言葉。——

—さあ、勇気を出しなさい遊矢。そしてあなたのエンターテイメントを見せてみるのです!!」

クオンのその珍しく力強いその言葉に、遊矢は涙をこしこしと拭い去るといつもの明るい笑みを浮かべると両手を広げて高らかに宣言する。——自身が持ちうる最高のエンターテイメントを魅せるために。

「レディースアードジェントルメン!!これより本家本元。榊遊矢のエンタメデュエルをご覧くださいます!!」

その言葉と共に、なぜか遊矢へとスポットライトが当たる。それと

同時に遊矢はフィールドを歩き来する光の輪を度々掴みながら、フィールドを縦横無尽に移動すると、1枚のアクションカードを手に入れる。

そしてそのアクションカードの中身を確認した遊矢は、小さく笑みを浮かべた。

「よっしー完璧♪」

そして遊矢は再び観客席に向かって、大きく両手を広げた。

「さあさあお待ちかね。本日のメインイベントでございます！」

「……やれやれ。ようやくですか」

もうすっかり先ほどとは違い、すっかり元どおりとなっている遊矢の姿に、クオンは呆れながらもどこか嬉しそうに笑みを浮かべる。

そんなクオンの様子にを知ってか知らずか。遊矢はまず1枚のモンスターカードを召喚する。

「まず私は、EMソード・フィッシュを召喚します」

すると、遊矢のフィールド上に、サングラスをかけた、所謂太刀魚のようなモンスターが出現する。

☆☆☆☆

EMソード・フィッシュ（攻撃力600）

☆☆☆☆

「ここで私はEMソード・フィッシュの効果を発動！このカードが召喚・特殊召喚に成功した時相手フィールド上のモンスター全ての攻撃力を600ポイントダウンさせることができます！」

その効果により、クオンのフィールド上に存在するブラック・マジシャンとイーサルウェポンを青いオーラが包み込み、2体の攻撃力を下げること。

☆☆☆☆

ブラック・マジシャン（攻撃力2500↓1900）

魔装邪竜イーサルウェポン（攻撃力2300↓1700）

☆☆☆☆☆☆

そして、遊矢は手札から2枚のカードを引き抜き、久遠へ向かって掲げて見せる。——クオンがいったように、自身が新しい扉を開いたことよって手に入れた始まりのカードを。

「俺は、スケール1の星読みの魔術師とスケール8の時読みの魔術師で、ペンデュラムスケールをセッティング!!」

すると、遊矢のデュエルディスクにペンデュラムの文字が光り輝き、その背後に先ほどのクオンと同じく、2体の魔術師を内包した光の柱が出現した。

「これでレベル2から7のモンスターが同時に召喚可能!」

そして彼は高らかに謳う。トラウマを乗り越え、自身の愛する仲間たちを呼びだすために。

「揺れる、魂のペンデュラム。天空に描け光のアーク。——ペンデュラム召喚。来い、俺のモンスターたち!!」

そしてその遊矢の宣言と共に、彼の上空に出現した光の渦から、フィールド上にさらに2体のモンスターが現れる。

「世にも珍しい二色の眼を持つ竜「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン」!EMスパイクイーグル!」

☆☆☆☆☆☆

オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン

ペンデュラム・効果モンスター

星7/闇属性/ドラゴン族/攻2500/守2000

【Pスケール：青4/赤4】

「オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴン」の(1)(2)のP効果はそれぞれ1ターンに1度しか使用できない。

(1)：自分のPモンスターの戦闘で発生する自分への戦闘ダメージを0にできる。

(2)：自分エンドフェイズに発動できる。

このカードを破壊し、デッキから攻撃力1500以下のPモンス

ター1体を手札に加える。

【モンスター効果】

(1)：このカードが相手モンスターと戦闘を行う場合、

このカードが相手に与える戦闘ダメージは倍になる

☆☆☆☆☆☆

そして出現したのは遊矢のエースモンスターである虹彩異色の眼を持つ竜。オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンに、先ほどソード・フィッシュと共にEMコールで手札に加えたモンスターであるスパイクイーグル。

そして、遊矢はさらなる攻めの一手を打つ。

「俺はこの瞬間。EMソード・フィッシュの第二のモンスター効果を発動！このカードがフィールド上に存在し、自分がモンスターの特殊召喚に成功した時、さらに相手フィールド上のモンスター全ての攻撃力を600ポイント減少させる!!」

☆☆☆☆☆☆

ブラック・マジシャン（攻撃力1900↓1300）

魔装邪竜イーサルウェポン（攻撃力1700↓1100）

☆☆☆☆☆☆

自身のモンスターがさらに攻撃力を減らす姿に、クオンは驚愕と共に感心の声を上げる。

「ッ!?なるほど、ソード・フィッシュだけ通常召喚するとは奇妙な事をするとは思いましたが、2度の私のモンスターたちの弱体化を狙うことが目的でしたか。なかなかやりますね」

クオンのその素直な賞賛に、遊矢はどこか照れ臭そうに鼻を掻きながら笑みを深める。

「へへへ。——さらに私はここでオッドアイズを選択し、アクションマジック「イリュージョン・ファイヤー」を発動!!」

☆☆☆☆☆☆

イリユージョン・ファイヤー

アクションマジック

①：自分フィールドのモンスター1体を対象として発動できる。

このターン、そのモンスター以外の自分フィールドのモンスターは攻撃できず、

その対象のモンスターはそれ以外の自分フィールドのモンスターの数だけ攻撃できる。

☆☆☆☆☆☆

遊矢がそのカードの効果を発動すると、遊矢とオッドアイズの前方にソード・フィッシュとスパイク・イーグルの2体のEMが終結した。「このカードの効果により、選択されなかった他のモンスターはこのターン攻撃することはできないが、その代わりにこのターンオッドアイズは選択されなかったモンスターの数だけ攻撃することができる!!」その驚愕の効果に、観客席にいた子供たちは驚きの声を上げる。

「わあ〜!」

「オッドアイズの連続攻撃だって!?!」

「しびれる〜♪」

そして遊矢はオッドアイズに飛び乗ると、相手モンスターへの攻撃を指示する。

「行くぞ、バトルだ!俺はオッドアイズで魔装邪竜イーサルウェポンに攻撃。『螺旋のストライクバースト』!!」

その遊矢の言葉と共に、オッドアイズの口から螺旋状のブレス攻撃が吐き出され、イーサルウェポンがそのまま破壊される。

「くううッ!?!」

☆☆☆☆☆☆

クオン

LP：4000→2600

☆☆☆☆☆☆

イーサルウエポンの破壊による衝撃に呻き声を上げるクオン。  
しかし遊矢はそんなクオンの様子にも追撃の手を緩ませない。

「この瞬間。オッドアイズ・ペンデュラム・ドラゴンのモンスター効果  
発動！このカードが相手モンスターと戦闘を行う場合、相手に与える  
戦闘ダメージは2倍となる!!」

そのオッドアイズの効果により、クオンへさらに1400ポイント  
のライフダメージが入る。

「く……ッー!」

☆☆☆☆☆☆

クオン

LP：2600↓1200

☆☆☆☆☆☆

「これで最後。ブラック・マジシャンを攻撃!!」

遊矢のその言葉と共に、オッドアイズが再びブラック・マジシャン  
へとブレスの波導を放った。

それを見て、観客席でデュエルの様子を見守っていた権現坂と柚子  
の2人が歓声を上げる。

「おお!!」

「やったわ。これでちょうど1200ポイントのダメージが入って遊  
矢の勝ちよ!!」

だが、クオンは仮にもプロの資格を持つデュエリスト。絶体絶命の  
ピンチにも関わらず、不敵な笑みを浮かべながらも1枚のリバース  
カードを発動させる。

「さすがにその攻撃を受けるわけにはいきませんねえ。———私は  
この瞬間罠カード「魔法の筒」マジック・シリンドラーを発動!!」

☆☆☆☆☆☆

魔法の筒マジック・シリンドラー

## 通常罾

(1)：相手モンスター1体の攻撃宣言時、

攻撃モンスター1体を対象として発動できる。

その攻撃モンスターの攻撃を無効にし、

そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える。

☆☆☆☆☆☆

クオンが発動した1枚の罾カード。そのカードの発動と共に2つの筒のような物がブラック・マジシャンの周囲に出現し、オッドアイズの攻撃が片方の筒へと吸い込まれる。

「これは高位のマジシャンが創り上げたという魔術道具でしてね。相手モンスター1体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与えることができます。——自身のモンスターの攻撃を食らいなさい!!」

それはまさに逆転の一手。この魔法の筒の効果が通れば遊矢のライフポイントは600まで削られ、次のターンクオンが再びイーサルウエポンをペンデュラム召喚し、遊矢のフィールド上にいるモンスターを攻撃すれば、そこでクオンの勝利が確定する。

——そう、この罾カードの効果が通ればの話だが。

「それはどうかな?」

「なに……?」

不敵な笑みを浮かべる遊矢の言葉に思わず眉を潜めるクオン。

そして遊矢は、自らのペンデュラムゾーンにいる時読みの魔術師のペンデュラム効果を発動した。

「俺はペンデュラムスケールにいる時読みの魔術師のペンデュラム効果を発動!このカードのペンデュラム効果により、相手はダメージステップ終了時まで罾カードを発動できない!!」

「なんだとツ!?」

「いつけええええええええええ!!」

そして魔法の筒の妨害を退けたことにより、オッドアイズの必殺の攻撃が、心なしか先ほどより威力を増しながらも、クオンのブラック・マジシャンへと襲いかかる。

クオンはまさかの展開に驚きの表情を浮かべていたが、先ほどとは全く違う遊矢のその生き生きとした表情を見て、ふつとその表情を静かに緩めた。

「……まあ、たまにはこんな展開もいいでしょう」

そして、クオンはそのまま笑みを浮かべたままオッドアイズの攻撃の直撃を食らい、吹き飛ばされてしまう。

「く、ああああああああああ!!?!」

☆☆☆☆☆☆

クオン

LP：1200↓0

☆☆☆☆☆☆

そしてクオンのライフポイントが0になると同時に、遊矢は自身のモンスターたちと少し大げさな感じで一礼してデュエルを締めくくる。

——こうして、兄弟同士のエンタメデュエルは弟・遊矢の勝利にて幕を下ろすのであった。

☆☆

☆☆

アクションフィールドが消えたために、夕焼けの光がデュエル場へと降り注ぐ中、オッドアイズの攻撃により吹き飛ばされたクオンの元へと遊矢は急いで駆け寄る。

「兄さん!!大丈夫?」

「いててて。ええ、まあなんとか。しかしまあ遠慮なく吹き飛ばしてくれましたね遊矢」

吹き飛ばされた時に軽く頭でもぶつけたのか、そこを抑えながら少し苦痛の声をあげながらも、どこかからかうような口調でクオンが話しかけると、遊矢はどこか気まずげな顔をして途端におろおろとします。

「え、あ、ご、ごめん……」

そんな彼の態度にクオンはぷつと吹き出しながらも、彼の頭をわしやわしやと撫でまわした。

「あ、ちよちよつと兄さん？」

「ふふふ、すいません遊矢。ちよつとした冗談ですよ。少しからかっただけです」

そういうと、彼はその場から立ち上がりデュエル場から出ていこうと踵を返す。

「あれ？兄さんどこ行くんだ？」

「いや、流石に帰国直後でデュエル2連戦はさすがに疲れました。ちよつと休ませてもらいますよ」

遊矢の言葉にクオンが僅かに振り向きながらそう返すと、遊矢は「あ、そっか」と納得の表情を見せた。

「そういうえば、兄さん帰って来たばつかだったな。わかった、塾長たちには俺からいつておくよ」

「ええ。そうしてくれると助かります」

そういつて、今度こそクオンはデュエル場を出ていこうとするが、そこで遊矢が再び声を上げ、彼のことを引き止めた。

「あ、あの兄さん!!」

「ん？どうしました遊矢？」

弟の言葉に不思議そうに振り返るクオン。そんなクオンの様子に遊矢は「あ、え」と言葉に詰まりながらも、しかし頬を赤くしながらなんとか照れ臭そうに言葉を紡ぐ。

「あ、ありがとう兄さん。デュエルまでして俺のことを励ましてくれて。俺、誰よりも腕を磨くよ。もっと上手く、そしてもっと強くなっ

て父さんや兄さんのような凄いデュエリストになって、世界中の人を笑顔にして見せるから!!」

遊矢の言葉に、驚きで思わず目を瞠るクオン。まさか気弱なところがある遊矢からそのような言葉を耳にするとは、彼も思っていなかったからだ。

しかし少しして我に返ると、クオンは彼の言葉の笑みを理解し、家族だけに見せる慈愛の籠もった笑みを見せる。

そしてクオンはそのままデュエル場を後にしたのだが、デュエル場から出て少したった通路で立ち止まると、先ほどのデュエルで最後まで使うことのなかったリバースカードをデュエルディスクから引き抜いた。

「ふー。父さんや兄さんのような凄いエンタメデュエリストになって、世界中の人を笑顔にして見せる」ですか。……ふふ。あの様子では、どうやら私のやったことは無用の気遣いでしたかね」

そして彼はデュエルディスクから引き抜いたカードへと視線を落とす。

そのカードの名は「サイクロン」。相手フィールド上の魔法・罠カードを問答無用で1枚破壊することができる強力な速効魔法。

☆☆☆☆☆☆

サイクロン

速攻魔法

(1)：フィールドの魔法・罠カード1枚を対象として発動できる。そのカードを破壊する。

☆☆☆☆☆☆

そう、実は先ほどのデュエル。本来なら、時読みの魔術師の効果にチェーンしてこのカードを発動。そして時読みの魔術師を破壊していれば時読みの魔術師のペンデュラム効果は無効になりオッドアイ

ズの攻撃を無効にし、そして返しのターン。クオンがモンスターをペンデュラム召喚して攻撃していれば勝利、または優位な戦況を保っていたのはクオンの方だったのだが、しかし遊矢の成長した姿を見て嬉しくなったクオンは、このまま敗北すれば遊矢がまた自信を喪失してしまう可能性があったというところもあり、このカードの発動を見送り、そのまま遊矢へと勝ちを譲ったのだ。

しかし、先ほどの遊矢の言葉を思い返し、クオンは考える。別にそのようなことをしなくても、遊矢は潰れることなく再びエンタメデュエリストとして無事に復活していただろうと。

そのことが無性に嬉しくなったクオンは、再び笑みを浮かべると、今はどこにいるかもわからない自身の義父へと言葉を紡ぐ。

「遊勝さん、遊矢は立派に成長していますよ……ふふ、なんてね」

自身の言葉にクオンは悪戯っぽく笑い声を上げると、再び歩みを進める。

「さて、せっかく帰って来たんです。久しぶりに洋子さんお手製のパンケーキでもいただきとしますかね」

そしてクオンはどこかご機嫌な様子で、鼻歌を歌いながら久しぶりの我が家へと急ぐのであった。

## お気に入り300人突破記念嘘CM「ストラクチャー デツキークオン編」

満員の観客が入った巨大なスタジアム。そこではデュエルをしている2人のデュエリストの姿が。

そしてその内の1人。まるでマジシャンのような衣装を身に纏ったデュエリストの姿がアップで映し出される。

ナレーション「伝説の魔術師たちが、新たな力を携え、再びデュエルの表舞台へとその姿を現す」

その言葉と共に、そのデュエリストが竜穴の魔術師と竜脈の魔術師2体の魔術師カードをペンデュラムスケールにセットすると、そのデュエリストのデュエルディスクに「PEN<sup>ペン</sup>DULUM<sup>デュラム</sup>」の文字が浮かび上がり、そのデュエリストの背後に2つの光の柱が出現した。

そしてそのデュエリストが両手を天に掲げると、上空に光の穴が出現し、そこから光となって2体のブラック・マジシャン（パンドラ版）がフィールド上に現れる。

そしてその姿を見たそのデュエリストが不敵な笑みを浮かべると、ペンデュラム召喚によって現れたブラック・マジシャンたちが上空へと勢いよく飛び立つと、いつの間にか出現していた光の渦の中へと飛び込んだ。

そしてブラック・マジシャンたちが渦の中へ飛び込んだかと思うと、その渦が勢いよく発光し、画面いっぱい光が包み込む。

クオン「伝説の中に生きる黒の魔術師よ。今こそ仲間の力をその手に、その真なる姿を顕現させよ。我が手に勝利を!!」

——エクシーズ召喚。出でよ、ランク7「幻想の黒魔導師」!!」  
そしてクオンの台詞が終わると共に、画面いっぱい広がっていた光が晴れて、スタジアム全体に降り注ぐ光の雨と共に、フィールド

上に不敵な笑みをその口元に携えながら幻想の黒魔導師がそのデュエル場へと降り立った。

クオン「IT, S SHOW TIME!!——活目せよ、今宵あなたは真の魔導の極致を目撃することとなる」

そして、その言葉とともに幻想の黒魔導師が杖を画面の方に向けて、そこから魔力の波動が放たれて紫色の光が画面を見えなくし、それが晴れると幻想の黒魔導師の姿をバックにストラクチャーデッキの姿が値段とともに画面に表示させる。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆ ☆

ストラクチャーデッキ—クオン編—

■値段：1000円（税抜き）

■パッケージ絵『幻想の黒魔導師（隅の方にクオンのイラストが描かれている）』

■商品内容

・構築済みデッキ43枚（メインデッキ40枚、エクストラデッキ3枚）

・プレイイングガイド一枚

・公式ルールブック一冊

・デュエルフィールド一枚（クオンの姿を中心にして、周りにブラック・マジシャン、幻影の黒魔導師、竜穴の魔術師、竜脈の魔術師の姿が描かれている）

■デッキ内容

・エクストラデッキ×3

幻想の黒魔導師×1 UR—Parallel

マジマジ☆マジシャンギャル×1 SR—Parallel

風紀宮司ノリト×1

・メインデツキ×40

ブラック・マジシャン（パンドラ版）×1 SR | Parallel

1

ブラック・マジシヤンガール×1

黒の魔法神官×1

イリユージョン・スナッチ×1

竜穴の魔術師×1 N | Parallel

魔装邪龍イーサルウエポン×1

熟練の黒魔術師×2

魔導召喚士テンペル×2

魔導書士バテル×1 N | Parallel

見習い魔術師×2

慧眼の魔術師×1 SR | Parallel

竜脈の魔術師×1 N | Parallel

サモンプリースト×1

ヂエミナイ・エルフ×1

黒・魔・導×1

千本ナイフ×1

デイメンション・マジック×1

拡散する波動×1

魔導師の力×1

グリモの魔導書×2

トーラの魔導書×1

ヒュグロの魔導書×1

マジシヤンズ・クロス×1

死者蘇生×1

ナナナ×1 N | Parallel

召喚師のスキル×1

ユニオン・アタック×1

禁じられた聖杯×1

六芒星の呪縛×1

マジカルシルクハット×1

マジシャンズ・サークル×1

魔法の筒×1

永遠の魂×1 N | P a r a l l e l

シエイプシスター×1

攻撃の無力化×1

次元幽閉×1

☆☆☆☆☆

ナレーション「ストラクチャーデッキ―クオン編―。好評発売中」

久遠「――さあ、マジックショーの始まりです」

## 遊戯王ARC―Vifく怒りに目覚めた希望く

遊戯王デュエルモンスターズのアニメシリーズに「遊戯王ゼアル」というシリーズがあるのを皆様はご存知だろうか。

それはシンクロ召喚をテーマにしたシリーズである遊戯王ファイブディーズの次のシリーズとして放送されたアニメであり、このシリーズは新しく生まれた召喚方法、「エクシーズ召喚」を題材として放送されていた。

話の内容としてはハートランドシティという街に住むごく普通のデュエル好きの少年が、謎の凄腕デュエリストの幽霊?「アストラル」と共に、様々な困難や苦難に巻き込まれ、多くの強敵とアストラルと共に戦いぬき、デュエリストとして徐々に成長していくというもので、ファイブディーズから再び遊戯王のアニメを見始めた俺としては、このアニメの主人公のメンタルのあまりの強さに、若干引いたことを覚えている。

……まあ、そんなわけでなぜ突然このような話をしているのかというと、もちろんちゃんとした理由があったりする。

実は俺どうやらなってしまうたようなのだ。……え?なににかつて?

あれだよ。俺がさつきいった、その凄まじいメンタルの強さのせいで引かれたり冗談交じりで「先生」なんて呼ばれている遊戯王ゼアルの主人公。

——つくもゆうま九十九遊馬その人に。

………どうしてこうなった?

☆☆

俺がその事実気づいたのは、両親から五歳の誕生日のプレゼントとしてデュエルモンスターズのデッキ（OCGという初心者用のスタートターデッキのようなもの）を貰った時のこと。突如凄まじい頭痛がしたかと思えば全て思いだしたのだ。

前世では地元の三流大学に通っていたこと。よく友達と遊戯王のOCGで遊んでいたこと。もうそろそろ大学を卒業しなくてはいけない時期に来ていたので就職活動に励んでいたこと。百を超える数の会社を回ったことで、なんとか地元のそれなりの企業に無事に内定が決まったこと。内定が決まったことを聞いたその次の日に、大型のトラックに轢かれてしまい、そのまま死んでしまったということ。いつの間にか違う人間として生まれ変わっていたこと。……そして今自分が生きている世界が、生前自分が見ていたアニメ「遊戯王ゼアル」の世界と酷似しており、自身がそのアニメの主人公と同姓同名。そして姿までそっくりだということに。

このことに気づいた俺は、初めは驚愕し、そして絶望した。

なぜかって？そりゃあ、この九十九遊馬という人物。歴代のアニメ遊戯王の主人公たちの例に漏れず、争い方がデュエルという一見平和的な物にも関わらず、平気で命を失いかねないほどの危機に陥ってしまうからだ。

しかも、中には身内が大変な目にあったり、下手したら世界が滅亡しかねない危機に陥る場合もあり、積極的にその危機を回避しようという真似ができないという、ほぼ詰んでいる状態。

物語の主人公にあこがれている厨二病紛いの人間ならともかく、平和に過ごしたいごく普通の人間がそんな存在に生まれ変わったと知った時、絶望しない方がどうかしている。そして俺はオタクであるが、厨二病の人間でもなんでもないため、これからの未来を思い絶望していたというわけである。

だからこそ、親や姉に心配されたり不振に思われないようにするために、俺はなんとかその内心を隠しながら日々の生活を送っていたのだが、しかし生まれ変わった世界で生活を送っているうちに、次第にその絶望感も薄れていく。

それは、この俺が生まれ変わった遊戯王ゼアルの世界に酷似した世界。この世界がどうやら遊戯王ゼアルの世界に酷似しているだけで全くの別の世界であるということがわかったからだ。

まずは両親。ゼアル原作では、主人公が子供のころに消息不明になるのだが、この世界では両親は未だ健在で、原作で登場した重要スポットや人物の何人かが確認できずにいた。

それに原作で主人公と友達だった友人や幼馴染に会うことも見つけることもなく、また物語で主人公である遊馬と共に苦難を乗り越えていく相棒的存在であるアストラルがいつまでたつても現れないことから、俺はこの世界は遊戯王ゼアルに似た世界だということを確信したというわけなのだ。

だからこそ俺は安心し、この世界でできたゼアル原作とは全く関係ない友人たちと共に、デュエルの腕前を磨きながら、楽しく青春の日々を送っていた。

そう、俺が知っているゼアルの世界ではないからと、安全な世界だと安心していたのだが、それは俺の間違いだった。

俺たちがいつもの様に平穏な日々を送っているある日突然、奴らが俺たちの住む世界に侵略してきたことで、俺たちの生活の全てが終わってしまったのだ。

そう、あの憎い融合召喚の使い手たち。

———【アカデミア】の連中が。

☆ ☆

【アカデミア】。

突如現れたそのデュエリストたちは、俺たちが住む世界の住人たちにまるでハンティングゲームに興じるかのように歪んだ笑みを浮かべながらデュエルを挑み続け、カードにしていた。

そして俺の家族たちもカードにされてしまい、俺は怒りのままに俺の家族をカードにしたアカデミアのデュエリストに勝負を挑んだの

だが、俺の家族をカードにしたアカデミアのデュエリストは予想以上に強く、あつという間に絶体絶命の状況にまで追い込まれてしまう。「くははははは。俺のライフを削るとは子供にしてはやるが、所詮は子供。どうやらここまでのようだな!!」

そう高笑いを上げる男のフィールド上には古代の機械モンスターの中でも最強クラスの攻撃力を誇る「古代の機械巨竜」。

さらには「古代の機械蘇生」。アンテイク・ギアがジェルドラゴン破壊された自分の古代の機械モンスターを攻撃力を200ポイント上げて復活させる永続罫に、古代の機械モンスターが墓地から復活したときに、その復活したモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える永続罫「古代の機械閃光弾」アンテイク・ギアスパークショットの2枚が存在している。

この2枚のカードが存在するせいで、例え古代の機械巨竜を倒せるカードを引けたとしても、一撃で相手のライフを削れるようなモンスターを召喚することができなければ、この2枚のコンボで残りが100の俺のライフは一気に消し飛び俺の敗北が決まってしまう。

「(いったいどうすればツ!!)」

「おいおい、早くしてくれよー!!」

「くツ、煩いー俺のターン、ドロー!!」

アカデミアの男の挑発染みた言葉に、俺はぎりりと歯噛みしながらも、しかし確かにこのままではどのみち何もならないと、デツキからカードを勢いよくドローする。

そしてドローしたカードを確認した俺は一瞬歓喜し………そして絶望した。

俺がドローしたカードは「カゲトカゲ」。自身がレベル4モンスターの召喚に成功した時に手札から特殊召喚できるレベル4モンスター。俺が元から持っていた2枚の手札の内の1枚。「ガガガマジシャン」を召喚し、このカードを特殊召喚。それから相手モンスターの破壊以外で除去できるリンク4モンスターを特殊召喚すればこの場面を突破することができる。

だが、それは前世での話。転生した俺はこの世界で一からカードを集め始めたのだが、前世とは違いデュエルモンスターズが社会に溶け

込んでいるこの世界では、カードの単価が前世からは信じられないほど跳ね上がっており、パックからあてようにも封入率もかなり下がっている。

その結果俺が持っているエクシーズモンスターはランク4の「ズババジエネラル」ただ1枚。

このカードは手札の戦士族モンスター1体をこのカードの装備カードにすることで、自身の攻撃力をそのモンスターの攻撃力の分アップさせることができるモンスター。一応俺のデッキのエースではあるのだが、俺の最後の手札は魔法カード。ズババジエネラルの攻撃力を上げることはできない。

「(ここまでか……)」

目の前が絶望に支配され、俺は思わずその場で膝をつきそうになっ  
てしまう。——だが、その瞬間俺の視界に入る物があつた。

「(……あれは、父さんたちのカード)」

そう、俺の視界に入ったのは目の前のアカデミアのデュエリストに無慈悲にもカードにされてしまったこの世界の家族たちの姿。その姿が目に入った時、俺は思いだす。家族をカードへと変えた時のこのアカデミアの男の愉しそうな歪んだ笑みを。

その顔を思い出した俺は、体中を怒りが支配するのを感じ、その場に踏みとどまる。ここで膝をついてはいけないと、本能で感じたからだ。

「(そうだ、ここで俺は屈してはいけない。せめて、せめて目の前の男に一矢報いなければ!!)」

だが、今の現状では殆ど手が無いのも事実。だからこそ俺は力を欲した。目の前の男を打倒する力を。家族の仇を取ることのできる力を!!

——その時不思議なことが起こった。

「な、なんだ!？」

「これは!？」

俺の目の前に突如眩い光が発生したかと思えばその中から1枚のカードが現れ、俺の手元へとゆっくりと降りてくる。

俺は思わずそのカードを手にとるとそのカードがそんなカードなのかをその目で確認する。そしてそのカードの正体を理解した俺は、思わず驚愕で目を瞠る。

「(こ、これは……ッ!?)」

なぜここまで驚くのか?それはそのカードがこの世界に存在するはずのないカードだったからだ。

「(な、なぜこのカードがここに?)」

そしてその正体を知った俺は、頭に閃くものを感じ、咄嗟に最後の手札である魔法カードに視線を戻す。

そして気づいた。——この状況を逆転できる勝利の方程式が完成したことに。

「(これは……いける!!)」

そして俺はこの状況を逆転するために、さっそく1体のモンスターを召喚する。

「俺は手札からレベル4モンスターガガガマジシヤンを召喚する」

そして俺のフィールド上に現れたのは背中に「我<sup>ガ</sup>」と書かれた服を纏った男の魔導師。その姿はどこか昔にいた所謂「番長」と呼ばれていた存在にも見える。

「そして俺はレベル4モンスターが召喚に成功したことにより、さらに手札からレベル4モンスターカゲトカゲを準備表示で特殊召喚!!」

さら俺のフィールド上に登場した影で体を構成されたトカゲの形をした生物の姿に、しかしアカデミアの男は鼻で嗤う。

「はーそんな雑魚モンスター何体並べたところで……」

だが、俺はそんな男の言葉に構わずデュエルを続ける。——俺に文字通りの希望をもたらすそのモンスターを召喚するために。

「俺はレベル4ガガガマジシヤンとレベル4カゲトカゲでオーバーレイネットワークを構築」

するとガガガマジシヤンとカゲトカゲ。2体のモンスターが光と

なって、俺の上空に突如現れた巨大な渦へと飛び込んだかと思うと、その中から圧倒的なオーラを持つ光の戦士が現れた。

「No.39 希望皇ホープ」!!」

そして現れたのNo.39 希望皇ホープ。そう、ゼアル原作で九十九遊馬がエースとして使っていた「No.1」<sup>ナンバーズ</sup>と呼ばれる特殊なカードの1枚。そう、ゼアルの世界ではないこの世界では本来存在しないはずのカードだった。

そんなモンスターの登場に、アカデミアの男はその威圧感に圧倒されていたが、やがてホープの攻撃力が古代の機械巨竜の攻撃力より下だということを理解すると、冷や汗を僅かに流しながらもふっと嘲笑う。

「ふ、ふふふふ。随分ご大層なモンスターを出してきたと思ってみれば、攻撃力2500? は! そんな雑魚モンスターじゃあ、俺の古代の機械巨竜には勝てないぜ!!」

自身に満ち溢れた顔でそう高らかに叫ぶアカデミアの男の言葉に、しかし俺は顔に皮肉げな笑みが自然と浮かぶのを感じながらも口を開く。

「——それはどうかかな?」

「……なに?」

俺の言葉に、初めて余裕な態度を消して訝しげな言葉をあげるアカデミアの男。俺はそんな男の態度に僅かに溜飲を下げながらも言葉を続ける。

「俺は希望皇ホープで古代の機械巨竜を攻撃。「ホープ剣スラッシュ」!!」

「な!? 攻撃力が下のモンスターで攻撃だと!!」

アカデミアの男の驚愕の声にかまわず、希望皇ホープは古代の機械巨竜に対してその大剣を振りかざす。

「ばかめ、血迷ったか。返り討ちにしろ、古代の機械巨竜!!」

そして古代の機械巨竜は、アカデミアの男の指示通り、ホープをその場で迎え撃とうと口を開きかけた——その時だった。俺がホープの効果を発動させたのは。

「俺はここで希望皇ホープの効果を発動!!」

「なにッ!？」

「俺はホープのオーバーレイユニットを1つ取り除くことにより、ホープの効果を発動!!自身か相手モンスターの攻撃宣言時、その攻撃を無効にすることができる。俺はこの効果によりホープの効果を無効にする。「ムーンバリア」!!」

すると古代の機械巨竜に迫る大剣は止まり、ホープは古代の機械巨竜が迎撃のブレスを吐きだそうとする前に俺のフィールドに舞い戻る。

そんな俺の一見意味のないような行動に、アカデミアの男はしばし呆けたような顔をしていたが、やがて我に帰ると自分が舐められていると感じたのか、苛ただしげな声を上げる。

「……それで? いったい何がしてえんだお前は。そんな意味がない行動をして」

そんな男の言葉に、俺は思わず小さな笑い声を上げる。それは勝利を確信したからこそその笑みだった。

「いや、これでいいのさ。——これで勝利の方程式は整った」

「なんだと!？」

アカデミアの男のその驚愕の声に俺は笑みを浮かべながら、最後の手札。1枚の魔法カードを発動させる。

そう、この勝負を決める文字通りの——切り札を。

「これで終わりだ。俺はここで速効魔法「ダブル・アップ・チャンス」を発動!!」

ダブル・アップ・チャンス。それは自身のモンスターの攻撃が無効にされた場合にのみ発動できる強力な魔法カード。その効果はまさに必殺とっていいものだった。

「このカードはモンスターの攻撃が無効にされた場合にのみ発動できる。自身のモンスター1体を選択する。そして選択したモンスターはこのターン、攻撃力を倍にしてもう1度だけ攻撃することができるのさ!!」

「なッ!？」

「これで終わりだ。カードにされた皆の怒り、その身で食らうがいい!!」「ホープ剣・ダブル・スラッシュ!!」

そしてその俺の言葉と共に、ホープは古代の機械巨竜を真つ二つに切り裂き、そして古代の機械竜はそのまま爆発し、アカデミアの男を吹き飛ばした。

「ぐ、ぐあああああああああああ!!」

そしてアカデミアのライフは一気に0になり、デュエルは俺の勝利が確定する。

「…なんとか…勝てたか…」

そして俺は先ほどのデュエルで気絶したアカデミアの男を一瞥すると、カードにされた家族を懐にしまうと、他のアカデミアのデュエリストたちに見つからないよう、その場を移動する。——この世界を滅茶苦茶にした、アカデミアの連中に対する怒りをその胸に秘めながら。

「確か、アカデミアの連中に反抗するレジスタンスなんて組織の噂を聞いたことがある。そこにに入れてもらうことができれば…」

——これが俺とアカデミアのデュエリストたちとの長い戦いの始まりだった。

☆ ☆

### ■ 九十九遊馬

この小説の主人公。転生者。

名前、容姿、家族など全て「遊戯王ゼアル」の主人公である九十九遊馬と同じ。所持デッキも主に遊馬が原作で使っていたカードを中心としたビートデッキ。正しエクシーズモンスターはこの世界で唯一パックを買って手に入れたエクシーズモンスターのズババジェネラルとアカデミアの男とのデュエルの最中に手に入れた希望皇ホープのみ。(ただし徐々に増えていく)

しかし、転生した世界はゼアルの世界ではなく、実は「遊戯王ア

クファイブ」の世界のエクシード次元の世界。いろいろな判断材料からゼアルの世界ではないと判断し、安心して日々を過ごしていたのだが、融合次元の侵略にあい、家族がカードにされてしまう。

そして怒りのままに家族をカードにしたアカデミアの男にデュエルを挑んだが、しかし逆にあと一步で敗北という状況に追い詰められてしまう。

そしてあまりに絶望的な状況に諦めかけたが、カード化された家族の姿を再び目にし、アカデミアへの怒りに燃えあがり、力を欲した結果、なぜか本来アークファイブの世界に存在しないはずである希望皇ホープのカードを手に入れ、そしてそのまま希望皇ホープと速効魔法ダブル・アツプ・チャンスとのコンビで状況は逆転。アカデミアの男に勝利した。

そしてその後黒崎やユートと同じく、レジスタンスに入り、彼らと共にスタンダード次元へと侵入することに。